

地 域 交 流 研 究

2010年度

年報 第7号

目 次

—— 第7回地域交流研究フォーラム —— 『ボランティア』の力が地域を変える！

開始及び主催者挨拶	都留市社会福祉協議会 森嶋美子	2
.....	地域交流研究センター長 杉本光司	3
.....	都留市社会福祉協議会長 織田宗覚	4
基調講演	大橋謙策氏 (日本地域福祉研究所理事長、前・日本社会事業大学学長)	5
アカペラサークル ☆☆☆(みつぼし)によるコンサート		
事例発表・活動報告		
1) 「ボランティアひろば」	(下平佳樹氏、内田哲也氏)	23
2) 「都留市ボランティア連絡会」	(渡辺富士夫氏)	30
3) 「都留市まちづくり市民生活支援センター」	(清水王也氏)	34
社会福祉関連団体による食べ物販売コーナー、展示コーナー		
第4回「いこいのひろば」プログラム(クラブ活動)への体験参加		
まとめの会		38

—— 2010 (H22) 年度活動報告 ——

I. 2010年度の活動について (概況)	50
II. 各部門の活動	51
II-1. フィールド・ミュージアム部門	
II-2. 発達援助部門	
II-2-1. SAT事業	
II-2-2. 地域教育相談室	
II-2-3. 地域情報教育	
II-3. 暮らしと仕事部門	
III. インターフェイスとメディアの活動	74
III-1. 第7回地域交流研究フォーラムの開催	
III-2. 各種講座の開催	
(1) 都留文科大学現職教員教育講座	
(2) 都留文科大学市民公開講座	
(3) 県民コミュニティカレッジ講座	
III-3. 『地域交流センター通信』の発行(概況と第18・19号)	
III-4. 科目「地域交流研究Ⅲ」の開講	
IV. 地域貢献活動	85
IV-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会	
IV-2. 都留市子ども教室事業	
IV-3. ボランティア広場	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	92
V-1. たんぼクラブ—稲作体験実習の取り組み—	
V-2. 大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査	
(付) 2010 (H22) 年度地域交流研究センター担当教員・運営委員	98

第 7 回地域交流研究フォーラム

『ボランティア』の力が地域を変える！

2011年1月30日（土）

都留文科大学

司会者挨拶

都留市社会福祉協議会 森 嶋 美 子

森 嶋： 皆様にお会いがございます。携帯電話をお持ちの方はマナーモードにさせていただき電源をお切りくださるようお願いいたします。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

まもなく、開会となりますが、この時間をいただいて、本日の日程につきましてご案内をさせていただきます。正面のスクリーンをご覧ください。午前の部といたしまして10:05から11:25まで、基調講演を行います。11:25から11:35まで、ミニコンサートを行います。



11:35から12:35まで、事例発表：活動報告を行います。

次に、午後の部をご案内させていただきます。13:30から15:20まで、いこいの広場プログラムへの体験参加を行います。パティシエクラブは1号館105教室、レクスポークラブは体育館、音楽クラブは2号館101教室、チャレンジクラブは2号館102教室で行います。15:30からまとめの会をこちらの教室で行います。続きまして、昼食、昼休みのご案内をさせていただきます。食べ物販売コーナーを開設いたします。11:00から13:30まで2号館前ロビーにて開設いたします。本日は一期一会、みとおし、マツダヤ、かじやさんの出店によりまして、カレーライス、おからコロケ等様々なものをご用意してございますので、どうぞ皆様、各自、ご利用ください。尚、お手元に日程 資料をお配りしてございますので、どうぞ皆様随時ご確認ください。

それでは、ご来場の皆様、定刻となりましたので、只今からお手元の日程によりまして、第7回地域交流研究フォーラムを始めさせていただきます。

わたくしは、本日の司会を務めさせていただきます、都留市社会福祉協議会の森嶋美子と申します。どうぞ皆様よろしくお願いいたします。

開会の挨拶

都留文科大学地域交流研究センター長 杉 本 光 司

杉 本： おはようございます。皆様、本日はようこそお出でいただき、ありがとうございます。

ただ今、ご紹介にありましたように、本学の地域交流研究センター長を、一昨年の4月からさせていただいております杉本と申します。私自身は、情報センター所属の教員として情報教育を担当しております。このセンターとの関わりは、発達援助部門の1つであります、地域情報教育という分野で、地域の小中学校の情報教育を通して参加させていただいております。

また、ここから非常に近い十日市場で生まれ、育ったという事もあり、地域のために働けということで引き受けさせていただいております。

さて当センターの年間最大の行事として受け継がれております、この「地域交流研究フォーラム」も、本日、ここに第7回目として開催することができました。特に今年は、私たち地域交流研究センターだけでなく、都留市社会福祉協議会も共に主催ということで参加していただくことにより、今後に向けて更なる展開を期待できるものと感じております。

そして本日のフォーラムのプログラムですが、午前の部は引き続き、この会場で「ボランティアの力が地域を変える」のテーマのもと、基調講演者として大橋謙策先生には、私たちの突然のお願いにもかかわらず、ご快諾いただき、本日お迎えすることができました。また、3年目を迎えましたボランティアひろばの創立時から関わり、この3月に卒業する下平佳樹君と内田哲也君、10周年を迎えました都留市ボランティア協会の渡辺富士夫会長、都留市における市民活動を推進し、そして、市民交流を促進する都留市まちづくり市民活動支援センターの清水王也会長。この3件の報告に対しても、皆様、快くお引き受けしていただきありがとうございました。

午後のプログラムでは、私たちが毎月行っている「いこいのひろば」のプログラムから4つのクラブ活動が用意されており、皆様の体験参加をお待ちしております。

地域交流研究センターが「ボランティア」というキーワードで地域との交流を始めて3年。本日ここに、このように盛大に開催できますこと、これまで地道に成果を積み重ねてこられた関係者の方々のご努力、そして本日この会場にお出でいただきました皆様を始め、力強く支えて下さいました多くの方々に対して深く感謝する次第でございます。

それでは、これから16時までの時間、大いに楽しみ、大いに交流していただき、お帰りの際には、何か一つでも感じていただければ幸いです。

それでは、第7回地域交流研究フォーラムの開催にあたっての始まりのご挨拶とさせていただきます。



主催者挨拶

都留市社会福祉協議会長 織 田 宗 寛

織 田： 改めましておはようございます。

主催者の一人といたしまして都留市社会福祉協議会を代表させていただき、一言、ご挨拶をさせていただきます。

本日は大変お寒い中、またご多用の中、第7回地域交流研究フォーラムに関係者多数ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。このフォーラムの開催にあたりましては、都留文科大学地域交流センターの杉本教授をはじめ関係各位には種々

ご高配をいただきまして本当にありがとうございます。さらに実行委員会を組織されまして企画から本日の開催まで大変なお力添えをいただきました都留文科大学ボランティアひろば（ボラひろ様）などによる、「いこいのひろば」プロジェクトなど、関係者多数のご支援をいただく中で開催されますことを開始に際しまして、忠心より厚く御礼を申し上げる次第でございます。特に本日は、我が国の社会福祉分野の第一人者であります日本地域福祉研究所の理事長様であり、日本社会事業大学大学院特任教授であります、大橋謙策先生には、公私ご多忙の中、このフォーラムの基調講演をご快諾いただき、スケジュールを割いていただきましたことに対しまして、厚く御礼を申し上げるしだいでございます。先生には本日のテーマでございます、「ボランティアが地域を変える」と題したご講演をいただくことになっております。私どもをはじめ皆様の今後の活動の大きな指針になるものと確信をしているところでございます。さらに本日のプログラムといたしまして、先ほどもご紹介がございましたけれども、ミニコンサートや3つの事例発表と活動報告。また、「いこいのひろば」プログラムへの体験参加、お昼には社会福祉関連団体の皆様によりまして腕によりをかけた特色ある食べ物の販売コーナーなどの企画が予定をされております。終日多彩なプログラムとなっております。本日のフォーラムを通じてボランティア活動が多くの方々に理解されまして地域に根差したものとしてさらに充実することを願っております。

最後になりますが、このフォーラムの開催に多大なご協力をいただきました関係者の皆様に再度感謝を申し上げますとともに、ますますのご発展とご健勝を祈念させていただきます。一言ご挨拶とさせていただきます。本日はどうもご苦労さまでございます。



ボランティアが地域を変える！

日本地域福祉研究所理事長 大橋 謙 策
前・日本社会事業大学学長

司 会： それでは只今より基調講演をはじめさせていただきます。ここで本日、講師を務めていただきます、大橋謙策先生をご紹介させていただきます。お手元の基調講演資料3ページにございますよう、先生のご功績は多岐にわたっております。とくに社会福祉、地域福祉における日本の第一人者として長きにわたりご活躍されていらっしゃいます。大橋謙策先生を本日この場にお迎えし皆様にご紹介できることは大きな喜びでございます。それでは大橋先生よろしくお願いいたします。



<拍手>

大 橋： おはようございます。只今ご紹介いただきました大橋でございます。

この都留文科大学は今日で2回目でございます、1回目は大田堯学長の時に、都留文科大学の大学の在り方を論議する機会に呼ばれまして、教育と福祉を結合することが必要ではないかという風に大田先生が考えたらしくて、私に話をしようということがありました。もう今から30年ぐらい前になるのでしょうか。今日は2回目ということでございます。

今、大学は、社会貢献、地域貢献が求められておりまして、大学が象牙の塔にこもって、ただ教員の研究成果を学生にただ伝えるだけではだめだ、もっと社会的な活動をするのが国の政策であり、文部科学省の政策でございます。そういう意味では、今日の都留文科大学が第7回目になる地域交流研究センターのこのセミナーはとってもおもしろい重要ではないだろうかと考えております。今日は都留市の社会福祉協議会の織田会長をはじめ多くの関係者様がご参加いただいて本当にうれしい限りでございます。学長をやった者としては、日曜日のこの寒い時にこれだけの多くの方々が参加いただいているというのは、本当に願ってもないことでございまして、私からも心から厚く御礼申し上げる次第でございます。今日は山梨県社会福祉協議会の田邊地域福祉課長や山梨県ボランティア協会の岡副会長のご参加をいただいております、とても嬉しい限りでございます。このような大学と地元の社会福祉協議会が共同して山梨県を豊かにしていくという活動がますます発展することを願っております。そんなことを思いながら、これから、与えられた時間、話をさせていただきたいという風に思っております。今日、私に与えられたテーマは、『ボランティアが地域を変える』というテーマでございまして、これから話す内容は、お手元の資料のですね、先ほど紹介いただきました私の略歴のところを見ていただきますと、一番下の方に、「主な著書」と書いてございますが、そこの下から一番下でございますが、『地域史の新たな展開とコミュニティソーシャルワーク』というのがございます。

す。こんな薄っぺらなブックレットですから、もし機会があれば取り寄せて読んでいただければ、これから話す内容が書いてあります。またその1つ上の『社会福祉入門』というものは、これは、テレビで、私が放映しておりますので、そんなものを参考にしていただければ、今日の話も補足していただけるのではという風に思っております。放送大学のテレビをまわしていただきますと、多分金曜日だったかな…私が出てくるかと思っておりますので、どうぞ機会があったら見ていただければということでございます。

今日与えられたテーマ、『ボランティアが地域を変える』ということで、大きく4つの柱を立ててみました。1つは、戦後日本における再建の問題点、どうも私どもは社会福祉といった場合のとらえ方が間違っていたのではないかとということ、1つ皆さんと話をしてみたい。2つ目には、20世紀の社会の仕組みを変えないと21世紀はやっていられないのではないかとということでございます。3番目には、今日の狙いでもございます、ボランティア活動というものを考えるということ。4番目は、これからの地域作りはどう進めたらよいのかということで、話させていただきたいと思っております。まあ1つ1つの柱が、ある意味、何時間もなければ話せないことですので、十分深められるかわかりませんが、とりあえず、これからのことを考えるということで、問題提示させていただければと思っております。

Ⅰ、戦後日本の再建におけるいくつかの問題点

まず、最初に、戦後日本における再建の問題点ということですが、日本は「ゆりかごから墓場まで」の福祉国家体制というものを目指してやってまいりました。学校の教科書でも「ゆりかごから墓場まで」というわけですが、その社会保障体制が、実は今大きく揺らいでいるわけですし、どの政党が政権をとってもこの社会保障の制度設計を立て直すことは大変容易なことではありません。文字通り国民1人1人が日本の今後の社会保障の在り方をどうするかということを考えない限り単なる人気取りでやれるような問題ではないわけでございます。菅総理も6月までには社会保障と税の立体的改革を提案したいと言っておりますが、本当に1億2千万の国民が真摯に論議をしなければ、この問題は解決できない程、実は、戦後初期に作られた社会保障の制度設計がもうズタズタになっているわけでございます。そもそも、戦後初期1950年に作られた日本の社会保障制度審議会の勧告に基づいて進んできたわけですが、その当時は、男性が外で働いて、女性が家事、育児、介護をするということを前提にした家庭像で、日本の社会保障は設計されているわけでございます。そして、外で働いている男性が40年近くずっと年金を納める、社会保険料を納めるということを前提として、右肩上がりの経済成長が続くということが前提とした設計なわけでございます。しかし、男性が外で働くという状況が国際化の中で完全に変わってきてしまっているわけでございます。昨日、一昨日の新聞にも…昨日でしたか、新聞に出ていましたけど、例えば、中国とかベトナムに派遣されている日本の男性は、中国でも社会保険料を納めなければなりませんし、日本でも納めないと自分の老後は保てないという矛盾が出てきているわけでございます。メキシコをはじめ、ドイツ、イギリスなどいろんな国で社会福祉に関する協約を結んでおりますが、かつて1950年頃は、日本国内だけを前提にしているわけです。ところが、今働いている人は、国際的に動いているわけですから、国際的な労働力の移動というものが視野になれば、社会保険は設計できないわけですし、1つ

の企業に40年間勤められるかどうかなんて考えられないわけです。企業の買収などいろいろなことがあるわけですから、とてもどだい無理でございます。しかも、女性が働かないでいるなんて、そんな家庭モデルもないわけですし、当然、多くの人が社会参加することになってくるわけです。そうしますと、結果的に、子育てや介護の問題については社会的にやらざるを得ない。そのことを考えますと戦後初期の男性が外で働いて、右肩上がりの成長の中で40年間勤めて社会保険料を納めるであろう、女性は家にいて育児と介護をやってくれるであろう、というその前提は完全に崩れているということになります。そのようなことが1つでございます。もう1つは、戦後日本の社会保障は、イギリスに学んだんですけれども、イギリスの学び方を間違えたとは思っているわけです。1つは、日本が参考にしたのは1942年イギリスのベヴァリッジという人が委員長でまとめた「社会保険及び関連サービスについて」と題するレポートが、報告書があるわけですが、それを参考にして日本の戦後は作られました。ところが、そのベヴァリッジという人は、1948年に「ボランティアアクション」という報告書を出しているわけです。国民が求める安全と安心な住みやすい社会というのは、政府がいくら頑張ってもできない。政府行政の責任は明確にするけれども、一方で、国民1人1人は、あなたはボランティアするんですか？しないんですか？国民1人1人のボランティア活動が無ければ、国民が求める安全と安心の社会は作れないと言っているわけです。ところが、戦後日本の社会は、残念ながら、そのイギリスのボランティアアクションという1948年のレポートを学びませんでした。アメリカのケネディ大統領が大統領の就任式の時に国民に向かって『国家に何をしてもらおうかではなくて、あなたは国家に対して何ができるかということを考えてほしい』という大変有名な演説をいたしました。今回のオバマ大統領も同じ様な趣旨の演説をしているわけでございます。国家に何をしてもらおうかではなくて国民1人1人が国家に何をできるか、社会に何をできるかということの問題にしている。その考え方は1948年に既にイギリスであったわけです。ところが日本は「戦後全て社会福祉・社会保障は行政がやるべきだ、国がやるべきだ」みんなそこに求めたわけです。なにかあると国が悪い、当時は政府自民党が悪い、今だと民主党が悪いという風に言っていて自分は関係なく行政や国の責任ばかりを責めるような、実は文化を作っちゃったわけです。行政がやるべき責任の部分と国民1人1人がボランティア活動するという、この車の両輪が無ければ、国民が求める安全と安心の社会は作れません。ということをイギリスは歴史的にずっと言っているわけです。後ほど、またお時間があればお話をしますが、1601年のころから、このことを伝えているわけです。ところが、日本は何でしょう？何でもかんでも行政がやるべきだ。しかも、それは社会福祉はタダでやるべきだ。国民は貰う文化を告発する文化だけを作っちゃったわけです。それは無理もないことなのですが、実は憲法89条という大変厳しい、実は規定があるわけでございます。社会的にみても、こんな規定がなんで憲法で作られたのか？私は憲法改革論者では決してありませんが、もし改革するとすれば89条だけは絶対に変えてほしいという風に思っております。それはどういうことかという、公の支配に属さない宗教博愛慈善教育活動に公の金を支出してはならないということでございます。公の支配に属さない宗教博愛慈善教育活動に公の金を支出してはならない。解り易く言えば、私立大学にお金を出しちゃいけないよ。住民たちがボランティア活動を行うのに行政が補助金を出してはいけないよ。厳密に言うとなんかそういうことです。実は1970年まで私立大学に補助金は出ていませんでした。社会福祉の分野でも実は補助金はほとんど出ていませんでした。そういう、いわば憲法89条の規定があって、これにとらわれて我々は全部

行政がやるべきものだという風な文化を作りあげてしまったということが問題点でもあります。もうひとつ大きな問題は、私どもは教科書で自由と平等を教わるわけでございます。しかし、博愛というのは教わってきませんでした。都留文科大学の教員養成の時に「博愛」というのを教えるのでしょうか？フランスは自由・平等・博愛が対になっているわけです。フランスの三色旗は自由と平等と博愛を物語っているわけです。封建的な身分差別の時代は職業選択の自由ありませんでした。宗教の自由ありませんでした。居住の、居住地選択の自由ありませんでした。もう生まれながらにして、その地域を外れてはいけません。その居住地を外れるということは、その地域で土地を耕して農作物を作らないわけですからそれは支配層にとっては大変困ることになります。したがって生まれた所の土地を離れた者に対しては、酷いのは、おでこに烙印を押すわけです。この人は逃げ出したということでそれをスティグマと言います。江戸時代の日本には「チョウサン」という言葉がありました。そのヨーロッパほどひどくはありませんでしたけども、土地に縛りつけて土地を耕して農作物を作らせることが実は大変重要な領主のいわば権限であり役割であってそこから税金、年貢を納めさせて、ということになるわけです。ですから土地を耕す人がいなくなったら困りますから逃げ出すというのは大変な罪だったわけでございます。そういう居住地の選択の自由もないわけです。職業選択の自由もない。婚姻の自由もない。そういう状況に対して、多くの国民が、それは不都合だ、この世に生きとし生けるものはすべて平等であり、自由でありたいという自由と平等を求めるわけでございます。その結果、1789年にフランスの市民革命と呼ばれるものが成立をするわけでございます。日本はそれを学んで憲法13条で「何人も幸福を追求する権利があり何人もそれを侵してはならない」。憲法14条で「すべての国民は法の下で平等」ということを謳ったわけです。正に自由と平等を日本国民は憲法で保障され満喫をしているわけでございます。それを教科書で教えるわけです。ところが、フランスは自由と平等を得たいという風に考えた時に非常に苦悩するわけです。それは何か？全ての人が生まれながらにして幸福を追求する権利があり、自由と平等を享受できる、すごい理念、崇高な理念です。でもちょっと考えてください。生まれながらにして障害を持って生れる人がいますね。生まれながらにして知的判断力を持ってない人がいますね。生まれながらにして労働ができない人がいますね。その人たちの幸福追求権は否定しますか？皆さん、あなたは障害を持っているから、幸福を追求してはいけません。私は、障害を持っていないから幸福を追求できるし、自由で、平等だ。では、その障害というのは何を基準にして誰が判断するのでしょうか。そういうことを考えたことがあります？皆さんは自分の自由と平等が欲しかったら、この世の中には、自ら自由と平等を行使できない、生まれながらにして障害を持って生れてくる人がいることを考えなくてはいけないわけです。考えてくれますか？ですから、自由と平等を教えれば教えるほど、あなたは、「カラスの勝手でしょ」じゃないですよ、あなたの自由と平等というものを欲しければ、社会には生まれながらにして障害を持って生まれてくる人がいる。その人の幸福追求権をあなたは考えなくちゃいけないんですよ。そしてその人の幸福を追求することを肩代わりしてあげなくちゃいけないんですよ、ということをお教えなくちゃいけないわけです。それが博愛なわけです。全部自分のものじゃないんですよ。ところが、日本は「借景」という言葉に代表されるように、自分の庭を外には見せなくて、外の景色は自分のものにしちゃうなんて、自分の物は自分の物、外の物も自分の物、こういう文化なんです。ドイツなどでは、カーテンと窓ガラスの間に花を置いて、外の人が花を見られるような家を作るわけです。アメリカなどはほとんど塀が無くて、広いというこ

ともあるかもしれないけども、それは地域と自分とのつながりを大事にしているわけです。日本はみんな囲って、ちょっと土地があるとね、石垣を作るわけです。もうすこし土地と金があれば、多分お濠を掘ったんじゃないでしょうかね。(会場内 笑)

そういう文化にしちゃったわけです。つまり人を入れないで自分のものは自分で囲い込んでいて、できれば、人の物は自分で使っちゃおうという、実に、なんかさもしいというか、なんか文化になっちゃった。だから、もし戦後、教育の中で自由と平等を教えるのだとするならば、博愛を教えなくちゃいけなかった。カラスの勝手でしょ的な自由と平等はありえない。日本は酷いことやったわけですが、明治時代に、アイヌの人たちを「旧北海道土人」に言って「旧北海道土人保護法」を作り、ついこの間までその法律は生きていたわけです。ついこの間まで、アイヌの人たちを差別してまいりました。だけどアイヌの人たちは自分が狩りに行って鮭を捕ってくる、なにか獲物を捕ってくる、野菜を採ってくる。そのとってきたものを全部を自分は使わないんです。とってきたものの1/10は村の長に納めて、狩りに行かれなかった人たちに分配するわけです。体が不自由になって怪我をして狩りに行かない人もいるかもしれない。夫が死んで乳飲を抱えた母親がいるかもしれない。年老いて狩りに行かない人がいるかもしれない。その人たちを支えるために自分がとってきたものの1/10を必ず村の長に納めるという文化を持っていたわけです。何が旧北海道土人保護ですか。今はブラジルの少数未開民族という、未開が果して何を持って未開というのか、っていうのがありますけれども、未開民族と言われる人たちも、狩猟文化で、その人たちも実はとってきたものを全部、弱肉強食で自分だけで全部消費をするということはしません。そういう文化を何で日本は持てなかったんでしょう。弱肉強食なんて言葉がはびこるような、今の社会っていうのは何でしょうか？カラスの勝手でしょうという社会は何でしょうか？私は自由と平等というものを欲したければ、それは、あなたが、必ず自分の人生の時間・労力・お金・財力の一部を必ず社会のために使う、社会に還元する、それがあってあなたの自由と平等は保障されるし、あなたは生かされているんだ。この教えをなぜしてこなかったんだ？戦後は、酷いもんだと私は思いますね。教科書の中に「博愛」なんて一言も出てこないんです。皆さん、ミレーの『落ち穂拾い』という絵をご存知かと思います。あの落ち穂というのは、夫を亡くし子どもを抱えている、いわゆる母子家庭の母親があの落ち穂を拾う権利を持っているわけでございます。かわいそうだからお金をあげるんじゃないくて、あなたもそれなりに仕事をして自分で生活しなさいよ、だけど落ち穂を拾う権利を与えますよ、農民は意識して、ある意味では落ち穂を落とすわけです。そうゆう社会のシェアの文化、分かち合う文化、そういうものを考えたわけです。これはもう崇高な理念です。どうしても人間というのは自分がかわいいわけですから我が田に水引くわけです。エゴイスティックなわけです。そこでフランスは、ちょうど市民革命の時にコンドルセンに代表されるように、そういう分かち合う博愛ということを身につける。それは優れた理性である。なかなか感性や互生のレベルではない、理性を身につけることさえ大人も必要なんだ。だから大人の公教育、公の金、大人がしっかりと判断力を持ってやっぱり社会で判断できる力を持たなければ社会は良くならない。大人の理性を豊かにするために学習ということを公教育で保障しよう。この最たる人がコンドルセンという人でございました。この教育計画案のことも、ぜひ、勉強を都留文科大学の学生など勉強して欲しいと思います。私なども学部学生の時にそうゆう本を読まされて、福祉というのはかわいそうだからしてあげるなんてことではないということを教わってくるわけでございます。こんなことを考えますと、どうも戦後、制度設計というのはイギ

リスの学び方も間違えたし、フランスから憲法の理念を学び、教育思想をフランスから多く学んだにもかかわらず、学び方がどっか十分ではなかったのではないか？それらのツケが60年間経って、高度経済成長の右肩上がりの時には、そういう矛盾というのはなかなか見えてこないけれども、国際化が進み、右肩上がりじゃなくなってきた、こういう状況の中でもろに出はじめているというのが、今日の状況でございます。これは誰が悪いとか誰が良いとかそういうレベルではないと、本当に社会をあげてもう一度社会システムとどうあったらいいか、社会哲学はどうあったらいいか、ということを考えない限り、単純に、自民党が悪い、民主党が悪いなんてレベルでの事柄で済むものではありません。大人1人1人がきちんと学習すること、そして判断力を身につけること、そういうことが改めて今問われていることだということを是非この機会にお考えいただければありがたい。

II、20世紀の「タテ社会」から21世紀「ネットワーク型ヨコ社会」への転換

じゃあ、2番目にそういう状況の中で、我々のDNA、無意識の感覚っていうのは、生活の様式っていうのは何か？というと、私は皆さんにも農耕文化に非常に色濃く規制をされたDNAであり、文化であり、行動様式になっているという風に思っているわけです。文化勲章を受賞された中根千枝先生という東京大学で初めて女性教授になられた方ですけれども、この中根千枝先生が、インドと日本を比較して社会構造の在り方を研究されたわけです。その中根千枝先生が言うのは、『日本は縦社会である』ということです。中根先生は「場と資格」という分析概念を使っているわけですけれども、日本は場の社会だ。私なりの言葉を使えば、枠組みで仕事をする。枠木に縛られて、これは強い。だから枠木の中にいれば、安住できるし、その代わり、長いものに巻かれろだよと、また枠木の中にいるのだから、出る杭は打たれるよ。枠木を壊すようなことを言ったら、出る杭は打たれるよと、いつも枠木の中で仕事するわけです。肩書きで人を見るわけです。肩書きで評価するわけです。肩書きが無くなったって人間としては全然変わらないのに、肩書きが無くなると、あたかも自分の人生が、人間性が、否定されたように錯覚する。とくに男性群は肩書き世界に生きてましたから、肩書きが無くなると、あたかも人間が失格したかのような、そういった錯覚に陥っていくという問題を抱えているわけでございます。それを中根先生の縦社会というのはなぜできたかということですが、私の理解で行けばまさに稲作農耕文化がもたらす文化・社会構造ということになるわけです。工業というのは、実は労働力と原料があれば、どこに工場を作ってもいいわけです。どこでも。かつては我々の時代は、臨海工場地帯というのを習うわけです。東京湾の臨海に重工業が整備されている。段々変ってきて、今や、空港の傍が、インターチェンジの傍が、実は工場地帯になっているわけです。ところがもう今や日本の工場は、中国へ行きました、中国の労働力がグッと高くなりました。今、ベトナムでございます。ちょっと皆さん着ているものを気をつけると、バングラデシュになったりします。私も、ついこの間、去年、ちょっとお遍路に行って靴を買いました。良い靴だと思ってひょいと見たら、ベトナム製でございました。日本の品物の多くは、今や日本国内で作られているものよりも、実は、中国やベトナム、ラオス、バングラデシュ、そういう時代に今なっているわけです。安い労働力だって原料さえあれば、工場はどこにあってもいいわけです。先ほど言いましたように、私の兄にも言うんですが、子ども2人いるから大丈夫だというんですけれども、なんと、子どもたち

はインドに長く駐在している、ブラジルに駐在している、待ってもそのままずっとインドやブラジルに駐在したまま日本に戻ってこないかもしれないですよ、今の若い人たちは。なのに、自分の老後は子供たちにずっと見てもらおうとしたくて、子どもが帰ってこなければ、いくら遠距離介護したって、ブラジルやインドから帰ってこられるわけないでしょ？ だけど、まあ意識の中には子どもがいるから大丈夫だ、何か生活の事故が起きない限りわかんない。私の住んでいる東京稲城市で、1人のお年寄りが実は孤独死をする事件が今から何十年か前にありました。大変心配になりました。その地域の中の一人暮らしのお年寄りを訪ねていろいろ調査をしました。ある一人暮らしのお年寄りが、男性ですけども「うちの息子はもうほんと親孝行で大丈夫だ」って言うもんですから本当にそうなのかなあという風に思ってたんですが、やはりその後、孤独死が何人か続くので、今度はただ大丈夫かというチェックだけでなく、差支えなければ、どこでお住まいですか？ あなた様が万が一の時には何分で駆けつけられますか？ 駆けつける交通手段は歩きですか？ 自転車ですか？ 自動車ですか？ 電車ですか？ ということを聞こうということで聞いたら、その「息子は親孝行だから大丈夫だ」という風に我々に言っていた人の息子さんはどこにいますか？ アメリカにいたことがわかりました。一人息子で、アメリカで、万が一の時どうやって対応するんだろうと、家族がいるということはいくら言われてもその家族は本当に駆けつけてくれる家族ですか？ 駆けつけられないところに住んでいる家族ですか？ 気持は飛んでいきたいということはわかるけども、物理的に距離的に無理でしょ？ ということを言わない限りその方々は納得しないわけです。「家族はいる、血のつながっている」こういう言い方をするわけです。そうじゃないわけです。これらの問題を考えてみてですね、どうも日本の社会が作り上げてきた日本人が持っている意識・文化っていうものの見直しをする機会です。そもそも日本人が持った文化、DNAというのは、稲作農耕文化によって作られていますから、共同性と土着性というのは非常に強いわけです。田んぼっていうのは移動できませんでしょ？ 移動できないんです。田んぼにしがみつからない限り飯は食えないわけです。ですから、鎌倉のような時には一所懸命、一生懸命ではなく一所懸命なんです、それは田んぼなんですよ、田んぼにこだわって、田んぼからあがる生産物をどう享受するかっていうのは実は大きな課題だったんです。だから日本は血のつながりというよりは養子縁組です。家は、田んぼを所有する家は代々続いているけれども、その家は必ずしも血のつながりがあるとは言えないわけでごさいます。田んぼを所有する家の流れなんです。これはもう中国や韓国は違うわけです。中国は相続って言って、血のつながりが非常にわかるものを名簿を持っています、韓国はホンガンという血のつながりを持つ、わかるものを持っています。日本の家系図なんてレベルじゃないわけです。だけど日本は家…家が、家族がいると、その家や家族っていうのは、その田んぼなんです。だから、封建時代とか、農業中心の時には、田んぼも家も家族も全部一緒ですから良かったわけです。だから、こんな工業社会になると改めて「家」となるんです。家族となるってことを考えなければならぬのに、われわれのDNAは、「家族がいます、家があります。」こういうわけです。今、家なんていうのは、正直なところ、なまじっか親から相続されてもその維持管理に困るなんて人がいっぱい出ちゃってるわけでしょ？ 正直な話。ところが昔だったら田んぼを耕す近くに家がなかったら、困っちゃうわけです。というその土着性ってことになります。一方で共同性っていうのは、農業用水を確保するために、山の上から、水をずっと引いてくる、田んぼを増やすために段々畑を作る。こういうことを考えたら、共同しない限り、田んぼを維持、発展できないわけです。皆さんの中に残っているでしょうけど、

「結い」っていうのがあります、沖繩で言えば「結周り」です。あれは、田んぼの手入れや刈り入れをする時に、文字通り労働力を収束しない限りやれないわけです。あの労働力のやり取りが「結い」なわけです。こういう言葉に代表されるように、非常に共同性が強い、土着性が強い結果的に仲間内枠組みの中の人たちはもうベタベタの関係、輪をするその地域全部が親類だったりするわけですからね。そういう地域ですから、外の人間が来ることに對しては、非常に排他的になります。私が今でも忘れないのは、私の妻、山形出身なんですけども妻と結婚する時に妻の母親が何を言ったか。「旅の人と娘を結婚させられない」。僕は旅の人か…（会場 笑）ということですよ。

私は東京の稲城市に住んだ時に、もう40年前に住んで地方自治功労章を市からいただいているような地域活動をやってきたというものを持っているわけですが、地域の人から見ると、大橋さんはまだ旅の人なんです。つまり、田んぼを持っている人は、土着の人なんです。田んぼを持ってない人は、みんな旅の人なんです。これは結構、実は大きな歴史でして戦前の京都大学の名誉教授の木田貞吉先生という人が書いているんですけども、大宝律令の時に、口分田、田んぼをもらった人が公の民なんです。口分田をもらえなかった人だったら公の民じゃないんですよ。賤民なんです。世俗か賤民なんです。公の民をもらった人だけが…口分田をもらった人だけが公の民なんです。公民です公民。その公民の名前は姓はいっぱいあるわけです。それで口分田を耕してる農業をしている人を百姓と呼ぶのはそこから来ているわけです。百の姓なんです。まあ姓がいっぱいありますよ。口分田を支給されて、口分田で農業やる人のことを百姓といったらそういうことから来てるわけですね。なので日本はいかに田んぼというものに固執したかということです。それはそうですよねえ、今日のように物流が盛んじゃない時っていうのは、田んぼであがる米しか、食べるものないわけです。だから皆さんは、富山とか岐阜のあの五箇の掌で代表される合掌造りいいと思うかわかりませんが考えによっちゃすごい悲惨なわけですよ。長男は結婚するけれども、二・三男は結婚できないで同じ家に住むわけでしょう？それは田んぼでお米で養える人数っていうのは限られてますから、だから長野であれ、岩手の遠野であれ、姥捨て伝説があるわけでしょう？働けなくなったら、おにぎり、少々物を持って自分から山に行くわけでしょう？死に行くわけですよ。田んぼっていうのは、とってもきれいだし素晴らしい、日本の農村地帯の中で作られてきたけれども、その土着性と共同性が非常に強固になります。だから、その共同性を壊す、枠組みと場を壊す人は、出る杭は打たれるし、村八分なんです。村八分です。その代わり、枠組みの中にいたら、それはみんなで支えましょう、寄らば大樹の影、これが我々に、日本人に長らく培われたDNAです。岩手県のそのずっと国民保険の仕事をやっていた大村亮さんが、1968年に『物言わぬ農民』という本を書いてます、農民は物を言えない、言ったら叩かれる、外される、ということなんです。で、上意下達的になるんです。残念ながらこれが農業社会の生み出した社会構造であり文化なのでございます。お隣の韓国の文部大臣をされたイ・オリョウ先生という方がいらっしゃいますが、そのイ先生が書いた本の中に『縮み志向の日本人』というのがございます。伸びようとするものをみんな縮めちゃう、枠にはめちゃう、だから四角いスイカなんか作っちゃうでしょ？四角い竹なんか作っちゃうでしょ？みんな枠にはめると言うんです。だから、最たるものは、盆栽だって言うんですね。それは、日本古来のすごい伝統の文化です。言われてみれば確かに、みんな詰めて詰めて詰めてゆくわけです。全部内向きなんです。枠組みの中へ枠組みの中へだから、都留文科大学でどう教えているかわかりませんが、我々中学校の時に生徒

手帳もらう時に、あの生徒手帳っていうのは、何々をしなさいなんては書いてないんです。全部禁止事項が書いてある。何々をしてはいけません。禁止と命令で子育てされたわけです。みなさん、どうですか？子ども育てる時「あんた何やりたいと思う？それをもっとやらない？」っていうふうに励ますどころか、何かあると、しちゃいけないって全部枠にはめて、形のいい子どもを育てて、結果的にハングリー精神が無くなって、フロンティア精神が無くなって、何でもいいからやってやろうっていう小田実的な、そういう若者にならなくなっちゃったわけじゃないですか。安定志向が強くて、こんな不景気なのに、大手の企業に入りたい、でも大手の企業だって潰れるかも分かんないのに、安定志向ときている。外国へ行くのは嫌だ、留学はしたくない。だれが面倒みてくれるの？っていうことです。いつまでも思うのは、親であるにかかわらず、親のもとでニートでね、いるわけでしょ？こういう若者像を作っちゃったわけです。それでも高度経済成長の時は全体が発展しているからいいけども、今や少子高齢化で経済が停滞しているという状況の中では、このDNA的に作られている無意識のうちに我々の中で染み付いている。その意識っていうものを変えない限り、もう日本の社会はやっていられない。それは日本がだめだったということを使うんじゃなくて日本が作った素晴らしい文化であり伝統もあるんだけども新しい間尺に合わなくなっている。だから、もう一度1人1人の人間とは何なのか？1人1人の人間性とは何なのか？あなたは、何がやりたいのか？わたしはこれをやりたい。あなたのやりたいことと私のやりたいことは一緒になるよね？違いがあるよね？そういうことをきちんとしていかなきゃいけない。ところが日本人はレッテルを貼るわけです。高齢者、65歳の高齢者と100歳の高齢者が同じ高齢者になるわけじゃないじゃないですか！なのに、高齢者って言うんです。「障害者」って言ったって、肢体不自由のひと、視覚障害の人も、聴覚障害の人も、内部障害の人もいるのに、「障害者」って言葉を使っただけでわかった気になっているんです。1人1人を見ないんです、枠組みで見ちゃうんです。都留市民って言ったって、3万人って全部違うにもかかわらず、都留市民のなんとなく全部をわかった気になるなんて、それは無理です。1人1人違うんだから、今、大事なことは、1人1人の人間は違うよね？違いがあって当たり前だよね？ということなんです。ところが、どうもこれも間違っているのですけれども、戦前、聖徳太子の17条憲法が、いろんな間違っただけの使われ方をしたせいもあって、馴らそうよって言って、戦後ほとんど教えないわけです。しかも教えたとしても17条憲法の第1条しか教えてない。「和を以って尊しとなす」しか教えてない。私に言わせるとあれよりも大事なことは第10条です。「怒るな怒るな違ふ（タガウ）を怒るな」、ってこと。1人1人違ふよ、そのことに怒るなさんなよ、違いを認めたうえで「和を以って尊しとなす」なんです。日本の社会にもあったわけです。仏教と古来の信教と闘いがあったかもしれません。渡来人とずっと日本の列島に長く住みついた人の対立があったかもしれない。そういう対立があっても、当たり前なんだ、怒るなさんなよって「怒るな怒るな違ふを怒るな」、そのうえで「和を以って尊しとなす」なんです。だから文句を言っちゃいけないとか、意見を言っちゃいけないなんてことは、一言も言ってないわけです。違いがわかった上で、やっぱりお互いが調整し、調和を保っていくことの大事さを、私は、17条憲法で謳ったんだと思っているわけでございます。そんなようなことを考えると、その日本の文化には全くなかったわけではないけれども、多くの国民が、無意識のうちに持っている、家とか地域とか家族とかっていうのは農耕文化を中心とした農業中心とした社会の時にはまだ良かったけれども、これほど工業と国際化が進んでいる状況の中では、改めてそれらを見直しをして1人1人は何を求めているのだろ

うか？もう一度、1人1人は、どういう風に、お互いの違いを乗り越えて一緒に仕事をしようという風にやれるのかっていうのを、問われているのではないかっていう風に思うんです。そこで今日のテーマではありませんけれども、『ボランティアが地域を変える』ということなんです。

III、ボランティア活動の構造と性格

今日の資料の2枚目を見てください。これは1980年、今から30年前に私が起草したものでございます。私が全部文章を書いて、それを認めてもらったんですが、全国社会福祉協議会の「ボランティアの基本理念とボランティアセンターの役割」という報告書の中で使ったものでございます。ですが、そこで私が悩んだのは、上の方の図ですが、我々、ボランティア、ボランティアって言うけれども、ボランティアと市民1人1人の市民活動とのかかわりっていうのはどういう風に考えたらいいんだろうか？ということになるわけです。逆説的な言い方ですが、私は、「ボランティア活動を無くすために、ボランティア活動をやりましょう！」、という言い方をします。皆さんそんなこと考えたことがあります？それは、その頃、ゴミ拾いをしてクリーンボランティア活動なんてものをしていました。その時、いつも思うんですが、ゴミを捨てる人がいなければ、ゴミ拾いのボランティアなんてものはいらなわけです。隣近所に障害を持っていて何かの支援が必要と人がいた時に声をかけて「何かお手伝いすることある？」って「今日はいいわよ」「今日はこれやって」って言われたことが、自分でやれるならやってあげる。それ、ボランティアを意識しなくたってやってる人いっぱいいるわけじゃないですか。なんか私はボランティアやってますって片意地張って言うことないんじゃないか？要はすべての人がお互いの違いを認めて、だけど1人1人は人間だ、一緒に生きていこう。そのためにはどういう支援活動が必要かということ考えていただいて、声をかけたり、社会がよくなるような、ゴミを拾ってきれいにする、とかいう風なことを考えてくれればあえて、ボランティア、ボランティアと言う必要はないだろうっていうのは、私の一貫した思いです。だから市民活動が豊かにあれば、じつはボランティアの役割ってのはすごく少なくなってくるかもしれない。市民活動がだらしくなってくると、そういうことに気がついたボランティアの活動は多くならざるを得ない。じゃあ、あんまりボランティア活動が活発にあるということは、逆にその地域は市民活動がだめなの？という風な逆説的な見方をしとかないけないと思ってるわけです。決してボランティア活動っていうのは特別なものじゃない、その市民活動の中でのかかわりの中でボランティア活動を考えよう。じゃあ、その市民活動の中で考えようとする1つはその図の上の方ですが、地域の連帯教育力だとか、地域の福祉を支える力とか、住民自治能力だとか、ということが、当然出てくるわけでございます。それは言葉を変えていくと、上の図の右の方でございしますが、地域作り個別課題に対応するサービス、福祉計画づくりこういうことが実はボランティア活動に求められているわけです。隣近所に独り暮らしのお年寄りがいた時に声かけて、「何かお手伝いすることある？」、あるいは子どもがいれば、その子どもに声かける。昔は皆それで「おはよう」って挨拶して、声かけてくれてたわけでしょ？ある時に他人の子どもを叱るボランティア活動、なんでそんなこと言わなきゃいけないんだ？って思う、だけど今だって同じようなことあるわけでしょ？地域の子どもの登下校の見守り活動。ある意味では、地域の人が地域に住んでいる子どもをいつも目をかけて、声か

けて見守ってくれてれば、ボランティアなんて言わなくていいわけですよ。いかにそこには挨拶が無くなったか、ってことになるんじゃないでしょうか？さっきの話じゃないけど、皆ちょっと余裕ができてきてる、塀を作って外から見えない様にして、閉じこもり始めたわけですよ。しかも、ご丁寧に門のところは錠かなんかかけて、外から簡単には入れないようにするわけです。…でしょ？でインターホンでピンポーンなんてね、「どなたさまですか」って言ったら「隣のだれそれです」、「ご要件は？」、「おすそ分けを持って参りました。」(会場 笑い声) そんなことじゃ、おすそ分け持って行く気にならないでしょ？台所の所から声かけて「いるー？」とか言って、「ちょっといただき物貰ったけど食べきれないからおすそわけだよ。」そういう気軽さみたいなものがあつたはずじゃないですか？もうみんな塀作ると隣近所がだめになるわけです。京都大学の名誉教授だった西山卯三先生、建築学の先生が日本の都市計画、家屋の特色の1つは何か？というと、中間空間が豊かにあつたということです。中間空間。中間空間とは何か？というと、縁側、上がり框、土間、つまり日本の家屋っていうのは、靴を脱いであがるわけですね？座敷なり、家の中は。ヨーロッパなどは靴のまま入っていくでしょ？内と外っていうのは意外とつながるんですよ。ところが、日本は外と内とは違って、まず履物を脱がなきゃいけないわけです。わかります？ある意味、連続性がない、その非連続的な状況を緩和する役割を持ったのが、実は、縁側であり、上がり框であり、土間なんです。言われてみりゃ、そこでは、みんな縁側に腰かけて、家の中の人と話をしていたじゃないですか？回覧板を持ってって、上がり框に腰かけて家の人と話をしてたじゃないですか？今それが無くなっちゃったでしょ？ヨーロッパはそういう日本の中間空間の代わりに何を作ったかって言ったら、カフェ、パブです。パークです、公園だとか、みんなが集まるところを非常に作ってるわけです。だからイギリスのパブなんかに行けば、若者も来てるし、年寄りも来てるし、男性も女性もいるわけです。今、最近ずいぶん変わりましたが、日本の居酒屋行ったらほとんど男性ですよ。子どもなんてのは、来たら怒られますよね、当然。そういう人が集まるものが、機能がいっぱいあつたわけです。コーヒーハウス、それが実は、それは、イギリスやフランスの民主主義をとらせたわけです。小林章夫さんっていう人が『コーヒーハウス』っていう本を書いているんですけども、正にイギリスの民主主義、あるいは、文化は『コーヒーハウス』によって育てられたという風に、たまり場があるわけです。それらのたまり場、より所、内と外を繋ぐ空間、それが、日本だと、中間空間と称された縁側であり、あがり框であり、土間だったんです。ところが、建物が近代化して、中間空間全部なくなつたんです。では中間空間無くなつたら、それに代わる空間をどこに作るか？公園を作らないでしょ？居場所がありますか？サロンはありますか？これからの時代、発展していくサロンなんかは、まさにもう一度中間空間に代わるような、みんなの居所居場所を作らないと困るでしょ？っていう話になる。その機能を意識して作られたものは実は戦後の公民館だったんです。公民館っていうのは皆のたまり場であり交流の場であり、だから、公民館っていうのは、住民の茶の間であり、交流の場であり、学校だったわけです。いつの間にか、公民館は学校になって、研修がある時だけ鍵が開けられて、研修が無いと鍵を閉めちゃうなんてような変な話になってる。新潟の十日町の公民館なんてのは、公民館にお酒の歓喜があつて「冬は寒いからお酒を飲もうや」良いじゃないですか。ところが頭の固い行政職員が来ると「公民館で酒を飲むとは何事だ、教育機関である」「何を言っている、勉強してください。ちょっと前はそんなことやってなかったでしょ？」って、いうんだけど、段々締め付けて、結果的に公民館は会合がある時、明りがつくと

いう変なものにしちゃったわけです。結果、たまり場がどこにもないわけです、気軽に集まって、世代を超えて交流をするのが、皆さんの地域にありますか？家が閉ざされて、日本は世界の中で先進諸国の中で、自殺が多いのは異常なくらい日本だけです。こんなに毎年3万人以上の人が自殺をします。自殺で一番多いのは、自殺率が高いのは、秋田県です。皆さんは、一人暮らしのお年寄りが亡くなっているという風に思ってるかもしれませんが、実は、お年寄りの中で亡くなっているのは、3世代同居のお年寄りです。3世代同居のお年寄りは、家の中に居場所がないんですよ。青森や、秋田や、岩手や、山形、富山、そういうところで住民座談会やると、年寄りが入ったふろは汚いから、流して洗って、たてなおして若い者が入る。そんなのを3世代同居で毎日やられたら、年寄り居心地悪いよね？老人の体臭が、お風呂が汚い。皆さんのところ大丈夫ですか？ほんとにそういうのが住民座談会に出てくるわけです。だから一番最後の終い風呂に年寄りが入る。「えっ、何時？12時」「そんなまで起きてるの？」うなずいている方が、いらっしゃるけど、そういう住民座談会を、私共はずっとやっているわけです。まあ、きれいごとではない。ほんとに居場所がないんです。じゃあ「友達を呼んで、家の中でお茶飲み話をしたい」って思ったら、若い者たちは、「人を入れるな」という話になって排除される。3世代同居で年寄りの行き場所がないわけですよ。事実上にも、疎んじられてくるようになった時にどうしたらいいんですか？この都留でも、山梨でも、同じような問題があるんだと思います。我々は関連的にこうあるべきだなんて言ってるんじゃないくて、そういうのを住民座談会の中で丁寧に掘り起こして、お風呂が汚いなんてことをしゃべるってことはなかなかことです。一番最初にそれに気がついたのは、岩手県遠野でございます。今から20年前のことです。もう徹底して地域の住民と話し、座談会やってる中で、そういうことがポツッと述べられる。もう家の中の恥を言うようだけでも、もう耐えられなくなってくる。そういうものを掘り起こさない限り駄目なわけです。きれいごとでみんな仲良くしまししょうとか共に生きましようなんて話は無いですよ。で、そういう、言わば、状況ですから、ほんと是一部の非常に先進的に気付いたボランティアだけが頑張ったら問題解決になるか、と言ったら、ならないんですよ。ボランティアの人じゃ気付いたかもしれないけど、多くの人が住んでいる地域は、昔ながらの物言えぬ状況の中で居場所が無くなって、役割が無くなってはどうでしょうか？

IV、これからの地域づくり

ハウスという人が1980年代に「ソーシャル・サポート・ネットワーク」という考え方をまとめてくれましたけども、人間は4つの機能がないと生きていけない、そういう支援がないと。1つは、情緒的に支えてくれる、喜びも悲しみも一緒にしてくれる、そういう人が必要だ。2つ目には、人間として認めて評価してくれる。3つ目は、お手伝いしてくれる仲間がいるか？4つ目は、いろんな情報を教えてくれる仲間、支えあい、こういうものが地域に無いといけないわけなんです。ボランティア活動っていうのは、非常に機能的です。だけど必ずしも日常生活圏域とぴったり合っているわけじゃないんです。日常生活圏域っていうのは、やっぱり隣近所の人たち、その中に情緒的に「うれしいね今日は」「友達が死んで悲しいね」って喜んだり悲しんだりしてくれる人。あるいは「あんたの作るキンピラごぼうおいしいよね」「あんたのカラオケは上手だよ」そういう評価をしてくれる人。「あんた電球が切

れてるけど、取り替えられないなら、手伝って取り替えるよ」「雪よけができないんだったら、雪よけするよ」って、いろいろお手伝いしてくれる人。「あんた今度制度が変わったけど、後期高齢者医療制度のこと知ってた？」っていう風に教えてくれる人。そういうサポーターが、支援してくれる仲間が、日常生活圏域の中にいっぱいいることが、その人が生きていく上で大事なことです。それが閉ざされたら、正に無縁社会であり、孤独であり、孤独死になるわけです。そうすると、それは一部の気がついた先進的なボランティアだけじゃできない。本当に隣近所の付き合いから、しなおさないといけない。だから市民活動が大事なわけです。だけどそれを全部住民がやれるかって言ったらやれないわけですよ。行政がやらなくちゃいけない部分もあるし、行政でできない部分もあるわけです。山形の鶴岡でも、住民座談会をやると、住民たちが、そういう、いろんな問題と向き合って、「これは自分たちでやるしかないよね。」「これは行政に頑張ってやってもらわなきゃできない。」「これは行政と住民が共同しないとできない。」という風のように、地域で抱えている問題を出し合いながら、整理していくんですね。だからボランティア活動やるってことは、行政を免罪符にすることでは決してないです。行政にやってもらうことは大いにやるべきなんです。その代わり、自分たちでやらなくちゃいけないことは自分たちでやらなくちゃいけないし、行政と自分が協働しなくちゃいけないことは協働する。で、今一番大事なことは、住民と行政が協働して、ほんとにそこへ住んでいる人が安全と安心を生活が保障されていると、そういう地域作りをしていくことが、今、私は求められているのではないかと、ということなんです。そうしますと、本人はボランティアとして意識しているかしてないか別として、消防団の人なんていうのは、そうとうすごいボランティアやってるわけですね。社会教育委員の方とか、保健委員の方とか、民生委員さんがそうですね。それは、きっかけは、たまたま頼まれたからやってるかも知れないんですけども、民生委員さんなんていうのは、ボランティア中のボランティアですよ。1ヶ月のうち16日働きに出てるんですよ。会長さんだったら1ヶ月に25日出てるんですよ。その民生委員さんが全国に23万人いるわけです。保護司の人は、全国に3万5千人います。保護司の人は、犯罪を犯した人を、自分の家に入れて、面接をして、愚痴を聞いてあげて、励ましてるわけです。自分の家の中に入れて色んな話を聞いてあげるなんてのは、大変なことです。消防団の人は命を奪われること、失うことの危険性を省みずに頑張っているでしょ？

あの雲仙の普賢岳の事故で、ずいぶん多くの消防団の方が亡くなってるでしょ？あの人たちだってボランティアなんです。だから、我々はボランティアというものを特別視しないで、もう一度地域作りし、そこで、住民たちが自分たちの住んでいる地域を行政と共同して作り上げていくんだ、ということを、原点を、問い質されると、なんとなくボランティアやってます、という風なことはいけませんよ、ということを、是非考えていただきたいということになります。で、そのためには、その生きる力とか、人権の尊重だとか、生命の尊重とか、優しさというのが、なければいけないわけですが、それを大きくなる前に、子どもの時代にそういうものを身につけさせるような、福祉教育をどう進めるかということが実は大きな課題なわけです。ボランティアってものを考えれば考えるほど、子どもの時にそういうものを考える力は、考える機会を提供するってことは必要ですよ。ってことを思いました。それまで、ボランティア活動っていうのは何か？どういう性格・役割をもっているか？ということが下の図でありますが、時間が無いので1つ1つ丁寧に言えませんが、読みますと、ボランティアとは自立と連帯の社会地域作りを目指して自発的・自律的・自覚的・社会的に活動を行う人と言う。

1. ボランティア活動とは社会・地域作りに主体的に関わり、他者とのなかで自己をより豊かに実現する活動をいう。
2. ボランティア活動では、社会・地域作りにおける、創造的・先駆的活動が重視される。
3. ボランティア活動は、個々の具体的問題を解決するだけにとどまらず、その活動は、波及的、開放的のものである。
4. ボランティア活動の契機は恣意的であっても、その活動が日常生活の中に計画的・継続的に位置づいていくものでなくてはならない。

これは、4は月に1度でもいいんですよ、年に1度でもいいんですよ。年に1日、有給休暇を使ってボランティアをやってもいいよっていう人が365人集まったら、職員1人分の仕事ができるわけでしょ？ ボランティア・カレンダー作ればいいでしょ？ 「あなた、年に1日ぐらい休みをとってボランティアやれるでしょ？」 「あなたのやれる日を入れてよ、名前を。」 365人集まったら、これできるわけでしょ？ だから、最初は頼まれたからやったとか、かわいそうだと思ったからやったとかでもいいけど、できれば自分の生活の中にきちんと入れて、毎年この時はこれをやろうって、いう風なことやってくれればいい。週に3時間ボランティアやってもいいよって人が14人集まったら、職員1人分の仕事できるわけでしょ？ 午前3時間、午後3時間、公民館にいて私は鍵を開けて、お茶を沸かしてお茶ぐらい出せるよ、っていう人が14人集まったら公民館開けられるわけでしょ？ 人がいれば、お年寄りも学校から帰ってきた子どもたちも寄ってくるかもしれないでしょ？ 富山県のデイ・サービス、富山デイサービスってのは、お年寄りも、障害持った人も、子どもも、全部みんな一緒に集まっている。公民館を開けて、学校でなくて、子供がランドセルをそこにおいて地域のお年寄りからコマ回しをもらったり、勉強を教えてもらったり、一緒に何か物を作ったりっていうことがあってもいいじゃないですか。問題は公民館が開いているかどうかでことでしょ？ じゃあ、公民館を運営する14人の人がやれるか、一週に3時間が大変だったら、28人いれば、2週間にいっぺん3時間ボランティアってことがあるわけでしょ？ で、こういう風に、最初はきっかけ何でもいいかもしれないけど、自分の中に3時間、あるいは1年に1日、そういうことを計画的に入れる人がいてくれたら、そんなに負担にならずにやれるんじゃない？ ってことです。ところが、私の住んでいる地域では、ボランティア・センターも何かあると「大橋さん頼みます。」って、何でもかんでも持ち込むわけです。「あんたに私雇われてんじゃないんだぜ。」っていつも、私、怒るわけですよ。一度登録するのべつかわず、お願いに来るんです。私は自分の教え子なんですが、「そんなボランティアセンターの職員じゃだめだ」って怒るんですけども、一番頼みやすいとこに電話よこすんです。するとボランティアやっている人は自分の全人生、全財産をさげないとボランティアやれないかのように負担感が重くなっちゃうんです。1年に1日だったらやれるよ。それがコーディネーターでは、需要交付のコーディネーターじゃなくて、ボランティア活動をやる人を集めるコーディネーターが大事なんです。

で、5番目。ボランティア活動は、その活動によって原則として金銭的対価を求めるものではない。それは交通費とかはあってもいいですよ、だけどパートタイマーじゃないよということをはっきりしましょう。パートタイマー的なことをやりたかったら、シルバー人材センターとかそういうところに行ってください結構なんですから、パートタイマーとは違うってことはやりましょうよ。はっきりしましょう。ということであります。

6番目。ボランティア活動とは、行政とも協働する住民の主体的活動である。行政

の下請けじゃないよ。だけど枯渇するんじゃなくて協働するよ。

7 番目。ボランティア活動は、行政に対して積極的に問題を投げかけ、行政に反映させる活動である。行政の職員は、今、職員数が減ってきてなかなか忙しくなっている。気が付いていない。特に福祉分野なんて気がついてないですよ。昔の福祉行政の流れの域を出てないから、今、我々は福祉なんて言わない、福祉って言葉を使わないで、生活のしづらさ、日常生活上何らかの支援をすることがら、そういうことに聞けば住民はいっぱい思っているわけです。都会に行かれないとか、買い物にも行かれないとかいろんなことがあるわけです。それを福祉って言うと、昔ながらの経済的貧困者、生活保護を思い浮かべるから「福祉？私は関係ないよ」なんて思っているわけです。だけど、生活のしづらさだとか、日常生活のなんらかの支援を必要とする事がらって言ったら、いっぱいあるかもしれないんです。だからそういうことを行政に気づいてもらうように問題提供していくということが大事なことでないか。

8 番目。ボランティア活動は、社会・地域づくりに向けて、住民の生活における問題を調査し、関心を喚起し、住民が参加する契機を提供する活動である。隣近所を誘えばいいんですよ。子どもたちに素晴らしい文庫をやろう。私共も子ども文庫会をやっていましたが子ども子どもたちに良い機会をやる。今、私は自分の子どもたちに見せていた文庫が、それをずっととっておいたんですが、今や孫たちが見えますよ。良い本っていうのは、そう簡単に廃れないんです。だから良い本っていうのは結構高いんですよ。子どもたちに良い文庫を、だから都留文科大学の学生が主催する地域こども文庫っていうのがあっていいわけです。私は子どもの読み聞かせなんてものは大好きでして、もう大きな切り株でも貰ってきて周りを暗くして、読み手の所だけライト当てて、できればロウソクぐらいたてて、読んであげたら、子どもたちはもう目を爛々と輝かせて聞いているんです。面白いですよ。なんでこんなことができるのにやらないんだろうか？教育学があるわけですから、都留文科大学の学生さんが、都留市内のあちこちに出かけて行って、読み聞かせてほしいわけですね。そういう風な干渉・感知する。そうしているうちに、学生さんがそこまでやってくれるなら私もやらせてって人が出てくるかもしれない。そんなきっかけ作りっていうのはすごく大事なわけじゃないでしょうか？

9 番目。ボランティア活動は、自由な活動であるが故に制度的サービスであり行き届かない面をより細かにサービスを提供する活動である。ある意味では何やってもいいんですよ。ということです。

10 番目。ボランティア活動は個々の具体的情報およびサービスが行政と住民の間でスムーズに行われるよう媒体の役割をもつ。先ほど言った情報的な支援とか、で、こういうことに気がついて、そして自分だけが自己満足しないで、周りの人に話しかけ、きっかけを作るようにし、そしてみんなと一緒にやろうって思えるような地域作りをして欲しいわけです。そして同時に都留市に向かって、都留市と都留市の社会福祉協議会はどういう地域福祉計画を作るの？ 行政は何をやりたいの？ ということのを投げかけをしなくちゃいけないわけです。市町村は、地域福祉計画を作らなくちゃいけないわけです。介護保険事業計画作らなくちゃいけないわけです。ところが行政の方は点と点を結ぶサービスの増量を考えますが、みんな特別養護老人ホームを作ってほしいだなんて話ばかりになっちゃう。本当でしょうか？ 特別養護老人ホームをやった新潟の長岡市の人たちなんてのは、逆に、特別養護老人ホームをできるだけ分散して地域に開放しちゃおう、無くしちゃおう、特別養護老人をホーム無くしちゃおうって発想を実はしてるわけです。1 か所で同じような人が

集まってるなんておかしいじゃないか。いくら個室で新型特養が当たって100人ぐらいが1か所に住んでいるなんておかしいじゃないか？ だから10人ぐらいなら10人ずつ分けちゃえばいいわけじゃないですか？ 地域の人が野菜持ち寄って一緒にそこで食事したっていいんじゃないの？ 公民館にそういう部屋があったっていいんじゃないの？ 学校の空き教室が、学校が廃校になりそうだったら、教室の内装を変えて、そこをみんな地域のその特別養護老人ホームのミニ・デイサービス、ショートステイ、グループホームしたらいいじゃないの？ どっかの空き家が出たら、その空き家を賃していただいて、みんな個室割りすれば良い。だけど一緒に食事した方がいい。1人でポツンとさみしく食べるってのは嫌ですよ。やっぱりワイワイやろう。だったら、せめて夕食の時だけ、みんなで集まる食堂を作ろうか？ なんならそこに赤ちゃんぶら下げてお酒一杯飲んでもいいよね。食べ終わったら自分の家に帰ってもいいし、泊まりたい人は泊って、朝、自分の家に出勤して窓を開けて畑仕事してくりゃいいじゃないの？ で、自分の畑で採れたものを、野菜を持ち寄ってみんなで料理すればいいでしょ？ もう最近、東京の世田谷のような所でもグループリビングって言って、要するに昔でいう下宿ですよ。年寄りも若者もみんな、今テレビでやってるわけでしょ？ 「てっぱん」なんて、まさにそういうことじゃないですか？ あれ、何を問題にしているかって言ったら、「家族とは何か」、「人間関係の在り方」。ああいうことが、テレビで報道される、特別番組としても特集される、みんな求めているんです。人間は一人じゃ生きていられない。ただ空き家が朽ち果てるのを待つんじゃなくて、活動したらいいじゃないか。まあそんなことを考えるわけです。じゃあこれを行政に「やれ」って言ったってもう行政は金がない、もう赤字団体もいいとこだという中で「われわれが知恵を出すんだから、行政も少し考えられないか？」「両方でやればできるんじゃない？」こういうことを考えてほしい。それが地域福祉計画づくりなんですよ。だから、それは住民方が問題提供をし、一緒に考えていこう。だけど行政の方は昔から住民から怒られてきましたから、「住民の前に出ると告発されるかも」。怒られることばかり気にして、できれば住民の前には出たくない、いや、あんまり答えたくない。言質とられるの嫌だから、なんだか議会答弁みたいなことばっかやってる。そんなんじゃあ、都留市は良くならない、山梨県は良くならないんじゃないでしょうか。もう徹底して住民が話し合って、これは戦後の日本が社会教育の中で共同学習です。「地域に何が問題か？」それを出し合って、そしてどう解決すんのかっていうのをみんなで話し合っていく。戦前から言えば、昭和の3、4年に静岡県浜松などを中心とした「全村学校」なんてものがあります。学校っていうのは、何も学校っていう施設の中にあるものが学校じゃないよ。地域すべてが学校だよ。「全村学校」っていうのは、稲垣明だとか山崎英吉とかやったわけです。今そういう「全村学校」、戦後の共同学習というものをもう一度やって住民と行政が共同していく、これが地域作り、そういうことをすべての住民が一斉に立ち上がることは無いんです。そこで自覚しているボランティアの皆さん、先駆的な活動をしている皆さんが、より、そのボランティアの考え方を広めて、もっと地域を巻き込んでいく活動に目を向けて、やっていただきたいな、ということが、今日私が言いたいことであります。折角来たのでもっと喋りたいのですがもう時間が来てしまいました。これでおしまいにしたいと思います。どうもありがとうございました。（会場 拍手）

司 会： 大橋先生どうもありがとうございました。この機会に大橋先生にお聞きしたいこと、質問等がございましたら、お時間の関係で2、3お受けしていただきたいと思い

ますが、願いたします。

大 橋： はい。

司 会： それでは願いたします。

質問者 1： はい、あのー、私は南アルプス市から来まして、別のことですが、男女共同参画事業というものを一生懸命やっているんですけども、えーと、私はこのボランティアは「クオリティ・オブ・ライフ」だと思っていたんです。私は。ところが、今ここで聞いたら、聖書の中のルカの話が出てきまして、「隅から隅までは、落ち穂を拾ってはいけませんよ。それは神の命令だから」だから、先ほど言われたように、親がいない、落ち穂をだれが拾っていいかってことは、宗教学、キリスト教からすると、そういう人たち、当たり前な社会なんでしょうね。ところが日本はどうも仏教だから「もらう社会」なんですよね。だから、私が、今、一生懸命、そのあたりまえの社会にすることをもう少しうまい言葉があったら教えてください。願します。

大 橋： ボランティアっていうと、どうしてもイギリスなどを中心として、キリスト教の宗教を、背景を用いていると考えがちですが、決して日本にもなかったわけではないんです。私自身がそうですが、今回、昨年の9月から11月まで四国のお遍路をずうっと歩いて回って参りました。そういう中で「お接待」を含めて非常に日本は、「お蔭さま」という言葉に代表されるように、いろんな活動やってきました。そのお蔭さまっていう言葉が実は使われなくなっちゃった、聞けなくなっちゃった。お蔭さまっていうのは自分1人では生きてないよ、相手との関係の中でお蔭さまで、ありがとうございますという言葉になるんです。だからありがとうとかお互い様、あるいは、相身互いっていうのは、ある意味では、やっぱり社会との関わり合いで持ってたはずなんです。ただ、その社会っていうものは閉ざされた、さっき言ったような社会なわけで、そこを意識してもっと…あの…田んぼを中心とした地域か、もう少し離れた地域を視野に入れたそのお互い様という風な言葉が出るようなことをしていかないといけないのではないだろうか。そんなことを思うわけです。で、仏教の中でも喜捨っていうのがありましたけれどもその喜捨がお寺との関係になっちゃう、もっと社会とのかかわりを考える必要があるでしょうか。だからそういう意味ではお接待とか、まだ貴重な日本の文化として残っているんじゃないでしょうか？ 私もお遍路で歩いていて、どう見ても80を過ぎるおばあさんから、お接待を受けて、なんと現金をいただいた時にもらって良いものやら、悪いものやらだけど、周りの人たちが「それは貰ってあげなくちゃいけないんだ」という話をされて、おしいたいて参りましたけれども、そういう何か、お接待を、お蔭さまと言う風な言葉の持つ意味っていうのを、ぜひこの機会にもう一度見直してみる必要があるんじゃないか。てなことでもよろしゅうございましょうか？

質問者 1： はい、ありがとうございます。

質問者 2： 大橋先生久しぶりでございました。山梨県ボランティア協会の岡谷ですけども、お話伺いましてイギリスのボランティアからもっと日本は掘り下げて行かなければならないということを良く感じます。それからやっぱりボランティア活動の集団を作ればそれでいいんだという、逆にその組織力が横行していく中で、やはり個の原理「私がする、私が行う」個の原理をきちっとしないと大変なことになるんじゃないか？ 昨今の状況はですね、先生も御存じだと思いますが4月から新しい公共づくりということで、政府がとんでもないお金を出してきます。山梨県でも1億何千万というお金を2年間でやれと言うんです。その新しい公共づくりというのは、

僕は全くひねくれて見ますと、NPOにまかせて、行政が逃げているんじゃないかと。

そういう危険性すら感じている中でボランティアやNPOの関係なんかも明確にしていかなきゃいけないと思いますがボランティアというのは個の原理、自分の意志というものから出発した市民活動だと思いましたが、NPOっていうのは、どっちかっていうと、組織を作って、あたかもその出来てきた組織を維持するがための媒体とか、そういったような感じをする中で、政府はその組織論を謳ったNPOをあてにして、丸投げをしようとする方向性が見えます。したがって何が言いたいかと言いますと、改めて、今、ボランティアリズムという、ボランティア1人1人の個の原理にたった市民活動を活発にすることによって、ほんとの意味でのその市民活動=NPO、場合によってはNPO法人が育つような熟成した社会を作っていけないとイカンと思っています。そういう意味では、大橋先生は全国的に影響のあるご立場ですので、山梨県で、公私協働論で35年間も山梨県ボランティア運動を持ちこたえ県民ボランティア運動を進めてきたという、このローカルな山梨県で事例をですね、是非堂々と発表していただき、本来の個の原理を行ったボランティアイズムの運動と組織を作って、社会を変えていくパワーとが今の行政と協働するという、協働の原則を、今、改めて組み立ててあちこちでもうお話いただければ有難いというお願いでございます。感謝とお願いでした。

司 会： ありがとうございます。

大 橋： 岡谷さん、その通りですね。やはり「個」というものを大事にしながら、排除じゃなくて、どうつながっていくか。その結果として、個のつながりは、NPOを作るってことは当然あるわけですが、そのNPOの在り方は、今日とても時間がなくてそこまで言えませんでしたけれども、やはり日本は悪くすると、行政の下請けになっている可能性があるというのは事実なんで、そこはほんとに慎重に考えていかなきゃいけない。NPOって言葉を使えば、全て非常に革新的で新しいことのように思えるけども、そこはもう一度原点に戻って行く必要があるんだと思います。ただイギリスは1601年ぐらいからそういうボランティア、ボランティア団体の育成っていうのを、ずっと、しっかりやってきたわけですが、日本はやっとボランティア団体であるNPOなんてのが出てきたのは、10年前ですから、あんまりあわてることない、だけど、今みたいなことをきちんとして1人1人が市民としてどういう自発的な、自発的な活動をするのかということを原点に押さえておくことが大事なのではないでしょうか。まあそんなとこですかね。

質問者2： はい、よろしくお願いします。

司 会： まだまだお伺いしたい方が沢山いらっしゃると思いますが、お時間の関係で誠に恐縮ですが、大橋先生は本日最後までいらしてくださいとのことです。後ほど直接お伺いいただければと存じます。本日は大橋先生から新たな活力をいただいたように思います。今後皆様お1人お1人、それぞれの立場で、様々な福祉活動を展開されることと存じますが、今日の講演は今後の皆様の大きな原動力となることと思います。それでは会場の皆様、大橋先生にもう一度盛大なる拍手をお送りください。ありがとうございました。(会場内 拍手)

都留文科大学アカペラ・サークル “☆☆☆（みつぼし）”によるコンサート

「ロマンスの神様」他 2曲



事例発表・活動報告

文大ボランティアひろば

社会学科4年 下 平 佳 樹
社会学科4年 内 田 哲 也

司 会： 続きまして。「事例発表・活動報告」
に入りたいと思います。

まず、はじめに、「文大ボランティア
ひろば」について、都留文科大学4
年生の下平佳樹さんと内田哲也さん
に発表していただきます。それではお二
方よろしくお願いいたします。（会場
拍手）



下 平： 皆さんこんにちは。

会 場： こんにちは。

下 平： 先ほどご紹介にあずかりました。社会学科4年の下平佳樹です。よろしくお願いします。

内 田： ご紹介にあずかりました、都留文科大学4年生の内田哲也です。

下 平： 今日は、地域交流研究フォーラムにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。今回のテーマは「ボランティアの力が地域を変える！」ということで、最近ようやく、「都留市にも名前が売れてきたかなあ」と嬉しく思っている「ボランティアひろば広場」通称「ぼらひろ」と言うんですが、それについて説明させていただきたいと思います。

今回のですね、このフォーラムを運営する際にも、「ぼらひろ」の会議で企画をつめたり、準備はもちろんですね、今日はこの腕章をつけてるんですが、このスタッフも「ぼらひろ」の方々、または学生が担当しています。そんな「ぼらひろ」なんですが、皆様への宣伝も含めまして、「ぼらひろ」がどんなものなのか、どういうことをしているのか、というのを知っていただけたらと思います、今日お時間をいただきました。少しお付き合いいただければと思います。よろしくお願いします。まず、皆さんに見ていただきたいものがあるんですが、

———スクリーンに映像が映る———

こちらが、都留文科大学のホームページになっています。そこのですね、「地域貢献活動」というところをクリックしていただくと、早速出てくるんですが、【文大ボランティア広場】という見出しが出てきます。ここのですね、【文大ボランティア広場特設サイト】ちょっと小さく書いてあるんですけど、ここをクリックしていただくと、【文大ボランティアひろば】のHPが出てきます。このHPは、今までの活動や、これからの予定なんかが見られるようになっていきます。これを見ながら、ちょっと説明していきたいと思うんですが、先ずですね、地域の活性化だったり、バリアフリーな仕組みづくり、それから環境の保全なんか、それぞれの団体や、地域など、都留市でもいろんな方々が活動してらっしゃると思います。ですが、都留文科大学内のサークルも始めまして、地域全体を見てみても、各団体とか個人がですね、それぞれ活動していて、お互いに何を持ってやっているのかとか、どういう活動をしているのかとか、良く分からない状況なのではないかと思います。これがしたいとか、あれがしたい、こんなことを考えてみたって、そういう思いがあっても、仲間がいなかったよなとか、そういう機会がなくて、活動することができない人たちも多勢いると思います。こういう他の団体が何をしているのかわかんなかったりとか、協力はできるし、やりたいんだけど、そのきっかけが無いとか、そういう場所がないとか、あの方法がわからないっていうのは、いろんな地域で取り立たされている問題でもあることです。それを解決できるのが、「文大ボランティアひろば」ではないかなと、いうことです。また、あとで設立経緯の方ですね、内田の方から説明してもらいますが、【ぼらひろ】には学内のボランティア団体が集い、ボランティア情報やそれぞれの活動報告や情報交換などを行っています。それだけでなく、大学の地域交流研究センター、社会福祉協議会、あとボランティアコーディネーターの方や、福祉施設の職員の方など、大学を超えて地域に住む方々も、一緒に集まって平成20年の6月1日から、この会議を行っています。そこでは、やはり情報交換だったり、交流の場であったり、共同の場として【ボランティアひろば】は機能しています。具体的にはですね、市民の方々からは、大学生対象のボランティアニーズを持ちこむ窓口ができたことが、最近、喜ばれているかなあと感じています。で僕ら学生にとって有意義なことは、近場のボランティアニーズが把握できること、それからいろいろ活動に触れて刺激をもらえること、それぞれの団体や個人の活動が活性化、活発化することなどいろいろなことが起きています。毎月、来ていただける方もいらっしゃれば、面白いボランティアや企画案を持ってきて、時々いらっしゃる方も様々なんですが、【文大ボランティアひろば】～誰でもどうぞ～という副題がついているんですが、各サークルに所属していない方や、勿論、皆様、市民の方であったりどなたでも広く歓迎しておりますので、それで今までもいくつもの活動をしてまいりました。ですので具体的にどんな活動をしてきたのかっていうことを、先ほども、ちょっと映っていましたが、HP使いながら簡単に説明させていただきたいと思います。

まず、最初なんです、2009年の3月25日に「ボランティアひろば」で初めて具体的な活動を実行しました。ペットボトルキャップの回収をすることで、400個を1kgと計算し800個でポリオワクチンを1人分購入できるということなんで、学校の各場所に回収箱を設置しまして、今回回収を行っているところです。それから、都留市では有名であります、「お茶壺道中」にご紹介をいただきまして、お茶壺道中実行委員の方々が、「開国博」、横浜であったと思うんですが、そのY150の方に都留市の方でブースをいただけるということだったので、そこに参加させていただきました。この写真も都留市のHPに載っていたりしたので、ちょっと僕も映っていて恥ずかしかったんですが、横浜の方に出張してきました。で、こっちは、奈良井宿の方にも、長野県の本曾町にある奈良井宿の方にも出張に行ったということで、これにもみんなで参加させていただきました。とてもきれいな道並みだったんで。

で、次なんです、谷村地域協働のまちづくり推進委員会の方で、あの『夢実現ひろば』というところがあるんですが、えーそこです、ね『夢実現ひろば』の方々から「都留市に住んでいながら都留文科大学のことをよく知らない」という声をいただきまして、そこから何かしようということで、題して『あなたも1日文大生』ということですね。私たち学生が、大学の施設を案内するオープンキャンパスや模擬授業なんかを行ったりして、その名の通り「1日文大生」気分を味わっていただく、という企画を考案してみました。先ほどのアカペラの方も聞いていただいたと思うんですが、アカペラの発表があったりだとか、実際に授業を受けていただいたりだとか、交流会を行ったりなどして、楽しんでいただけたのではないかなと思います。それからですね、お茶壺道中の本番の、今年はあいにくの天気ではできなかったのですが、「都留産業祭り」の方にも出ささせていただきました、みんなで大行列の方をさせていただきました。それからですね、また後ほど、内田の方から説明があると思いますが、先進組織見学ということでですね、東京都の渋谷区の恵比寿にある「恵比寿青年教室」という有名なところなんです、そこの方にも出張という勉強会みたいなもので行かさせていただきました。ここは、知的障害を抱えている方々が、みんなで月に一度集まっているいろいろなことをしている所に勉強会に行ったりもしてきました。それからですね、あの去年なんです【ボランティアひろば】の忘年会を行いまして、あの1人1品持ち寄ってですね、こんな感じで（スクリーンに出る）パーティーをしました。手作りケーキやクッキーとか、あと唐揚げを持ってきて下さった市民の方もいらっちゃって、ほんとに豪華な忘年会になったと思います。それからですね、山梨県の甲府の方にあります、オギノリバーシティというお店があるんですが、そこにですね、山梨県中にある大学の方々が集まって、「献血キャンペーン」というのをやっています。そこにも【ボランティアひろば】の方で、人を集いまして、みんなで行ってきました。こういうサンタさんの格好をして（スクリーンに出る）、クリスマスに、献血のキャンペーンをするということをやってきました。それから、今年度と言っても、既に去年に開催された「都留市ボランティアまつり」の方にも【ボランティアひろば】の面々で行かせていただきまして（スクリーンに出る）、この辺は全部【ボランティアひろば】の人たちなんです、みんなで一緒に参加させていただきました。『こういうところにも大学生の人手が【ボランティアひろば】のおかげで増えた』というお声をいただいて嬉しく思っているところです。次に、これは都留文科大学で毎年行っております、『つる子どもまつり』というもので、ここにもですね、学生の他にも、いろいろ【ボランティアひろば】を通して知り合った方々が沢山いらっちゃって、とってもにぎやかにやることができました。大体【ボランティアひろば】では、このような活動しております。

先ほど、少し飛ばしてしまっただ所があるんですが、【ボランティアひろば】の中にですね【いこいのひろば】というのがあります。少しそれについて説明させていただきたいと思います。【いこいのひろば】設立の経緯は、後で内田の方から詳しく説明させていただきますが、【ボランティアひろば】の中から、特に障害者福祉に興味がある人たちが作ったプロジェクトというのが【いこいのひろば】です。そのうち、今は【いこいのひろば】だけなんですけど、「地域振興」であつたりとか、「環境美化」であつたりとか、様々なプロジェクトなどが、いろいろ出てくるんじゃないかなと思っていますとこです。

そこで【いこいのひろば】はですね、障害の有無に関係なく地域に住む人全員が、楽しく充実して過ごせる地域作り目指して活動しています。実行委員長を市民の佐藤さんという方が、副実行委員長を学生である私が、担当させていただいています。で、詳しくは、お手元の資料にある『いこいのひろば企画書』というちょっと分厚い資料があるんですが、ここに詳しくは書かれていますので、これをご覧くださいながら、簡単に説明させていただきたいと思います。で、流し読みをしていただきながらでもいいんですが、要約させていただきますと、1年サイクルで毎月第3日曜日に、都留市保健福祉センターいきいきプラザ都留で行っています。去年の12月で第3回目を迎えました。一般市民の方々と一緒に企画運営を行ってまして、現在8名ほどの市民ボランティアさんの登録があります。で、毎月、月ごとに企画担当者という方が代表して企画を提案し、当日も、主体で指揮していきます。その企画担当者という人は、市民の方であつたり、僕ら学生であつたり、誰でも担当することができまして、いろいろな活動をしてきました。具体的にはですね、全員が同じ内容を行う「全体プログラム」というものと、あと個々の希望する内容で行う「クラブ活動」の2種類があります。企画書でいきますと、4ページの上の所になります、「(6) プログラム内容」というところですが、「全体プログラム」というのは、お茶会であつたり、ウォークラリーやったり、クリスマス会であつたり、遠足であつたり、これも企画担当者の考えの中でやっていくのですが。それから、「クラブ活動」では、例えば、スポーツクラブであつたり、料理クラブだったり、音楽クラブだったり、芸術クラブだったり、いろんなものが考えられると思うんですが。年間プログラムでですね、クラブを決定し、1年間同じクラブを続けていきます。今年度は、まだ始まったばかりなので、まだ「文化系クラブ」と「レク&スポーツクラブ」の2つで広く浅く行っているんですが、来年度からは、現在、参加者さんも着々と増えてまして、多くの要望が出ています。こんなクラブやりたいだとか、で、この前も、映画クラブを作りたいということで、「いきいきプラザ連続殺人事件」というのを作ったりなんかして、そういう面白い話もあつたりして、今、夢が膨らんでいるところです。クラブの活動内容と言うのは、それぞれのクラブが参加者さんと一緒に考えてやりたいことをやっていく形になります。では、実際にHPを見ながら、どんなことを【いこいのひろば】でやってきたのかを、簡単に説明させていただきます。

第1回目「いこいのひろば」ということで、10月10日に開きました。第1回目はですね、【いこいのひろば】について、どういうものかというものを、ちょっと恥づかしかったんですが、私たちの方で劇をさせていただき、寸劇をしながら説明させていただきました。それから、午前中はですね、クラブ活動体験ということで、文化系クラブでは、お菓子作りをやりました。パウンドケーキを作ったんですね。パウンドケーキ作りということで、「いきいきプラザ」にも、ほんといろいろな設備が整っていて、これが、パウンドケーキを焼いている写真なんですけど（スクリーンに

出る)、上手に焼けたと思います。午後は、ダンスの先生をお招きしてのクラブ体験として、「レク&スポーツクラブ」ということでダンス教室を行いました。最初は簡単な運動から始まったんですが、最後の方はほんと汗ダクになるぐらい運動しまして、こんなポーズ(スクリーンに出る)で写真が撮ってあるんですが、とっても楽しくできたと思います。で、その後に、先ほど午前中に作ったパウンドケーキを食べながらお茶会をしまして、今後【いこいのひろば】のクラブでどんなことをしていきたいかっていうのを、話し合ったりしました。以上が第1回目です。

第2回目はですね11月20日に開かれました。午前は全体活動の方で、お花を植えようということで、プランターづくりの方をしました。実際、こういう、ちょっと画面が小さいんですが(スクリーンに出る)、このなんて言うんですかね? 立札ですかね? この立札に、いろいろな絵を描いたりとか、デコレーションを張ったりして、「いこいのひろば」という文字を作ってますね、こういうプランターを作ったことをやりました。これらは、まだ「いきいきプラザ」の方にたくさん飾ってありますので、もし目にとまりましたら、じっくり見ていただけたらなあと思います。午後の方は、初めてのクラブ活動ということで、文化系クラブはドライフラワー作りと押し花の方をしました。これがドライフラワーなんですが(スクリーンに出る)、この色とりどりなものは、シリカゲルと言いまして、これを入れると簡単にドライフラワーができるんですけれども、ドライフラワーと押し花づくりをしました。一方、「レク&スポーツクラブ」は、マジックをやってみようということですね、マジックショーの方を練習しまして、文化系クラブの方々に後で発表するということをやりました。結構本格的なものをやりまして、10円玉がいきなり消えたりだとか、コップをボールが貫通したりだとか、トランプが空を飛んだりだとか、いつもテレビでは大人気のトランプの予言だったりだとかそういうのを、障害を抱えている方々も一緒にやることができました、みんなタネがわからないくらい驚いて、うまくいったんじゃないかなーと思います。それが11月の活動でした。

で、一番新しいものですが12月はですね、クリスマスということなんで、クリスマスパーティを行いました。また「いきいきプラザ」の方を使わせてもらいまして、いつもは社会福祉協議会の方で飾り付けをしていると思うんですが、今回は【いこいのひろば】の方でクリスマスツリーに飾り付けをさせていただきました、こんなに(スクリーンに出る)ちょっと写真が小さくて申し訳ないんですが、綺麗に飾り付けをすることができました。午後はですね、みんなでケーキをつくったんですが、そのデコレーションなんかをしたりして、みんなで美味しくいただきました。夜は、こんなに(スクリーンに出る)綺麗にできたのでよかったんじゃないかなと思います。すごく簡単に説明させていただきましたが、【いこいのひろば】では、こんなことを3回までやってきました。それでですね、今回のフォーラムでは、午後から【いこいのひろば】体験ということで、今回、特別に作りました、こちらのフォーラムの日程の所に、いくつか資料がついていると思うんですが、「音楽クラブ」であったり、「ラッピングクラブ」であったり、紹介の文章が載っていると思います。今日の午後にはですね、パティシエクラブ、チャレンジクラブ、音楽クラブ、レク&スポーツクラブ、の4つに分かれていただいて、クラブ活動がどんなものかを、実際に体験していただくということで企画いたしました。また、それについての詳しい説明もあると思いますので、よろしくお願いします。ということで内田に代わりまして、【ボランティアひろば】の設立経緯について説明していきたいと思います。

内 田： はい。えー、では私からは【ボランティアひろば】設立のきっかけとすることに

ついて、お話したいと思います。以前の私たちは、それぞれ異なるサークルで、あるいは個人で、人それぞれ異なったボランティア活動をしていました。私たちの場合は、献血活動、福祉施設への訪問、地域のお祭り、行事への参加などなど、それはそれで充実した活動でした。しかしこうした活動をしながらも、常にある疑問を持ち続けていました。それはこの大学の中でボランティアを、ボランティア活動をする人、そういったボランティア活動するサークルが複数あるのに、「お互いがどのような活動をしているのかわからない」ということでした。「同じボランティアを志していながらも、連絡を取り合うことができなかったのは、なぜだろう?」、「ひょっとしたら、お互い協力できることがあるのではないか?」そんな風に思いながらも、なかなか交流というのは進みませんでした。そうした折に、社会福祉協議会の職員の方や、大学地域交流研究センターの方と相談する機会があり、「情報交換の場を作ろう!」という話が出てきました。それは大学のボランティアサークル同士のみならず、個人で活動している学生、大学の教員、ボランティアコーディネーター、また、例えば、他にはお茶壺道中実行委員会、社会福祉協議会職員などなど、大学の枠を超えた、誰もが参加できる活動、話し合いの場でした。こうして始まった【ボランティアひろば】では、まず、会の理念や形というのを会議で話し合い、次のようなことが決まりました。

- ・ボランティア活動などで自発的であること。
- ・あくまでも話し合いの場、であるため組織化はせずに、役員なども置かないこと。
- ・それぞれ本来の活動を尊重し、ボランティアひろばによる負担というのを増やさないこと。そのため司会などは交代で行うこと。
- ・組織や団体に所属していないような個人の方でも参加しやすいような雰囲気を作ること。

こうした理念というのを話し合いの中で決定していきました。これらの理念というのも、最初から固まっていたというわけではありません。決まるまでに様々な出来事や、活動の経過というのがあり、そのたびに話し合いを重ねることで、少しずつ決まっていっただけです。たとえば、以前、ペットボトルキャップを回収する活動を行った時、あるいは都留市民の方に大学を案内する1日文大生、というような活動を行った時、【ボランティアひろば】というのは組織化されていないため、様々なやりにくさ、難しさというのを感じることがありました。しかし、「あくまでも話し合いの場であってほしい」という意見、あるいは、「組織化した方が活動がしやすいのではないか?」というような意見が出されて、これは、とても決まるまでによく話し合われました。こうして、こうした課題が出た中で、私たちはまとまった、先ほどのような活動をする場合、【ボランティアひろば】とはいったん距離を置いた、実行委員会を立ち上げることで、その2つの問題というのに解決するようなことにしました。【ボランティアひろば】というのは、あくまでも情報交換の場として気軽に参加できるということを重視し、組織的な活動が必要なものは、有志が、実行委員会を結成して活動を行う。こうすることで、解決しようというようなことが、話し合いで決まりました。こうした中で、先ほど説明もあったような【いこいのひろば】という実行委員会が、誕生しました。それはもともと、授産施設を訪問し、様々なレクリエーションを行うというような活動をしていた中で、そこの利用者さんから、「もっと活動したい、多くの人と交流をしたい。」という話を聞いたことをきっかけ

に、そういった【いこいのひろば】がスタートしました。そこでも様々な会議を重ね、企画書を作り、また利用者さんのニーズを知るために話を聞く会を開いたり、あるいは、勉強会を先ほどwebの方でも紹介したように、勉強会にみんなで出かけたような活動をして、1つの【いこいのひろば】というものを作り上げてきました。そして昨年10月に、いよいよ第1回目が始まり、順調に第2回、第3回と回を重ねていき、今日は特別版ではありますが、午後から第4回の【いこいのひろば】の活動が行われようとしています。最後に、ちょっと私の思うことなんですけれども、私たちは、幸いにもこうして多くの方々の協力が得られ、このような場を作ることができました。今、現在、ボランティアや地域貢献を考える、という方がとても多いように感じます。しかし、そうした気持ちや想いというものを、どこで表現すればいいのかわからず、なかなか行動に移すことができないというような状況も数多くあるように思います。そうした潜在的な協力者が、気軽に参加できる『場』というものを設けることがとても大事なのではないか、という風にこの【ボランティアひろば】を通して私は感じてきました。それでは私からは以上です。どうもありがとうございました。(会場 拍手)

司 会： はい。お二人どうもありがとうございました。下平さんと内田さんはこの3月に卒業されますが、バトンタッチをしていくということで、後輩たちを早くから育てようということにも力を注いでこられました。どうぞ、お二人に、もう一度、大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。(会場 拍手 (大))

都留市ボランティア連絡会

都留市ボランティア連絡会 渡 辺 富士夫

司 会： 続きまして、都留市ボランティア連絡会について、渡辺富士夫会長より発表していただきます。それでは渡辺会長よろしくお願いたします。

渡 辺： 皆さん改めましてこんにちは。

会 場： 「こんにちは」

渡 辺： 今日は、あの、こんなすごい先生がいらっしゃるって、お話をしに来てくださるなんて、思いもしておりませんで、「えらいこと私は聞いてたな」なんて

思ってます。あの申し遅れましたが、現在、都留市ボランティア連絡会の会長をさせていただいています。渡辺富士夫と申します。『ワタナベフジオ』という名前は、この辺では結構多くてねえー、とにかく、富士吉田、私は育ちが河口湖なんです、あちらの方では『ワタナベフジオ』っていうのは結構いるんです。で、『ワタナベ』がとにかく多いです。それから『フジオ』が多いです。で、私のフジは「富」に頭に点が無いんですね。で、これだけがちょっと区別できるかな？っていうところなんです、はい。それで、あの、実は『ワタナベフジオ』っていう人が多いものだから、私の呼び名は、これなんです。『ナベフジ』。簡単です。『ワタナベ』の「ナベ」と『フジサン』の「フジ」。こういう名前、一応いろいろなことをさせてもらっています。

早速ですが、都留市のボランティア連絡会っていうのができたのが、もうちょうど10年前になりますね。資料がそちらにあると思うんですが、今日は、なんかいっぱい資料があるようですので、ちょっと先に探してみてください。これですね。ボランティア連絡会っていうのができたのが、ちょうど10年前になります。各ボランティアっていうのは、都留市では、もう前から盛んでして、20年、30年とボランティアを個々にしてる方が、沢山いらっしゃいます。当時は、バラバラだったんですね。何か要望があればやっている、そんな感じで、とにかくバラバラで、ボランティアをしていました。実際、私もボランティアを始めて20年経っています。ちょうど20年です。そして、ボランティア連絡会ができたのが10年前で、平成13年1月ということでした。こちらの資料の1ページ目に主旨が書いてございます。この中にも20年前という言葉も入っていますが、市内のボランティアが、連絡会というものを、まとめて作っており、社会福祉協議会の方で取りまとめをしてくださいます。この時に、いろいろなボランティアの人と連絡を取り合いまして、こういう主旨を作りました。誰もが安心して、自分らしく暮らせる、いきいきと暮らせる街づくりの実現ということもありました。それから、ボランティア同士の横のつながり、そして情報交換、こういったものの必要性、そういったことでとにかく「連絡会というものをきちっと作ろうではないか」ということで、「都留市ボランティア連絡会」というものができました。とにかく連絡会ではできたんだけど「じゃあ、どうい



う風にまとめていくか」ということが、まず、ありまして、最初のころは何をしたかっていうと、「ボランティアまつり」です。毎年4月29日に行っております。こういうことをきっかけに「ドンドンまとめたらどうかな」ということで、その年に、ちょうど10年前になりますが「ボランティアまつり」ということを開催しました。ボランティア活動されてる方が、どういったことをやっているか、そういう発表をしていただきました。その当時は、どうしたら皆さんに理解してもらえるかっていうのが、わかりませんでした。例えば、落語家さんと呼んで、人呼びみたいな形で、「ボランティアをまとめる」ということもしました。それから連絡会の規約は、2ページ以降にあるんですが、社会福祉協議会の事務局の方で相談して、このような規約を作りました。細かく読めば時間がかかりますので、どうもちょっと囁んじったりして申し訳ないです。とにかく本日の皆さんの説明が素晴らしいものですから、私は、ガクガク来ちゃって、ちょっと説明がスムーズにいかず申し訳ございません。それで、規約の中で、理事を10名、監事2名、連絡会の会長1名、そして副会長3名を置いて、現在、いろいろな活動をしております。それで、活動の内容は、結局は、ボランティアのサブ化、いろんなニーズがあるんですね。そういったものを、社会福祉協議会の中で中心になって、振り分けという形で皆さんに協力してもらってます。ですから、窓口の方は、どうしても社会福祉協議会にお願いしております。社会福祉協議会の方でも、あの一、先ほどから司会をされております、森嶋が中心となってやっております。とにかく、この人は素晴らしい人で、取りまとめをいただいております。ボランティア連絡会に加入している方が、毎年動きがあるんですけど、最高時には、70団体、約4000人がおりました。都留市だけじゃないんですね。他の地域からも都留市へ入って来ている方もいます。全員が都留の人ではないです。このように、数だけはすごく多いんですけども、ほとんど「私は連絡会に入っているのか入っていないのか」知らない人もいるかもしれないんです。しかし、そういう取りまとめを社会福祉協議会の森嶋の方で、配分とかをやっております。私自身も、「ボランティアを20年以上もやってる」と言っていますが、最初の頃は、「どんなことをやればボランティアなのかな？」というように何もわからないでやっていました。私自身が、どうしてボランティアをするようになったかというのは、自分の育ちからもあります。私も、この間、「タイガーマスク」ですか？ああいう個人の素晴らしい行動も捨てたもんじゃないなと思いましたけれども、今は、そういった施設がありますけれども、私が、生まれた頃には、そういう施設はありませんでした。私自身も、自分がどこで生まれたかっていうのは良く分からないんです。戦争孤児のようなものですね。ちょっと古い話になりますけど、河口湖の方で引き取ってくれるという親がおりまして、そちらで育ちました。決して、スムーズに生きてきたわけじゃなくて、それなりの苦勞はしてきました。学校時代はとにかく、貰われてきたんだけど、当時はやっぱり、働き手として貰うっていうところがありました。額いてくださる方もいらっしゃいますけど、そういう時代だったんで、とにかく、小学校の中頃位からですかね。どうしても農業とかが、こちらでも盛んでしたから、もうその頃から、学校から帰れば、直ぐに「山へ行け」ということに。要するに、畑へ行けということになりますね。そんな状況で、私はずっと育ちましたので、学校の勉強についていけない状態で、ほんとに中学校の時には、おそらく、成績は、ほとんど「1」だったんじゃないですかね。通信簿の成績が、全部「1」なんです。すごいですよね。全部「1」なんていうのは。取っておけば良かったな？ 記念になったかななんて思いますけどね。それで15歳になって、すぐ東京へ、昔は「丁稚」ってありましたよね？とにかく食わしてもらっただけでいい。

そういうところへ出始めて、まあこんな感じですから、仕事が長く続かなくて、あっちに行ったり、こっちに行ったりでした。そして、また河口湖の方へ落ち着いたのが、2,3年後ですかね？それで、なんとか普通の会社に勤めることができるようになって、16歳の時に飯場でギターを弾く人、昔、飯場や、工事現場とか、そういったところで、ギターとか、当時はもう「古賀メロディー」というのが流行っておりましてね。「あれ、いいな、いいな」と言っても、とてもギターが買えるわけでもないし、また音楽の成績もずっと「1」でしたから、1番でしたから、とにかく、とても「私はそういうのには関係ないかな？」って思っていたんですけども、たまたま17歳の頃、ちょうど50年前になりますけれども、私も、今年ちょうど、ギターと歌を初めて50年になります。それも全然楽譜も読めなければ、全然独学でギターを始めまして、そんな関係で、今、私のボランティアっていうのは、音楽の方のボランティアをさせてもらってます。今は、いろんな施設、それからデイサービス、高齢者それから障害者のいるところ、あの機能回復にも使えるんですね、歌っていうのは。そういった形で、だいたい月の半分ぐらいは、あちこちを飛びまわって、ギター持った渡り鳥をやっております。「何か自分が生かせることがあればなあ」ということで、音楽のボランティアをずうっとさせていただいております。とにかく、させていただいてるって気持ちで、私のまわりの人たちが活動しているんです。この黄色いジャンパーですが、これ、私がリーダーをしております、メンバーがいるんですけども、私が、一応リーダーとして、制服とかを揃えてあげればいいんです。ですから、このジャンパーは、私のいろんなボランティア活動をする時は、このジャンパーが制服になっております。あちこちへ行く時は、これを着て、メンバーも背広とかそういう物は着ません。ステージとかそういった所へ出る時は、私は、ボランティアなんですけど、メンバーはやっぱり、お金がかかります。はっきり言いまして、「ボランティアやるっていうのはこんなにお金かかるんだな」って、この20年間つくづく思っています。どうしてかと言いますが、他のメンバーには、やっぱりギャラ払わなきゃならないでしょ？通常、今では、パートでも時給いくらとかそういう感じですけども、時給いくらとか、そういうものじゃないんですね。やっぱり、ワンステージに対するギャラなんです。今回ボランティア連絡会の方でも、ここにもありますけど、「ボランティアソングを10年間やった」ってここに載ってますけど、「募集しようか」という話しになって、そうしたら、やっぱり作曲の方はお金がかかりますね。そんな状況で、今は、ストップしてる状態なんですけど。こんなこともやったり、とにかく、ボランティア自体の、70団体4000人をまとめるっていうことで、私はさせてもらっています。とにかく、いろいろな難しい話も何もできません。ただ、私自身も、個人的に、気楽に、ボランティアで動けばいいなって思っているんですけども、なかなか、頭になってくれる方がいらっしゃいません。今、私程度がやらしてもらっているんですけども、是非、今日はボランティアの方が多いですので、ボランティア連絡会の会長を私に、という方がいらっしゃいましたら、ぜひお願いしたいです。とにかく、あのとにかく私自身が、そういうレベルじゃないんでね、とにかく、全部成績が1番の人ですから。

以上、簡単な説明で申し訳ございませんが、ボランティア連絡会の方の、この資料を読んでもいただければ、「どんな状況でやって来たかな？」ということがわかると思いますので、省略させていただいて、時間もだいぶん過ぎちゃったみたいで、私の持ち時間も、もうとっくに終わっている時間なんで、簡単ではございますが、連絡会の説明とさせていただきます。すみません、ありがとうございました。(会場拍手)

司 会： 渡辺会長ありがとうございました。尚連絡会の内容につきましてはお隣の2102教室に展示コーナーがございまして、連絡会が作ったビデオ等もパソコンで見られるようになっております、各種チラシも置いてありますので、どうぞ改めてご覧いただきたいと思います。渡辺会長さんに今一度大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。(会場 拍手 (大))

都留市まちづくり活動支援センター

都留市まちづくり活動支援センター長 清水 王 也

司 会： 続きまして、都留市まちづくり活動支援センターにつきまして、清水王也センター長より発表していただきます。それでは清水センター長よろしく願いいたします。

清 水： 皆さんこんにちは。清水でございます。名前がさっき出ましたけど、これ「王也」と書いて「キミヤ」と読みますんで間違わない様にお願いします。王様はキミと読みます、キミヤといいます。よろしく願いいたします。



皆さんのお手元にですね、このレジュメがいつていると思いますけれども、これを参考にさせていただいてですね、時間も余りございませんので、理念的な、概念的なことには触れることができないかもしれませんが、活動報告につきましてですね、発表させていただけると思います。

私自身はですね、学校の教員のOBとか、役所のOBではございません。証券会社に37年間おりまして、営業本部の責任者として、東京・大阪・名古屋、37店舗の責任者として旗振りをしてまいりました。出身は夏狩でございまして、平成14年にですね、役員を退任いたしまして、地元に戻って参りました。その時に、今の小林市長からですね、「民間企業にいた、民間人の発想で、まちづくりをしてほしい」ということで、【協働のまちづくり推進委員】というのを、委嘱されたのが、平成17年の4月1日でございます。ということは、東桂地区の人口は7600人です。この東桂地区にですね、【協働のまちづくり推進委員会】をモデル的に立ち上げたいということで、その職責を仰せつかったのが、私でございまして。最初迷いましたけども、やはり長い間ですね、地元を離れておりましたので、地元のために何か役に立とうと思ってお引き受けをしてですね、東桂に、まちづくり推進委員会の設立に関わったわけでございます。それから3年間、東桂のコミュニティーセンターに、在籍いたしまして、そこで立ち上げにかかわりまして、3年後にですね、いよいよ1つの方向性が見えてきたと、東桂に。この方向性を、都留市の中央に来て、7地区に広げてほしいと、こういう要請がございまして、平成15年の7月30日にですね、市民活動支援センターを設置いたしまして、初代のセンター長になったわけでございます。で、やはり「協働のまちづくり」というのを軸にいたしまして、我々は活動してきたんです。しかし、今から10年前は、『協働』という言葉は、知られておりません。今では、キーワードとしてですね、あらゆるところで協働という言葉は使われていると思いますけれども、10年前にはまだまだ、理解が得られないと、こういう時代でございまして、設立の時は、相当な荒れ模様でした。市会議員の先生方からは、「俺らの仕事とっちゃうのか」、自治会長の皆さんには「また押しつけされるのか」と、いろいろな意見をいただきましたけれども、そういうお声が出たということは、可能

性があるということで、逆にですね、あらゆる会合で、10分前段で下さい。そういうことで協働のまちづくりの理念を説いたわけです。やはりあの意識改革には時間がかかります。すぐに意識が変わるからできるわけじゃないんですよ。そういう意味合いで、時間をかけてやろうということで、3年かけてやりまして、今年で10年になりました。センター長として今、7年になります。大きな節目に参りましてですね、この節目で1つの第二段階に入ったと思うんですね。ほんとに驚きだと思います。これからしっかりと将来の自分たちの住んでいるとこのビジョンをはっきりと打ち出していけないと、ただ、今までは「夢見て歩き」かもしれません。イベントもだけど必要です。そういう中でですね、やはり協働の概念というのは、非常に難しかったんですね。だけど、当時は皆さん、みんな活動しているんです。この市民活動団体を、つなげることによって、多く組み合わせることによってですね、その力は、大きくなっていくわけです。そういう組み合わせに努力したのが、この7年間でございました。で、中央に参りまして、この都留市には7地区がございます。その7地区にすべて【協働のまちづくり推進委員会】というのを立ち上げが終わりました。ここからです、ここから本当の正念場だと思います。ここで崩れたら、都留市にはもう2度と【共同のまちづくり推進委員会】や、こういう会は生まれなと思います。私の体験からいきましてね。そのぐらい重要なまちづくりだと思います。で、ここに来るまでの過程をちょっと申しますと、センターができたまでは、それでいいですね？ センターができるまでの過程でございます。まず男女共同参画推進という条例が出ます。これはですね、やはり男女間のパートナーシップを良好にしようとしち上げられたのは、平成13年です。これはいみじくも、全国でトップに条例を作ったと思います。長野県の塩尻市とかですね、それから島根県出雲市。これに続いて、都留市が条例を立ち上げました。で、すると、同時にですね、都留市は都市宣言をしたんですね。『男女共同参画』の都市宣言。これは、山梨県がトップですね。そういう過程を繰り返しながら、平成15年に条例ができたところの中に、規約の中に、項目の中に、市民活動の活性化を目的に、市民活動支援センターを作ることになったわけでございます。しかし、名前の問題というのが、最初スタートの時に、いろいろありました。このネーミングがですね、市民活動じゃなくて、「都留市ボランティア活動支援センター」という案が出てきたんです。しかし、「ボランティア」という固定しちゃうと、段々その福祉的な、高齢者的な、そういう運動に特化するんじゃないか、という意見があったわけです。それから、全てを網羅して活動の中にですね、市民活動って謳えば、ボランティアも入るし、全てがその枠組みに入るわけです。そういう意味合いで、【市民活動支援センター】という名前でスタートしたわけです。その時の主役は、司会の森嶋さんでございます。社会福祉協議会と我々と非常に意見の格差がありまして、しかし何回か、協議を重ねまして、このネーミングに決まったわけです。で、現在ですね、7地区には、ほぼ自分の地域に、特徴を持った一応自然もあり、文化もあり哲学もある。そういう地域の中で、皆さんが、必然的に、自主的に期待する要素を見つけていただいて、まちづくりに発している、というような現状でございます。

時間が本当に迫っていると思いますんで、各地区の1つだけ、主な活動を紹介させていただきたいと思います。まず東桂です。平成13年の11月に私が、初めて就任した時に、何から入ろうかと思ひまして、まず文化祭をと。まちづくりと文化が一番合うんじゃないかと、そういうことで始めてみたんです。その時の最初の入場者は700人でした。昨年は2200人以上が2日間で入りました。ただうれしいのは、その会場の中の雰囲気なんです。お年寄りの方々が、「私も何かしらなければ、何かしな

ければ、この地域で置いていかれちゃう」こういう言葉が出てきたんです。その言葉をきっかけに、その地区の皆さんが、いろいろな講座に参加して、そして生涯学習的な活動をなされながら、皆さんが、文化祭へ、文化祭へと流れてきたんです。ただ、文化祭じゃなくて、それからいろいろ派生をいたしまして、大きな事業になっているわけです。東桂には、もう1つですね、鹿留川っていう素晴らしい河川がございます。組合方式で6年かかりました。昨年から工事が始まりました。片道1.2km、川の幅は150mあります。その自然を生かしながらですね、やはり、遊歩道、幅3mの遊歩道を2.4kmにまわしてくれると、そこまで行政と話しながら、ようやく決定いたしましたして、工事が始まりました。素晴らしい公園ができると思います。それから宝地区におきましては、【七里まつり】と言いまして、文化祭に準ずるあらゆる活動を、1つの会場に集約してですね、運動を重ねております。谷村地区におきましては、【元旦マラソン】。今年は572名の参加がございました。もうまちづくりだけの力では、運営が不可能になってきました。そこで協働なんです。陸上競技連盟、都留市、行政そういうものとみんな協働して、大きなイベントとして、今、育っているというのが現状でございます。で、もう1つはですね、この地区に、7地区に共通しているのは防災の講演会なんです。全地区に防災実行委員会とか名前は違いますがけれども、自然とそういう実行委員会が生まれたんですね。それもやはり社会福祉協議会、森嶋さんの所の社協の防災、それとリンクいたしましてですね、各地区に【ふれあい福祉集会】とこういうのを、私は立ち上げました。今は防災に限っていますけども、これからは防災に限らず、あらゆる部門に、もう子育て支援から、青少年の育成から、全てをその中に網羅して福祉の集会に発達させていきたいというのが、私の願いでございます。とにかく、各地区が自分たちの特性、地域性、風俗、風景、習慣そういうものをですね、頭の中に描いて今後の新しいまちづくりをしていこうということで、昨晚、実は、連絡協議会というのを、今年最初の連絡会を開きました。各地区の3役の方々に集まっていたいて、昨夜は29名の方が参加していただきました。そして1つの新しい第2段階のスタートとして頑張ろうと、市長にも来ていただいてですね、皆さんとお話をしながら、昨晚は連絡会が終わったわけでございます。もういろいろ話したいこといっぱいありますけども、要は、協働の夢というのは、各地区に点在する、優秀な人、優秀な団体がございます。そういうものをつなげて、つなげることによってその結果が、大きな足場になっていくという、そういうネットワークづくりが必要だと、こういう風に考えております。ですから人間関係が、非常に軽薄化されまして、家族とか、地域の絆というのが、非常に大切になって参りましたので、それを軸にしてですね、これからもまちづくりにまい進していきたいと、こういう風に思っています。また機会があればですね、もう少し「協働のまちづくり」の内容についてお話をさせていただきたいと思います。今日はこの辺でご勘弁願いたいと思います。ありがとうございました。(会場 拍手)

司 会： どうもありがとうございました。清水センター長にはご自身の経験を踏まえて、熱く語っていただきました。どうぞ今一度大きな拍手をお送りください。ありがとうございました。

【午前の部の終了】

司 会： 以上を持ちまして、午前中のプログラムが終了いたしました。ここで午後のプログラムにつきましてご案内させていただきます。12:00から13:30まで2号館前ロビーにて食べ物販売コーナーを開設しております。お手元の資料の中にチラシが入っておりますので、どうぞご覧ください。うどん、カレーライスなど、またお茶類など販売しておりますので、各自ご利用ください。飲食につきましては、こちらの教室、ロビー入り口付近で召し上がってください。なおごみ類は分別して、2号館入口のごみ箱に入れてくださるようお願いいたします。また隣の2102教室に社会福祉関連団体による、展示コーナーを設けてございますので、是非そちらもごらんください。午後のプログラムにつきましては、ちょっと時間がおしておりますが、予定通り、13:30から15:20まで、「第4回いこいのひろばプログラム」といたしまして、4つのクラブ活動が開催されます。えー、本日は、パティシエクラブでは、ココアブラウニーづくりを行います。レク・スポーツクラブでは、巨大カルタ、ソフトバレーを行います。音楽クラブでは、手作り楽器制作、演奏を行います。チャレンジクラブでは、まごころを包むラッピング教室を行います。どうぞ皆様、ご自分の行きたいところに、行って楽しんでいただきたいと思います。なお15:30から、まとめの会をこちらの教室で行います。恐れ入りますが、皆様、それぞれの会場からこちらにお集まりください。なお、封筒の中に、このようなエコバックを入れさせていただいております。本日は大月警察署、大月交通安全協会、山梨県交通安全協会大月支局から提供していただきましたので、ご紹介させていただきます。尚、アンケートにご協力いただきたいと思います。お手元の封筒の中に入れてございますので、お帰りの際に受付に設置してある、回収ボックスに入れてくださるようお願いいたします。ご不明な点がございましたら、本日スタッフがこのような腕章をつけておりますので、お気軽にお問い合わせください。それでは、皆様、昼食・昼休みをとっていただきたいと思います、大変お疲れさまでした。(会場 拍手)

下 平： 失礼します。少し連絡あります。あの移動しながらお聞きください。午後の「レク&スポーツクラブ」なのですが、体育館は文大体育館の方になります、こちらから見て左側の体育館になりますのでよろしくお願いします。皆さんで移動したいと思いますので、13:30になりましたら、ここの教室にいただければ、みんなで一緒に移動したいと思いますので、レク&スポーツクラブは13:30に2101教室、ここに集合をよろしくお願いします。以上です。

まとめの会

司 会： それでは皆様、お時間となりましたので、只今からまとめの会をはじめさせていただきます。

午前中の講演、事例発表、活動報告も含めて、参加してみての感想、ご要望がございましたら、どうぞ高く手を挙げてください。お願いします。

皆さん、ちょっと遠いのでどうぞ前の方へお詰めください。ちょっと、こじんまりとやりたいと思います。じゃあ前の方へお詰めください。お願いいたします。

ご協力ありがとうございます。それでは、なかなか発言もしづらいと思いますので、それでは、各クラブ、4つのクラブがあったんですが、各ボランティア・リーダーの方、どんな活動をなさったか教えていただきたいと思います。パティシエクラブのリーダーさんはお戻りですか？

会 場： まだ来てないようです。

司 会： それではレク・スポーツクラブのリーダーさんお願いします。（会場 拍手）

下 平： 皆さんお疲れさまでした。レク&スポーツクラブはですね、あそこの体育館で、最初に巨大カルタをやってきました。いわゆる普通の小さいカルタはみんな遊び慣れていると思うんですけども、それもちょっとした工夫で、こんなに面白くなるんだよ、ということ伝えたいのを目標にやってきました。体育館をほんとに目一杯使って、サイズは、このくらいですかね？このくらいでかいカルタを並べまして、2チーム、それから最後は3チームに分かれて、やったんですけども、危ないんで走らないようにしたんですけど、ほんとに体がポカポカ温かくなるくらいで、他の見学に来た方が、「体育館寒いけど大丈夫？」って言うんですけども、それを感じないくらいあったかくポカポカすることができました。で、次はですね、最近、あの一、巷で話題になってきている「ポッチボール」バビブベボの「ボ」なんですけれども、「ポッチボール」という新スポーツがありまして、それをやってみました。いわゆる、陸上っていうか土の上でやる、カーリングみたいなもので、ボールを置いていてですね、そこにボールを転がして、近い方が勝ちという、まあ、カーリングと同じ内容なんですけど、陸・氷の上でもできるカーリングということで、ポッチボールっていうのを紹介しました。「今度自分たちの施設の方でも、やってみたいなあ」という意見が聞けたので、紹介できてよかったんじゃないかなって思います。ということで、今日、冬で寒い日なんですけども、ポカポカと温かくできたのでよかったんじゃないかなと思います。ありがとうございます。（会場 拍手）

司 会： お疲れさまでした。それでは、次に音楽クラブのボランティア・リーダーさんお願いします。（会場 拍手）

中村香葉： 皆さんお疲れさまでした。音楽クラブでは、今日は前半と後半に分けて、「身近にあるもので楽器を作ろう」ということで、これは、（作品を披露しながら）ちょっと、なんかいろいろカスタマイズされてるんですが、こういう感じで「ストロー笛」とか、「デンデン太鼓」、「紙パックで作るギター」、「カスタネット」、「マラカス」なんかをみんなで作って、遊びました。皆さんの個性あふれる楽器が見られて良かったなあと思います。最後にみんなで「きらきら星」に合わせて楽器を鳴らしてみました。皆さん楽しそうだったのでとても良かったです。

会場から： その音色をちょっと聞かせて下さい。

中 村： これはなかなか音を出すのが難しくて…（笛を吹いてみる…が、音が出ない）。
（会場 拍手）

中 村： ありがとうございます…（笛を再度吹いてみる…音が出ない）。（会場 笑）

中 村： なかなか笛は肺活量が要ります。デンデン太鼓は割とちゃんと鳴ります。こんな感じでした。ありがとうございました。（会場 拍手）

司 会： 楽しそうでしたね。どうもありがとうございました。えーそれでは、チャレンジクラブのボランティア・リーダーさん、お願いいたします。

上 原： はい皆さん、大変お疲れさまでございました。（会場 拍手）

上 原： あの一私たち、私の場合は、あの一、商売でこういう包装とか、ギフト関係をやっております。ですから、なんか、こう難しくないんじゃないかなと思ったんですけども、やはり、初めてなさる方が多かったようで、ちょっと、こう折ったりなんかするところが大変だったような気がします。これも何回か重ねてやっていきますと、自然に手がそのように動いていくと思いますので、今日、包装したものを、皆さんにお持ち帰りしていただくことになっておりますので、そちらの方で、またお家へ帰って、広げて「あーこうだったな、あーだったな」ということを、思い浮かべながらやっていただきたいと思います。あと、袋の方のラッピングなんですけど、1つだけお教えしたんですけれども、ただ普通に袋を折って、そして皆さんにプレゼントするんじゃなくて、そこに、1つ工夫を加えて、リボンもちょっと普通と違ったかけ方を自分でもアレンジして、本当に、今回のタイトルでもあります「真心のこもったプレゼント」をするための、これから、またバレンタインデーもありますので、是非そういった時にも、活用していただければ嬉しいなと思います。今日はたくさん参加していただきまして、誠にありがとうございました。（会場 拍手）

司 会： お疲れさまでした。ありがとうございました。それでは、パティシエクラブの方がまだボランティア・リーダーさんが来ていないようですので、大トリでお願いしましょうか？それでは、その間にどなたか、他に参加しての感想をどうぞ、地域の方、よろしくお願いします。

渡 辺： 私、一言いいですか？

司 会： はいどうぞ。お願いいたします。（会場 拍手）

渡 辺： あの一、実は、今日はね、特に学生の皆さんに私の話を聞いていただきたかったです。で、あの説明がなんか今日、お偉い先生ばかり来ちゃったもんですから、私もビビりまして、あの、最初言った通り、私は、小学校、中学校は全部「1」番でしたから、あのとにかくそういうことで、ほんとに今日はビビって、もう自分が、今日何が言えるかわかんないような状態だったんです。ただ、私は、お礼申し上げたいんですが、あの「ボランティアまつり」、今は4月29日に行っております。これに、ほんとに、もう4年になる方もいらっしゃると思うんですが、ずーっとお手伝いいただきまして、ほんとにありがとうございます。学生の皆さんの協力がなければ、あの「ボランティアまつり」というのは成り立たないんです。とにかく部門、部門でやっぱり、お手伝いをしてもらう、そういった形で、皆さんのお手伝いがなければ、とても成り立たない。とにかく、第1回からお手伝いしてもらっています。ほんとに、あの4年の皆さん、心から感謝します。ありがとうございます。あの

「ボランティアまつり」っていうのは、今、このボランティア連絡会っていうものが、あるんですけど、ボランティア連絡会は「「ボランティアまつり」のためにやってる？」っていうのが、ずうっと何回か続いたんです。で、これではいけないってことで、連絡会をもっともっと広げたいってことで、皆さんのお手伝いをいただいたり、そういったことで、今は「ボランティアまつり」がほんとに、あの、都留市の皆さん、それから郡内の皆さんにもわかっていただけるような「ボランティアまつり」になっています。で、昨年ちょうど「ボランティアまつり」で、「手伝いに来たんだけど、なんだこりゃあ、『ボランティアまつり』って言ったって、そのボランティアに浮かれてるだけじゃねえか」とそういう意見もありました。でも、それでいいんです、とにかくどんな格好でもいいから、「ボランティアっていうものを理解してもらえればいい」っていうのが、その「ボランティアまつり」の趣旨なんです。今日のフォーラムもそうだと思います。ですから、皆さんの頑張りっていうのがね、これから是非将来に向けて、えー地元に戻って、教員をなされる方とか、いろいろいらっしゃると思います。是非、この都留市でボランティアしたってことを、経験を生かして、今後に生かしてもらいたいと思います。なんか、私あのちょっと、言葉が足りなくてね、もっともっと言いたいんですけど、ほんとにお礼の意味で、ありがとうございました。

会 場： 拍手

司 会： ありがとうございました。渡辺会長様、今日は帰って眠れるように、どうぞ温かい拍手をもう一度、ありがとうございました。

会 場： 拍手

司 会： どうもありがとうございました。それではですね、パティシエクラブのボランティア・リーダーさんがお戻りですので、どんな様子だったか教えてください。お願いします。

内 田： すみません。こんな恰好で失礼します。パティシエクラブのリーダーです。いつも、パティシエクラブは、片付けや何やらやってたりして、遅れてしまっって、ちょっと迷惑をかけてしまっって、ちょっと遅くなっってしまったんですけど、ほんと申し訳なく思います。えーパティシエクラブでは、今回は「ブラウニーづくり」ということで、みんなでお菓子作りをやったんですけども、今回は、一般の方がお見えになられて、結構お子様連れの方が多かったんですね。小さなお子さんと、いつもの参加者さんと一緒になってやっているような感じで、とても楽しくやれました。そしてでき上がったお菓子の方もとてもよくできてましたし、中には本当にとっても作るのが上手な方もいて、そういった方の個性というか、特技というのをまた1つ発掘できたんじゃないかなという風に思います。えーそんな感じで、パティシエクラブは、お菓子作りを全員で楽しくやれたと思います。どうもありがとうございました。(会場 拍手)

司 会： どうもありがとうございました。それではほかに何か参加してのご意見など発言していただきたいと思うんですが、今日はですね、実は、あの、この事業をご案内したところ、山梨県立桂高等学校の方で、実はJRCというボランティアクラブ活動なのですが、今日は3名の方が自発的に、「ボランティ



アで協力したい」って来てくださったんです。どうぞ一言声を聞かせてください。どうだったですか？今日。

井 上： 桂高校JRC部長のイノウエマサシです。今日は、めったに経験することのできないことばかり体験させていただき、どうもありがとうございました。自分は体育館で、スポーツをやったんですけど、そのときに、初めてやった競技がありまして、学校とかで全くやったことがなかったので、ルールとかも全くわからなかったんですけど、大学生の方がすごいわかり易く説明していただいて、とても楽しく遊ぶことができました。ありがとうございました。（会場 拍手）

司 会： ありがとうございました。はい、じゃあ一言頑張って言ってみますか。声聞かせてくださいお願いします。

藤 本： 桂高校のフジモトメグミです。今日1日参加して、沢山のひととふれあうことができました。ボランティアもいろいろな地域で沢山のボランティアをしていることを学んで、すごくいい経験になりました。ありがとうございました。（会場 拍手）

司 会： ありがとうございました。

吉 田： 桂高校のヨシダメグミです。今日は楽器作りをやったんですけど、うまくできて良かったです。（会場 拍手）

司 会： どうもありがとうございました。今日はですね、3人で来ましたが、桂高校、お仲間もほんといふんですが、せっかく都留市にこういう都留文科大学があって、大学生のボランティアさんがいるんだから、交流したいという意向がありまして、高校生ボランティアと大学生ボランティアの交流っていうのが、今日をきっかけに、これからご縁ができるといいなと思います。3人の方、本当にありがとうございました。お疲れさまでした。（会場 拍手）

司 会： それでは、NPO法人「くまちゃん」の理事長さんが、せっかくいらしてらっしゃるので一言、是非、声を聞かせてください。今日は、わざわざ大月から来ていただきました。はい、大変熱心に、幅広い地域福祉活動を展開されています。どうぞ、マイクを向けてください。

理事長： 皆さんこんにちは。

会 場： 「こんにちは」

理事長： 今、突然にご指名いただきまして、何の心の準備もありません。ただ、私が今日、参加させていただきましたのは、都留社協の森嶋さんとの、いろいろな、長年の社協を通じての付き合いと言いますかね。NPOとしてのお付き合いをさせていただいております。今回も、実は、昨年から、全国の方で地域福祉の関係で、ボランティアとか、あるいは、うちの場合は、今、介護生活支援研修の主催をしておりますけれども、それとは別個に地域に基づいて、できれば、地域の皆さん方が、それを、高齢者、障害者を、何とか地域の力でもって、周りをお手伝いしながら、というような意味のことを、今、国では考えておりましてね、それが昨年、一昨年からですか、国の方から、そんなお話がありまして、ようやく、ここでその介護生活支援サービスサポート養成研修っていうものを、ここで、私共NPOでやることになったんですね。まだまだ未熟なんですけども、ただ、それは、介護保健所のヘルパーさんがやる養成とは別個



でして、できれば、認知症の方もちょっと学んでみたいとか、あるいは消防署の関係の方がいらしてくださって、そして心肺蘇生法とか、救急吸入法とか、介護保健所のヘルパーさんとは別個の考えで、ただ、やっていく皆さん方、利用者、高齢者、利用者っていいますと、高齢者、障害者とか、子どもさんたちになりますけれども、そういう方たちの、できれば、生活をなるべく皆さん方の力で担っていただきたいというようなことが、私もちょっと及ばずながら考えまして、これは、たまたま、都留と大月でということもあったのですが、あの協力してくださる方が、甲府にありまして、そちらの方で、今回、第1回目を、サポート養成研修を行うことになりました。で、そのことについて、今回、森嶋さんにもお願いしまして、ここでチラシを置かせていただくことになりまして、急遽、今日も、前々から資料いただき、森嶋さんからも、今回のことをお知らせいただいておりますので、予定はしてたんですが、チラシを置かせていただくことが、急遽、自分自身で決まったものですから、置かせていただくことになりまして、どうぞ皆さん、もしよろしかったら、7回のコースでさせていただきたいと思っております。で、あの、1回につきだいたい500円くらいの費用で、先生方は、県立大の坂本玲子先生とか、それから先ほどのボランティア協会さんの岡さんとか、あるいは消防署の方、それから、県社協の1階にあります実施センターの講師の方とか、あるいは、私とか、その他のいろいろな民間等を含めた、実際に、現実に行っていましたものを含めて、皆さん方に及ばずながら、お知らせしていきたいと思っております。今回はこう見ますと、大学生の方がだいぶ多いんですね。あの非常に、都留市はそういう面では、文大の学生さんが、いらっしゃるということで、快く思っております。ちょっと大月の中の1人としては、さみしい思いをするんですが、どうぞ、少しずつでも構いませんのでね、地域から少しずつ、大学生の力を借りながら、あの、地域の、介護を含めた生活支援っていうものを皆さん方で担っていただくような心がけをしていただければと思っております。突然ですから、何の用意もなくここで喋らせていただきました。ありがとうございます。また今後ともよろしくお願いいたします。（会場 拍手）

司 会： どうもありがとうございました。はい、大変、地域の中で熱い思いで頑張っておられる方です、ありがとうございました。

それでは他にいかがでしょうか？はい。今日はですね、都留市以外にも、山梨県の中で遠くは南アルプス市、また、甲府市、忍野村、大変、山梨県下の幅広い地域から、そして幅広い様々な立場の方たちが、この機会にご参加をいただきました。ここで、山梨県社会福祉協議会の地域福祉課長であり、地域福祉県民養護センター所長を務められている、タナベミツマサ様にご講評をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。（会場 拍手）

田 辺： すいません、今ご紹介いただきました、田辺と言います。今日は、『ボランティアが地域を変える』という大きなタイトルで、このようにフォーラムが進められて参加させてもらって、今の気持ちはですね、「来て良かったなあ」そんな思いですね。非常にいろんなことが、今日は教えていただいたり、感動をいただきました。先ほど、渡辺さんこと、ナベフジさんが、あのお話がね、最初の時、十分できなかったって



話がちょっとあったんです。実は、休みの時間中にね、お会いしたら「いやあさっきはね、十分に話ができなかったんだよ」てね。ほんとに心の中が悶々となさってたんですけども、そんな話をちょっと別の所で聞く機会がありましてね。なんかまあ、変な話、ナベさんね、こうポロポロポロって言いながらですね、奥で過ごしました。そんなことってのはね、やっぱり、そのナベさんの温かさ・熱さ・思いの深さかなってようなことをね、感じたんですけれども、それを「ああ、良かったなあ」っていう1つ1つね。それからね、先ほど、あの実践の中で、都留市のまちづくり市民活動支援センターの清水先生のお話のお話があったんですけれども、「協働のまちづくり」、すごく、その着実に何年もかけてきてるんだな。1日や2日でまちづくりなんてできるもんじゃなくて、何年も、何年もかけて、しかし、その中に、そういう人の目的というか意識がね、失わないで、されていた、そういうリーダーの方がいたから、やっぱり今日があるんだなあなんてことも感じました。なんか「まちづくりは目的ではなく手段なんだ」。あのフレーズも、非常に何か教えてもらったような気がしましてね。「協働すればいいんだだけじゃなくて」っていうことだと思うんですが、そんなこともね、あのすごく心を打たれたことの1つです。それから、あと、学生の皆さんのことが話に出ていましたけれども、「ボランティアひろば」の下平さんでしたっけ？それから内田さんでしたか？あの、お話をね、上手に説明しましたね。ああいう風にわかりやすく、HP、インターネットをどう活用するのかまでですね、ちゃんとコメントしていただいて、すうーと入っていきましてね。やっぱり、みんなにわかるように、丁寧に説明していただいた、あの姿にね、「僕もこれから参考にしていきたいなあ」とほんとに思いました。それから、またその前が、えーと、アカペラサークルの、あの「ぼんかん」っていうんですか？「ぼんかん」のね、「ぼんかん」でいいのかな？ここにメモしたんですけど、あのコンサートには癒されましたね。自分もそばに行ってできたら一緒に「あー・うー」歌ってみようかって思ったんですけど、なんかねそのくらい、引き寄せられて、皆さんの気持ちがね、心が1つになる。私の娘が、吹奏楽やってるんですが、吹奏楽やる時のね、顧問の先生の言葉が、「心を1つに」ということを、よく言われるんですが、なんか今日ね、ぼんかんの皆様は、なんかそんな雰囲気を感じまして、「何事も心を1つにしなければ、1つの物事っていうのは成就しないのかな」なんていうのをね、こう感じさせていただいて、すごく、その登録ね、明日から、もし許されるなら登録して一緒に、なーんてぐらに思うほどでした。まあそんな風にですね、いろいろと、こう「ボランティアが地域を変える」っていうことのお話が、今日のテーマだったようなんですけれども、非常にいくつかの切り口、いろんな切り口でね、今4人の方の報告ですか？それぞれの皆さんと一緒に、午後に実践されたお話を聞かせてもらえましてね。私も4つの会場を、あの田中先生や社協の事務局長さんたちに案内してもらって、少しずつ、ちょっこしね見せてもらって、どの会場もね、すばらしいな。パティシエとか行ったらね、お菓子作っててね。娘がうちもパティシエなんですけども、なんかね甘い香りでね、クルミをいろいろまぶしてね、作ってるあの姿にね、「なんかお菓子はね、相手を喜ばせるためにお父さん作るんだよ」なんて、うちの娘は言うんですけども、なんかそんな風に1つ1つ作る・込める、その姿とか、作り方1つが、すごくなんかね、そんなことダブっちゃったもんでね、ちょっとうるるんとしたんですけども、やはり、その会場もそうでしたが、それから何でしたっけ？包装ですか？上手に使うんですよ。あのボランティアのお母さんが、あのいろいろなことでね、「こういう会に出るけど、まだ2年生でね」なんて言っていましたけども、お母さんね、非常に熱心に、なんか一生懸命なんです。なんか自分にできるこ

ととか、自分がこれやって、何か、おそらく、それを役立てようとか、この先にあるんだと思うんですけども。大変そんな姿にもね、感動していました。で、あと体育館の方に行ったら、もうお時間で「はい、それまでよ」だったんですけども、なんかいろんな催しものがあったんですけども、いろんな切り口でね、この1つのテーマに迫って、「ボランティアが地域を変えるんだ」って。

私は大橋先生のお話が、一番、私なんか昭和52年に大学を卒業して、淑徳大学なんです、私の場合は、それから、社会福祉協議会に就職しましたけれども、当時のね、DNAがそのまんま今の仕事してる。大橋先生言っていましたね、「日本の歴史の中で福祉の考え方とか、ありがたが、ややもすると、受け入れられないんですね。なんか声かけられないと自分が動かない」みたいな話ですか？なんか、実は、私も始まる前に大橋先生にお会いして、「先生、今日はよろしくお願いします。教えてもらいに来ました。」なんて私、言ったんです、立ち話しの中で。そしたら「タナベ、そうじゃないんだよ、もう教えてもらうじゃなくて、共に輪を広げるんだよ」って言うんですよ、大橋先生が。その意味がすごくグサッと来たんです。やはり、あの教えてもらうんだけど、「一緒に、一緒になってね、自分にできるところは自分がする」というね、行政は行政の役割がある、市民は市民の役割がある」というお話もあったかと思うんですけど。やっぱり、私はだから、「ボランティアが地域を変える」というテーマは、何を、今回学んだかなあ？って、自分にふり返ると、「ボランティアに自分もなる、そして自分のできるところで精いっぱい変える」的なところへどうアプローチするのか？どうかかわるのかっていうのが、なんかね、自分にとってはですよ、大事なことだと思いました。1人1人がですね、今日の朝からのこのプログラムですから、いろんなところから学ぶことが沢山あったと思うんですけども、森嶋さんの司会も流暢でね、非常にもうNHKを超えますぐらいですね、皆さんどうですか？森嶋さんの司会ぶりは？(会場 拍手)

素晴らしいと思うでしょ？もうキャリア長いんですけども、彼女は、いつもあんな風にですね、素晴らしい司会をします。それでもう最後、時間になるので1つだけ、皆さんと一緒に協力したいんです、いいですか？皆さん、あと1分か2分。ちょっと歌を歌いたいんですが、さっきのアカペラに触発されて、ちょっと立ってもらってよろしいですか？(会場 手拍子) (「幸せ作ろう〜♪」披露、会場と一緒に合唱)

この「幸せ作ろう」はですね、今日の「地域を作ろう」、どうですか？地域を作ろう、とかね。そんなわけで、一言そのフレーズだけ入れて、今の皆さんも歌って。これで終わりにしますから。皆さんで、よろしいですか？今のところ。さん…はい。

(会場と一緒に、「地域を作ろう〜♪」合唱 拍手)

どうもありがとうございました。失礼しました。

司 会： どうもありがとうございました。田辺課長様には、日頃から大変お世話になっております。本当に、今日のこの機会の主旨をお汲み取りいただきまして、温かい最後に講評をいただいたところであります。今日は山梨県社会福祉協議会の職員の新藤さんと2人で来ていただきました。どうぞ皆様、温かい拍手を送ってください。ありがとうございました。(会場 拍手)

田 辺： なんか余計なところかもしれないんですけども、学生の皆さんの11団体の皆さんの話が今日出ましたね。あれを大橋先生ともちょっとお話しして、学生のパワーにうんと圧倒されたんですけども、山梨県内のそういう大学生の皆さんの交流の場というようなことも考えて、あの私共、社会福祉協議会も、またいろいろ一緒にした

いと思ってるんですが、是非ですね、作って、全体的に、少しですね、交流がもっと広がるようなものを作ることを、ちょっと今、考えておりましたんで、ちょっとその点だけ大変あれですが。また機会があったら、あの8月にね、お会いしたいなあと思ってますけども、よろしくお願いします。すいませんでした、お時間いただきまして。(会場 拍手)

司 会： ありがとうございます。今日のがきって今後の、またいろいろな形でつながっていくと思います。本日は皆様のご協力によりまして、滞りなくフォーラムを進めることができました。ここで皆様に、2点ほどお願いがございます。アンケートにつきまして、お願いいたします。お帰りの際に、受付に回収箱を備えてありますので、そちらの方に入れてくださるよう、お願いいたします。2点目は、今日受付におきまして、受付名簿にお名前を書かれていない方、恐れ入りますが、こちらの方の正面の中央に名簿を置いときますので、お帰りの際には是非、一筆書いていただきたいと思います。以上をお願いさせていただきました。それでは、以上を持ちまして、第7回地域交流研究フォーラムを閉会とさせていただきます。本日は皆様、大変ありがとうございました。(会場 拍手)

司 会： 最後ごゆっくりとお出口の方へお進みください。お気をつけてお帰り下さい。ありがとうございました。

第7回地域交流研究フォーラム 寄せられた感想

- ・活動する上の原動力となりました。大変良い講演でした。
- ・いつも同じようなことを考えていたことを思っている先生と出会えたことを嬉しく思いました。元氣な限り活動を続けて行きたいと思います。
- ・今日のお話とっても良かったです。社会が私に何をしてくれるかでなく、私が社会に何ができるかということ、それだけでもわかったこと、これは大いに良い。自分の意志で動くこと、これが一番大切。
- ・本日の内容は若者にこそ聞いて欲しい内容でした。
- ・ボランティアの本髄が話を聞いて分かりました。
- ・ボランティアについての基本的な理念をわかりやすく解説してくださり、活動する上でのエネルギーをいただきました。
- ・地域のボランティア活動について多くのことを知ることができました。大学生のみなさんが多くの活動をしていて、私たちも頑張らなきゃいけないと思いました。
- ・JRC部に入っていないながらも何も知識が無かったので、今日の講習会を通してたくさんの方が聞いて良かったです。
- ・個人一人ひとりの自覚の大切さに気付かされた。人間って良いなと感じる人間に、今を生きていきたいです。
- ・大橋先生はともかく、学生さん（大学）と社協の話し合いによって生まれた「文大ボランティアひろば」からこうしたフォーラムは大変うれしいことです。学生（若者）の活動を支援したいです。
- ・とても楽しくて、わかりやすく、興味深い話でした。都留市にも交流の場を設け、活動ができることを望みます。
- ・途中参加で講演は聞けませんでした。結婚して山梨に来て、初めてボランティアに参加するようになりました。声かけ等のきっかけが無いとなかなか入り込めないと感じました。現在、一人や数人で行うボランティアに定期的に参加しています。
- ・ボランティアについての歴史についていろいろ知りました。大変わかりやすい話でした。
- ・お話をうかがって自分の気持ちから肩の力が抜けて、もっと楽にしようと感じることができました。今日はありがとうございました。
- ・大橋先生のお話は大変勉強になりました。ボランティアについて考えさせられました。なお、室内が大変寒く感じ具合が悪くなりそうで、今後は暖房に関して、少し考えていただけたらと思います。
- ・国家に何をしてもらいたいかでなく、われわれは何をしてあげられるか、この考え方、改めて自覚しました。「博愛」についても、自分の身の回りから子どもに孫に、近隣の人たちに少しずつでも及ぼしていけたらと思います。展示もすばらしく、歌も間にはさみ、全体的にとっても飽きさせず良いフォーラムでした。ありがとうございました。
- ・地域づくりに関わっている関係で、交流センターの事業、今回は大橋先生の講演に参加させていただきたく出席しました。大橋先生の講演は日本の文化、社会の構造から現状、これからのあり方について多くの示唆をいただきました。ありがとうございました。交流センターが地域と連携を取って取組んでいる事業、大変

学ばせていただいています。地域は学生の学ぶ場であり、センターは地域の中のセンター的な場として大きな機能を発揮していて、その取り組みは、進んだ取り組みとして広まってくれればと思いますし、学んで生かしていければと思います。

- ・大橋先生のお話を聞いて「何をしてもらうか」でなく「自分は何ができるか」を一人一人が考えて地域の方と協力して実行していくことが大切だと痛切に思いました。思いはあってもなかなか行動に移せないことも多いですが、自然にみんなで助け合える、そんな地域を目指して日々、何かできることを探していこうと思いました。
- ・大変参考になった
- ・早朝より大会関係者お寒い中ご苦労さまです。大変親切にいただき感謝申し上げます。4つの課題について、身近な例を挙げ分かり易く説明していただき良かったです。日常生活の中にボランティアを必要とすることが無制限にあるわけですが、どのドアを開けて入っていくことが効率的で喜ばれるのか疑問がありましたが、日常生活のしづらさに支援することが第一歩と考えました。安全・安心の地域づくりに役に立てるよう今後も私なりに努力していきたいと思っています。
- ・参加させていただき、すごく勉強になりました。人は小さなこと、自分なりにできることをする。人と人は助け合いであり、支えである。自分の考え、物事を大切にすることが大事である。市民の参加が最も大きな力になることであると思った。
- ・皆と一緒に力を合わせて地域の油となること。ボランティアが無くなる社会が理想といわれ、理想郷ですね！すべての人が博愛の精神をもって教育されていれば高まっていくというお話、地域の方々との交流ということが一番のボランティア、一日でも暇がある人が地域の人たちの為に何かできるかということがボランティアである先生のお話が全て身にしみました。素晴らしいお話しありがとうございました。
- ・ボランティアに携わって2年が経過しましたが、本当にまだ微力ですが、応援しながら自身の勉強もしていきたいと思っています。本日の講演をとってもゆったりとした気分で聴けました。地域の方とも連携をとり活動に参加しようと思いました。
- ・高度なボランティア活動の根底を分かり易く説明し、とても勉強になりました。
- ・初めて先生の講演を聴きましたが、大変良く分かりました。これからは私のできる限り頑張っていきたいと思っています。
- ・とても難しい内容でしたが、とても細かくお話しが聞けて良かったです。
- ・市内のボランティアコーディネーターは活躍しているのですか？会議だけでなく、コーディネーターがボランティアを集めたり、そこに尋ねれば、人を配置できるような情報を持っていたきたい。積極的に活動して欲しいと思う。
- ・ボランティアは継続が大切、月1回、年1回でも30人いれば1カ月、365人いれば年間活動ができるというお話、今まで気がつきませんでした。暇が無いからということでは理由にならない。やる気だと思いました。誰でも何かができるのではと思いました。
- ・大橋先生の講演がとても素晴らしかったです。今までの自分が気付かなかったことや考え方に気付かされとても勉強になりました。これから今日教えていただいたことを自分なりに実行できるように頑張りたいと思いました。「ボランティアひろば」の発表もとても分かり易く素晴らしかったです。
- ・それぞれの発表が本当に素晴らしく考えさせられるものでした。アカペラサーク

ルの歌声も素晴らしかったです。感動しました。

- ・大橋先生の講演、もう一度聴きたい。
- ・大変有意義な講演であった。ボランティア活動を実施して半年が経つが、地域に密着した活動を一步一步していきたい。
- ・分かり易く勉強させていただきました。憲法89条のことも驚きました。もっとお話を聴きたいと思います。コミュニケーションの手段の変化、幼い頃からのインターネット、メール…どうお考えですか？マスコミとの関係、例えば、子どもたちの怪我、すぐ全国に報道されてしまうこと。
- ・ボランティア活動の原点、基本的な考え方について再認識することができました。また、安全で安心な社会はボランティアが基本で、改善していくために行政を如何に動かしていくことが大事なのだということを学ぶことができました。有意義な時間をありがとうございました。短時間でしたが、ハモネブとても良かった。もっと聞きたいと思いました。

活 動 報 告
2010年度

活 動 報 告

2010 (H22) 年度

Ⅰ. 2010年度の活動について〔概況〕

2010年度は、地域交流研究センターの開設から7年の時間が流れ、それぞれの部門活動が、これまで積み重ねてきた様々な経験を基に着実に新しい一步を踏み出したことが挙げられるであろう。

フィールド・ミュージアム部門では、画期的であった現代GPでの取り組みも終了し、更に将来に向けての新しい一年の始まりを予感させる年であった。

平成22年3月13日から6月13日まで国立科学博物館で開催された「大哺乳類展」への展示協力がきっかけとなり、都留文科大学の同展への協賛が実現されたこと。また、開始以来、本学関係の展示全体に対する多くのご意見やご指摘をいただき、主催者側との交渉の結果、ゴールデン・ウィーク間近の5月1日の閉館後に、北垣氏の指示により、展示全体の改善工事が実施され、より分かりやすく、丁寧な展示へと生まれ変わった。また、この展示スペースを利用した、フィールド・ノート作成に関わった本学学生による「展示解説」や北垣氏による2回のギャラリー・トーク、そして講演会の開催等、展示協力および協賛団体ならではの特別プログラムを実施できたことも大きな成果として挙げられる。この経験により、予想もなかった新しい交流が生まれていることも、「フィールド・ミュージアム」部門における大きな展開が期待されるところである。

また、昨年度発行した「都留市環境副読本」第1部「都留の自然」に続き、新しい「都留市環境副読本 第2部」を市内小学校環境教育の教材として作成する事業にも引き続き参加している。

発達援助部門でも、SAT事業での市内小中学校と大学教員の共同によるケースカンファレンスが具体化に近付いたことや、平成22年度入学生から適用となる、新たな必修教職科目「教職実践演習」のカリキュラムの主軸として運用されることに伴い、GP事業終了後にも、引き続き、大学や教育委員会からの支援を受け、新たな展開に向けて活動している。地域教育相談室においても、継続的に教育委員会主催の研修会や校内研の講師としてスタッフを派遣してきた結果、その研修会の参加者の情報によって相談室の活動が伝わり、その存在や役割がさらに認知されてきていること。地域情報教育においても、昨年度、小学校8校、中学校2校のホームページを、新システムによって新規に立ち上げたことにより、引き続き運用支援を行っている。また、新たに、都留第2中学校が、区内にある禾生第1小学校と禾生第2小学校との連携で実施する、『やまなし心づくり研究指定校事業』にもWebページ作成・運用に関する面での支援をすることになった。

暮らしと仕事部門では、引き続き、山梨県「魅力メッセンジャー」事業との提携による、「地元学」「地域交流研究Ⅲ」を開講し、また、「農のある暮らし」のテーマに共同学習会の開催や、農業系学生団体との交流活動や世界と地域を結ぶ講演会を開催するようになったことなどである。

加えて、一昨年、ボランティア活動を通して、学生と地域が交流できる場をとるという目的で都留市社会福祉協議会との話し合いで開かれた「文大ボランティアひ

ろば」も引き続き積極的な活動が展開され、その中から、18歳以上の知的障がいのある方たちとの交流を目標に『いこいのひろば』プロジェクトの活動が始まったことも、特筆すべきことである。

これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが、ようやく形を成してきたという性格が強く、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認したい。

また、これまでも、センターにおける活動が拡充するにつれ、スタッフ・体制の拡充を求めてきたが、その第一歩として、フィールド・ミュージアム部門の、北垣憲仁氏が、非常勤講師から、特任准教授として、更に、教育相談室部門では、品田笑子氏が、非常勤講師から特任教授へと採用された。また、センター事務局全体の業務運営担当者として、アルバイト職員志村夏樹氏が配備されたことにより、センターとしての体制づくりはまさに開始されたばかりである。

平成22年度に実施された大学基準協会における本学に対する大学評価の「社会貢献」の部門における文章の一部を紹介する。

『地域への社会貢献としては、地域交

流研究センターが重要な役割を果たしている。同センターの活動としては、「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと仕事部門」「各種メディア活動」「地域貢献活動事業」があり、大学と地域を結び、多くの学生、教員が参加している。「フィールド・ノート」の編集や小・中学校において教員の補助として参加する「学生アシスタント・ティーチャー事業」など、学生の教育と地域貢献、社会貢献とを有機的に結合させたさまざまな取り組みを中心的に推進しており、その活動は高く評価できる。ただし、活動内容に見合ったスタッフ、体制の拡充が課題となっている。』

この現状は、実地調査においても強く指摘されており、騒音問題に悩まされ続けている現状の解消を筆頭に、体制拡充に向けてこれまで以上に忍耐強い交渉が必要であると痛感する。

最後に、大学全体の中での、「地域交流研究センター」の位置づけである。特に、センター活動に関わる教員は、まだまだ一部であると強く感じる。今後は、学内の他分野の教員に対しても参加を促していく必要もあるだろう。地域との交流は、幅広く、奥深く、そして、多くの可能性があると感じている。

(文責・杉本光司(地域交流研究センター長))

II. 各部門の活動

II-1. フィールド・ミュージアム部門

はじめに

地域交流研究センターにフィールド・ミュージアム部門（以下、部門と記す）が位置づけられて8年目が経過した2010年度は、私たちにとって大きな節目の年となった。センター発足と同時に作成した部門の中期計画は9年間の見通しをもって立てたもので、これまでの取り組み全体の総括とそれらをふまえて次のステージを視野に入れる時期を迎えたことにな

る。さらには都留文科大学フィールド・ミュージアムの前史を含めた長い歴史のなかで積み重ねてきた実践と思索の成果を、本学の名誉教授である今泉吉晴氏監修の下、国立科学博物館の「大哺乳類展」最終章に展示できたことは、画期と呼ぶにふさわしいものであった。またこの展示は、私たちがフィールド・ミュージアムのもつ本来の可能性を問い直し、多くの来館者との共感の輪を拡げる貴重な契機ともなった。

2009年度に終了した、坂田有紀子氏を代表とした現代GP（環境教育GP）の取り組みにより、これまで部門として取り組んできたさまざまな実践が有機的につながり、これからの方向性や実践の意義が再確認できた。今後は、現代GPでの成果をいかに受け継ぎ発展させていくかも私たちの大きな課題となる。

当初予想しなかった新たな交流も生まれた。たとえば部門にとって初めてとなる都留市の社会教育との交流や、谷村第一小学校の授業への参加、附属小学校での自然観察プログラムへの参加などである。そのどれもが今後の部門の取り組みに新たな可能性を予感させる交流となった。

2011年3月11日の東日本大震災は部門にとって決して他人事ではない。被災された多くの方々と、関係されるみなさまに心からお悔やみとお見舞い申し上げたい。

部門の機関誌である『フィールド・ノート』の編集に1年生のときから参加していた本学の卒業生が今回の大震災で亡くなった。彼女は、都留市で農業を営む渡邊宗男さんのもとに足繁く通い、ときには農作業を手伝いながらそのライフヒストリーを毎号掲載し、成果を卒業論文としてまとめた。彼女は卒業時の記事で次のように記している。「渡邊さんの知恵や仕事のやり方は渡邊さんの生き方と直結している。生き方に直結した知恵こそがその人にとって本当に大切なもので、最後まで残っていく。私は今22歳。渡邊さんの約3分の1しか生きていない。まだ社会がどんなものかよくわからないし、どう生きていくかを思い描くことすら上手くできない。だから、戦中の少年時代でさえ明るく過ごし、何十年と家族を守ってきた渡邊さんは、私にとってもいいお手本を示してくださった。お話を伺っていて、人はどんな状況でも楽しみながら生きていけるということに気づいた。そして、将来への不安が少し消え、生きていくための知恵が渡邊さんのようにほしいと思った。」（『フィールド・ノート』59号、

2009年3月発行）。

3月11日以降、渡邊宗男さんだけでなく数多くの地域のかたがたから彼女の安否を気遣う声が部門に寄せられた。4年間の在学期間中に、彼女が表面的ではなく、いかにあたたかくかつ深い部分にまでおよぶ人間関係を築いていたかが、つぎつぎに寄せられる声からもわかる。

私たちは、自分たちの感覚を磨きながら、地域の身近な物事をつぶさに観察し、魅力を掘り起こし、何が地域で起こっているか、時には調べ直しをしつつ、互いに語り、またそれらを語り継ぐことを大切にしながら実践を展開してきた。彼女が『フィールド・ノート』に記した言葉には、これまでの実践と探求が私たちの生き方の問い直しや、自然と人間の新しい関係の創造へとつながり、それらを人間的な知恵として結実していくことが欠かせないのではないかという重要な問いかけが込められているように思う。私たちはこれからも身の丈にあった実践をていねいに展開していくほかないが、部門の取り組みや考え方をさらに確かなものとしていくためにも互いに深く探求していくことを今後も大切な姿勢として保ちつづけていきたい。

本報告では、中期計画にもとづいて2010年度の活動とそれぞれの課題を整理する。また最後に部門全体の課題をまとめた。

（1）生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

このプログラムは、キャンパス内を自然に親しむ入り口と位置づけ、教育、研究、市民との交流の場として整えようとするものである。

①キャンパスのビオトープ整備

おもに附属図書館ビオトープと地域交流研究センター入り口のビオトープの整備を学生と取り組んだ。今年度は、初めて世話をする学生のスタッ

フを募集し、社会学科教員の泉桂子氏と6名の学生と週に1度、1時間程度の作業を継続した。6月と7月には、学内の教員や職員、学生にこれらビオトープで育てているハーブを用いてお茶を楽しむイベントも開催した。

これらビオトープには、チョウや鳥などさまざまな生きものが集まり、育ちつつある。今後は授業や市民をまじえた観察会などを開催できるよう掲示板での紹介や解説版の設置などにも力を入れていきたい。

②『フィールド・キャンパスだより』の発行

キャンパス内の自然財産の記録とデータベースづくり、自然紹介を目的として地域交流研究センターが発足した2003年から発行している。現在は月1回の発行で、2010年度は107号から118号までを各250部印刷した。データベースに登録した生きものの写真の総計は延べ1396枚となった。『フィールド・ノート』の定期購読者に毎号発送し、また学内では自然科学棟、本部棟、附属図書館に置いている。

この『フィールド・キャンパスだより』は、長期継続してはじめて自然の動向が把握できる。その観点からも記録や撮影に携わるスタッフの充実が欠かせない。

③「ムササビの森」でのライブカメラ設置

現代GPにより設置されたムササビのライブカメラを2010年度も情報センターと連携して運営にあたった。2010年4月27日にインターネットで映像が閲覧できる環境を整えた。ライブカメラの映像は、学生食堂と自然科学棟に設置されたモニターで見ることができる。さらに附属図書館の入り口にも設置する予定である。モニターの下には、観察ノートが置

かれ、ムササビのその日の様子が記入できるようになっている。ノートには、さまざまな視点による記録が書き込まれ、名前をつけて様子を見守る学生や、ムササビの子どもの様子をていねいに書き綴る職員がいるなど関心が広がりつつある。

だが、梅雨の湿度の高い季節や厳しい寒さとなる冬期などはカメラのメンテナンスが欠かせない。この事業を継続するにはライブカメラの管理・維持ができる専門スタッフが必要となる。

④「キャンパスにリスを呼ぶ会」の発足

キャンパス内にクルミの木を植樹し、リスとの出会いの場を創ることを目的に活動を始めた。初年度となる2010年度は、十日市場の駅に生えていたクルミの実生を植樹した。今日、生きものの多様性や共生が大きなテーマになっているが、この活動がこれらを実践的に考えるきっかけの1つとなることを期待したい。クルミは7年から8年ほどで実をつけると言われている。時間をかけ希望を抱きながら出会いを楽しみに待ちたい。

⑤「ムリネモ」との出会いの場づくり

キャンパスにはすでにムササビが生息し、リスを呼ぶ会も発足した。フィールド・ミュージアムが取り組んできた身近な野生動物との出会いを楽しむ場所をつくる試みを始めた。自然科学棟裏の斜面でモグラの仲間であるヒミズ、また野ネズミの観察ができるよう観察装置を設置した。雨天でも2階の室内から観察できるよう工夫がしてある。今後は学生や市民、小学生を対象とした観察会も実施したい。

⑥「テントウムシの越冬を見守る会」

都留文科大学の自然科学棟には、越冬のためテントウムシが飛来する。かつては10万匹を超えるというデータもあるが（『ナチュラリスト入門 秋 落ち葉の手紙』岩波ブックレット、No152、1989年）、近年はほとんど飛来しないというほど自然科学棟での越冬の個体数は激減した。この動向を多くの大学人で観察し見守っていかうと2009年の秋にこの会がスタートした。大きな自然の変化の兆候を感じさせるこのテントウムシの今後をみなでいねいに観察していきたい。

（2）地域の知恵に学ぶ環境復活のプログラム

十日市場の中屋敷地区のフィールドでは、荒廃した果樹園の復活と稲作・麦作に取り組んでいる。本年度も地主の渡邊宗男氏の指導により学生とともに果樹の剪定や、田植え、草取り、水の見回り、刈り取り、脱穀、関係者への配布などをおこなった。実地の体験をとおして生活の知恵を学ぶとともに、サルやイノシシ、シカなど大型獣との共生のあり方を学ぶこともこのプログラムの大きなテーマである。昨年度は、このフィールドでの大型獣の生息状況を調査した。

（3）学内のほかの団体との交流プログラム

附属図書館の展示コーナーで、東桂小学校教諭の小口尚良氏が学生とともに開催している「うらやま観察会」の活動報告の展示を共同で実施した。さらに新たな交流として学内の団体である「生け花サークル」と連携して都留文科大学前駅舎に学生が生け花の作品を展示する試みを始めた。

（4）行政、企業、市民団体との連携プログラム

①都留市立図書館との共催事業

10月26日から11月9日まで、都留市立図書館閲覧室にて、谷の町・史の里企画資料展「市民の読書の記憶・記録 ～読書週間の歴史とともに～」を市立図書館との共催により開催した。戦後「読書の力によって平和な文化国家をつくろう！」と始まった読書週間運動の60年の歴史をポスターと標語、市立図書館の蔵書、記録資料とともに展示した。また市と大学創成期の市立図書館の利用統計なども展示し、図書館からみた都留文科大学とまちの関わりも探った。また11月7日に都留文化会館4階大ホールで開催された図書館まつりに初めて参加した。国際生物多様性年にちなみ、フィールド・ミュージアム部門では国立科学博物館で開催された「大哺乳類展」における展示の一部を会場内に再現した。

②富士急行株式会社との連携事業

都留文科大学前駅舎では、フィールド・ミュージアムの情報発信の拠点としての整備をつづけてきた。駅舎内に、キャンパスやその周辺の自然や人の暮らしにまつわる情報をパネルにし、学生とともに月に1度（長期休暇期間は除く）展示替えをおこなった。駅を起点とした市民対象の観察会を11月6日に、また12月4日には市民対象としたムササビ観察会を開催した。どちらともリピーターを含め多くの市民の参加を得ることができた。スタッフとして参加した学生からは、市民のかたがたと驚きや感動を共有できた、という感想が、また参加した市民からは、いつも学生との交流を楽しんでいますという感想も寄せられた。

③郷土研究会会員との「野外遊びの記憶を語る会」

毎月1回、ミュージアム都留において郷土研究会会員と地域の記憶を記録する目的で、とくに誰もが経験し近年急速に失われつつある「野外遊び」についてフィールド・ミュージアム部門が管理・運営している「奥隆行写真コレクション」を活用し聞き取りをおこなった。

④見沼フィールド・ミュージアムとの交流

大田堯先生（本学元学長）が構想されている埼玉県浦和市を中心とした見沼フィールド・ミュージアムとの交流をおこなった。10月18日に、埼玉大学の安藤聡彦先生がとりまとめておられる学習会に参加し、埼玉大学の見沼フィールド・ミュージアムに関連したフィールド・ワークの授業の報告をもとに意見交換をした（この授業については、地域交流研究センターが発行する『地域交流センター通信』18号に安藤聡彦先生による「見沼田んぼで都留自然博物館と再会する」と題した文章が、同27頁には授業の内容が参加した学生の感想とともに掲載されている）。

⑤三の側ビオトープの整備

三の側ビオトープでは、都留文科大前駅に隣接する土地に都留市環境創造室と都留市環境保全市民会議とともに、大学の附属図書館ビオトープとネットワークをつくり、自然に親しむ入り口をまちのなかに整備しようとするものである。5月15日にチョウが吸蜜に訪れるハクニチソウの種を学生とともにまき、一ヶ月ごとに草取りや水やりをおこなった。このビオトープは、駅を起点とした観察会でも活用された。

⑥公民館との交流

7月2日、青少年育成会夏期研修会に参加した。参加者は、市内在住の74名で、「ムリネモの森へようこそ」というテーマのもとフィールド・ミュージアムの取り組みを紹介した。今後の都留市の社会教育との交流をさらに発展させ深めていく第一歩となった。

⑦谷村第一小学校の授業への参加

部門が管理・運営している「奥隆行写真コレクション」を4年生の総合学習のなかで活用し、写真にまつわる取材の方法などを学ぶために『フィールド・ノート』を編集している学生と交流しようという初めての試みである。この授業のテーマは、「地域の人をとおして、都留の環境について学ぼう」というものである。子どもたちは、とくに遊びに関する写真をもとに家族のかたから昔の遊びについて取材する作業から始めた。なかには三世代にわたる自然に関わる遊びを調べた子どももいた。

⑧附属小学校の授業への参加

身近な自然に親しむような授業を学校林を活用して展開したいという相談が附属小学校より寄せられ、2010年度は学校林の下見および教職員を対象とした学習会を開催した。2011年度は小学校4年生を対象とした授業に参加する予定である。

（5）資料の整理と保存、公開のプログラム

現代GPの採択によりセンターに「オープンアーカイブス」を整備した。その一環として2008年度は『奥隆行写真コレクション』が完成した。また2009年度から取り組んでいる益子亮氏の写真コレクションについても作業を進めた。これらの管理・運営は部門が担っているが、これからも写真資料だけでなく、理科教員への

標本の貸し出しや活用のためのデータベースを整備し充実させていきたい。

(6) 学生・教員・市民の参加のプログラム

①機関誌『フィールド・ノート』の発行

年5回、各400部を発行した(65号から68号)。特集テーマは、65号が「山と人」、66号は「ものづくり手のまわりには」、67号は「材 素材を活かす」、68号は「原点 歩き、みて、きいて広がる世界」である。編集作業には学年の枠を超えた学生の参加があり、本年度は17名が編集に参加した。この編集作業は、フィールド・ミュージアム活動への参加の受け皿としても機能し、冊子編集を通して地域との小さな交流を創り出している。学生たちは編集だけでなく地域での農作業やビオトープ作業、観覧会に積極的に参加するなど、フィールド・ミュージアム活動の前面に立つて活躍する存在になっている。

(7) カリキュラムとの連携

「地域交流研究Ⅳ」を本年度も開講した。『フィールド・ノート』での編集の経験を授業で生かし、インタビューをじっさいにおこない記事を編集、冊子としてまとめた。本年度の受講者数は25名であった。授業の最後に冊子を製本して完成させ、取材先などへも配布した。人に話を伺う大切さに気づいたという学生や、都留を好きになれたという学生、もう一度故郷を見る目を養うことができたという感想が受講生から寄せられた。

(8) 国立科学博物館における「大哺乳類展」への参加

2010年3月13日～6月13日に国立科学博物館で開催された「大哺乳類展」は最終的な来場者数約33万人と盛況のなかで終えることができた。この「大哺乳類展」

は今泉吉晴氏の監修によるもので、これまでの都留フィールド・ミュージアムの実践の蓄積と今泉氏によるシートンの再発見とを柱に成り立っている。また部門だけでなく、センターの教職員、さらには全学をあげた協力による取り組みは、フィールド・ミュージアムの共感の輪を全国に拡げるだけでなく、学生によるギャラリートークなど本学の学生教育の場としても計り知れない効果があった。作成されたパネルや蒐集した展示資料などは、本学で大切に保管し、授業や出前講座などで活用されている。この「大哺乳類展」の資料を用いて10月29日、山梨県立北杜高校で出前講座を開催した。なお、「大哺乳類展」の経過や様子については、『地域交流センター通信』の16号、17号、18号に報告がある。

最後に

本年度は、昨年同様の取り組みを想定していたが、当初予想しなかった事業や連携の依頼も増えてきた。こうした依頼は、センターやフィールド・ミュージアムへの期待のあらわれともいえる。

すべての依頼に対応はできないため、現在の組織でできる事業を絞っていく必要がある。ただし少なくともセンターや部門にとって重要な意味をもつ事業についていねいに対応するには専門のスタッフの充実が欠かせない。さらにたとえば「オープンアーカイブス」のように理科教材の使い方に精通した市内の教員などの協力も重要である。専門スタッフの雇用のほかにも学内の施設で共同研究ができる「研究協力員」のような制度も検討していく必要があるだろう。

センターには、本年度から志村夏樹氏が事務職員として採用された。たんに電話対応だけでなく観覧会や各種講座の受け付け、ムササビライブカメラのメンテナンス、ホームページの運営・管理など幅広い場面で活躍していただいた。セン

ター全体にとって大きな役割を果たしていただいた。

本年度の取り組みにもあった国立科学博物館での「大哺乳類展」は本学にとっても大きな成果を得た。また外部からのセンターに寄せる期待は大きくまた高い評価もいただいている。しかし、わずかな資料を保存・管理できる場所も湿度や温度の管理ができず、また手狭となっている。多くの来訪者を受け入れるスペースさえもない。センターの拠点となっているコミュニケーションホールは、その位置ばかりか存在さえも学生や市民には十分に認知されていないという状態が続いている。ほんらいアートシアターは学生が成果の発表の場として活用する空間であるが、コミュニケーションホールの構造上の問題もあり、とくに音響の問題は事業展開のうえで大きな支障となっている（たとえばセンター通信の編集作業、夜間来訪者との打ち合わせ、『フィールド・ノート』編集作業など）。

2011年度はセンター発足時に提案した9年間の中期計画の完成年度となる。これまでの到達を確認しながら次の中期計画の内容を部門で検討していきたい。2011

年度のおもな事業内容は次の通りである。

2011年度事業予定

2010年度とほぼ同じ事業内容を予定している。なお、次の①から⑧の項目は、2011年度重点的に取り組む予定の事業である。

- ① カワラナデシコ、カジカの保全事業
- ② 「キャンパスにリスを呼ぶ会」の活動
- ③ 附属小学校との連携事業（総合学習への参加）
- ④ 大田先生のドキュメンタリー映画の上映に関わる事業
- ⑤ 『フィールド・ノート』 年4回発行予定
- ⑥ 市民対象の観察会（学生スタッフの養成）
- ⑦ センター、そしてフィールド・ミュージアムの学内への認知度を高める取り組み
- ⑧ 第二ステージとなる中期計画の立案

（文責・北垣憲仁）

Ⅱ-2. 発達援助部門

Ⅱ-2-1. 学生アシスタント・ティーチャー（SAT）配置事業

1. 取り組みの概要

この取り組みの概要は以下に示すとおりである。

都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティーチャー（SAT）を派遣し、放課後の学習支援と、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を学生に体験させることによって、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展を図る。

また、この事業を通して大学と小中学

校との協力・連携を強めるとともに、現職教員に対しての研究的支援・学習機会の提供を行う。これには大学と学校現場とが共同し、地域をベースにした実践・研究を発展させるためのケース・カンファレンスをはじめとする研究協議会の開催も含まれている。

これらの運営にあたっては運営協議会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行うこととしており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育モデルの開発として位置づける。

平成22年度SAT派遣学生実績（学校別）

H. 23. 3. 31

	学生数（延人数）							活動数（延回数）						
	前期		後期		合 計			前期		後期		合 計		
	A	B	A	B	A	B	C	A	B	A	B	A	B	C
谷村第一小学校	21	14	17	13	38	27	3	147	102	111	106	258	208	60
谷村第二小学校	5	15	4	14	9	29		47	140	49	155	96	295	
文大附属小学校		4		4		8	2		34		27		61	30
東 桂 小 学 校	7	12	6	11	13	23	3	53	90	49	115	102	205	104
宝 小 学 校		4		4		8	4		35		61		96	66
禾生第一小学校	3	12	2	12	5	24	5	24	85	18	113	42	198	90
禾生第二小学校	9	7	4	2	13	9		88	45	32	11	120	56	
旭 小 学 校	8		7		15			66		55		121		
都留第一中学校	6	3	7	2	13	5	4	29	22	74	25	103	47	75
都留第二中学校	1		3		4		8	3		12		15		103
東 桂 中 学 校	7	9	7	6	14	15	6	54	62	106	51	214	113	80
小 計	67	80	57	68	124	148	35	511	615	560	664	1070	1279	608
合 計	147		125		307 (201)			1126		1224		2958		

2. 活動の内容

(1) SAT-A・Bタイプの活動の内容

どの学校もSATの活動を高く評価しており、また学生の熱心さに助けられたことが共通に総括されている。以下にいくつかの学校の総括を紹介しておく。

①【禾生第一小学校】

〈全 体〉

- ・SATの活動は、児童にとっても指導する学生にとっても充実した時間になっていた。
- ・どの学生も意欲的に参加し、将来への良い経験となっているようである。
- ・SATの様々な活動や学生と児童との交流を通じて、普段の生活では見られない児童の姿を知ることができた。
- ・SATの活動を通して学生が入ることで、児童や職員によい刺激となり、学校の活性化につながっている。
- ・Bタイプの運営面や方法が改善され、学級支援というかたちで成果があらわれている。

〈Aタイプ〉

- ・本校の活動内容は『学習活動』と『ふれあい活動』の二本立てで進めて

いる。前半に『学習活動』を位置づけ、担任からの宿題や学生が用意した課題をして学力の補充を行っている。後半は『ふれあい活動』に移り、ゲームや運動的なもの、工作的なものと、さまざまな活動を行っている。このめりはりのある内容が児童の意欲や学生の指導工夫をさらに向上させる要因ともなっている。

- ・『学習活動』については、ていねいにわかりやすく教えてくれることから、児童はもちろん、保護者からも好評を得ている。
- ・『ふれあい活動』の内容が豊富で、学生の個性を生かした活動になっていた。
- ・学生は自分たちで考え、工夫し、協力して行動していた。活動をまかせた分、やりがいを感じるとともに責任ある行動ができていたようだ。

〈Bタイプ〉

- ・前後期共に12人の学生が参加し、すべての学級に所属して積極的に学級支援をしたり、児童との触れ合いを深めたりして、充実した時間になっていた。
- ・参加可能な学生は、校外学習の付き添いを行ってくれたので、児童の安全

確保や活動の補助という面で大変助かった。また、普段の学校生活とはちがう児童の面が見られ、学生とのふれあいもできた。

- ・前期・後期と2回参加してくれた学生が8名いたので、児童とのつながりも深まり、充実した指導ができた。
- ・学習以外でも積極的に児童に関わっていただき、児童理解を深める結果となった。

〈Cタイプ〉

- ・ABタイプに比べて通年の指導であり、クラス所属の時間が長いので、児童とのつながりも強くなった。
- ・参加回数が多く、対象児童のみではなく、クラス全体とも関わってくれていたため、本校の職員に近い存在となっている。
- ・個別に支援を要する児童への対応は、専門性を生かした指導がなされたので有意義であった。

②【谷村第二小学校】

〈Aタイプ〉

- ・前期5名、後期4名の学生の支援を受けて実施した。学生の教育実習等の都合で計画変更等もあったが、3年生以上の学年で予定通り実施できた。
- ・自主的に教材やプリントを準備するなど、熱心に取り組む姿が見られた。子どもたちの多くは『学習に楽しく望むことができた』という感想を持つことができた。また、保護者のほとんどが学生に対する感謝と事業の有益性を挙げている。
- ・学生の中には、Aタイプだけでは子どもへの関わりが不十分ということで、自発的Bタイプへも参加して取り組んでくれた者もあった。

〈Bタイプ〉

- ・前期15名、後期14名の学生の支援を受けて実施した。前・後期とも、1年から6年まで全学年に配置した中で、

多くの学生が前期・後期とも同じ学年を担当して実施することができた。その為、学生と児童、教師ともスムーズな関係で実施することができた。学生の児童に対する指導も担任との連携のもとに円滑に行うことができた。

- ・各担任からは、授業支援ばかりでなく、清掃指導や給食準備、さらに休み時間中の子どもとの関わりに至るまで、学生が生き生きと活動していたことは勿論、時として、児童の問題行動に対して、強く指導・助言を行い、それを素直な態度・姿勢で受け入れる子どもたちの姿が見え、好感を持つことができたと報告されている。
- ・今後もさらに、学校として協力を惜しまないことをお伝えするとともに、本事業の活動の推進が図られ、市内小中学校のきめ細かな指導の充実と大学における教師教育の発展に寄与する事業にならんことを期待します。

③【附属小学校】

〈Bタイプ〉

- ・毎週水曜日の2・4校時を基本に、前期後期共に3年生以上の学年にそれぞれ1名ずつ支援に入った。遅れの目立つ児童や学習に集中できない児童を中心に、学習や生活の個別指導を行った。
- ・7名の学生（1名は通年）とも大変意欲的で、担任と相談をしながら生き生きと取り組んだ。業間にも児童と積極的に関わり、児童理解に努めた。無断欠席や遅刻等全くなく、活動の態度は最後まで一生懸命で真摯であった。
- ・活動終了後、その日の活動についての情報交換に努めた。学習指導に関することと生徒指導に関することが多かったが、本校に来たSATの学生は皆熱心で学習指導、児童理解等自主的に学習を積んでいた。

- ・学校行事や校外学習にも参加し、特別活動の企画・運営や校外学習に於ける児童の安全管理及び指導の方法についても学んだ。

〈Cタイプ〉

- ・3年生の特別支援学級に在籍する児童に1名。4年生の個別支援が必要な児童に1名支援に入った。2名とも通年にわたり児童の支援に意欲的に関わった。3年生の児童は、集中力が継続しにくく、学習内容の理解に時間がかかるが、根気よく指導した。また4年生には個別支援が必要な児童が2名いるが、児童の立場に立ち最後まであきらめずに支援していた。2名とも学校行事にも積極的に参加した。個別支援をした児童とSATの学生との間には良好な信頼関係が築かれ、児童はSATのある日を楽しみにしていた。

【附属小学校で活動した学生の感想】

- ・毎週水曜日が楽しみになるほど楽しいクラスでした。3年生のみんなと出会えて本当によかったと思っています。いつも明るく笑顔で迎えてくれて、また一緒に思い切り遊んで子ども達の成長を見るのも楽しかったです。4月から相模原で教員をしますが、それに向けての勇気を子ども達からも、先生からもいただきました。みんなの笑顔を思い出しながら、頑張っていきたいと思えます。ありがとうございました。
- ・短い期間でしたが、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。実際に授業を見せていただきよい経験になりました。
- ・今まで小規模な学校は行ったことがなかったので、とてもよい経験ができた。この学校の子供達に教わったことを、先生になった時に生かせるようにこれからも頑張りたいです。短い期間でしたが、本当にありがとうございました。
- ・子どもから、この2ヶ月間、本当に様々

なことを学ばせてもらい、明るい笑顔から多くの力をもらいました。自分にとってこの短い期間はかけがえのない時間でした。何も分からない自分にとって、担任の先生から教えていただいたことは、これから教師をめざす中で、とても大切にしていきたいことばかりでした。

3. 課題

以上のようにおおむね昨年度も良好な活動が展開でき、確実に定着しているが、他方でいくつかの課題も明らかになっている。

- ①SAT-BタイプはTT的な活動を主に行うものだが、事前の打ち合わせが十分でなく、教師の指導計画も知らないまま活動に参加せざるを得ない場面が散見されたこと。
- ②各学校の必要なSATの人数と学生の希望が大きく異なり、学校によっては十分な活動が展開できないところもあった。とくに中学校での活動が十分ではなく、国文、英文、社会学科の学生をどのように参加させるかが課題となっている。
- ③「学校参加」の授業とSATの活動は一体的に取り組まれてはじめて意味を持ってくるが、すでに単位取得をしまっている学生にとって、「学校参加」の授業への参加を促す方法を新たに検討する必要がある。
- ④教職実践演習への準備と同時に現在の「学校参加」のあり方についての検討。

具体的には、「学校参加」の授業への教員が参加することを通じて、SATの活動内容を理解しておくこと。可能であれば、小中学校との「共同研究」の足場をこの機会を通じて、広げていくこと。

(文責・佐藤隆)

II-2-2. 地域教育相談室

(1) はじめに

地域教育相談室の活動は本年度で8年目を迎えた。本年度も引き続き、以下の①～⑤の活動を行った。なお、活動の概要については(2)(3)(4)に記述した。

- ①来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ②教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③校内研究等への講師派遣及びサポート
- ④公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

(2) 相談、研修依頼件数と種別

平成22年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。①の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。②は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計した。①～④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた。

①については減少傾向で、最近では担

当者の携帯に直接連絡・相談があるケースが増えている。固定電話での連絡・相談の時間帯は相談室にスタッフが在室している時間帯が基本となるので、それ以外の場合は携帯に直接になっているのではないかと考える。また、電話で相談する内容は限られているという理由も考えられる。

②については県外への対応が多いが、④の訪問先が県外が多いことと関連していると思われる。内容的には事務的対応が主であるが、研修会講師を前年度から継続して依頼する担当者が研修会の企画や運営に関してアドバイスを求めてくるケースが増えている。また、それがきっかけで自身の学級経営や学年経営の相談に発展したケースが県外の7件である。

③については、スタッフが在室時に訪問して相談することは難しいと思われ、県外の2ケースはOBからの支援要請で中間地点にお互いが出向いて相談に乗るという形で行われた。

④については、県内、県外ともに昨年度より増加傾向である。講師派遣先については、その内容ごとに(5)に整理した。単発ではなく前年度に引き続いた依頼、1年に複数回の依頼が増加している。

①電話&FAXによる相談活動の概要（担当者が携帯電話で行った対応は除く）

相談内容	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
児童生徒の問題行動についての対応	0	1	1	2
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	2	6	16	24
その他の事務的対応	7	12	67	86
合 計	9	19	84	112

②メールによる相談活動及び事務処理の概要（応答を1回とカウント）

相談内容	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
研修会の進め方・事務処理	5	36	299	342
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	0	0	7	7
合 計	5	38	306	349

③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
研修会及び会議の進め方など	1	0	0	1
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	0	1	2	3
合 計	1	1	2	4

④訪問による相談活動

相談内容	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	1	3	20	24
Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション	0	8	52	60
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	1	3	23	27
その他	5	0	13	18
合 計	7	14	108	129

⑤形態別による相談活動の概要

形 態	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
電話 & FAX	9	19	84	112
メ ー ル	5	38	308	351
来 室	1	1	2	4
訪 問	7	14	108	129
合 計	22	72	502	596

（３）教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室の公開教育講座を今年度は「教師力スキルアップ講座」としてシリーズ化し、昨年度のアンケートのニーズに従い以下の５講座のうち４講座を土曜日に開催した。５講座の延べ参加者数は83名で、内訳は都留文科大学学生30名、大学周辺地域からの参加者29名、その他の山梨県

内からの参加者15名、山梨県外からの参加者9名であった。学生以外の参加者は、講座の内容との関係から学校の教員が多く、小学校教員が大多数を占めていた。中学校教員からは土曜日は部活の指導が入ることが多く、平日の夜は生徒指導が急に入り、ニーズはあっても参加が難しいという声が聞かれた。

今回は参加者に希望を取り、講座の情

報をダイレクトメールで伝えた。その結果、継続して参加する人が増え、活発な参加者同士の交流が見られた。また、感想から教師同士だけでなく、現職教員と学生の交流、OB同士の再会の場にもなっていたことが伺えた。各講座の概要については以下の通りである。

1) 第1回公開講座

①日時と内容：2010年5月22日（土）

13:00～16:30

「人間関係づくりに活用するエンカウンター講座①～教師と子ども、子ども同士の絆を育てる」

講師：品田笑子

（都留文科大学地域交流研究センター特任教授）

武蔵由佳

（都留文科大学非常勤講師）

箭本佳己

（都留文科大学学生相談室

カウンセラー）

②場所：都留文科大学1号館

1301教室

参加者：17名

③概要：人間関係作りに効果的な方法とされている「構成的グループエンカウンター」の理論についての講義の後、エクササイズを体験しながらその展開の仕方や留意点について学んだ。体験した主なエクササイズは、「ひたすらジャンケン」「手探り握手」「ミラクルビンゴ」「ペア紹介」「私はだれでしょう」「クラスメートビンゴ」「お絵かきしりとり」「私のジャガイモ」「☆いくつ」である。参加人数は少なかったが、少人数の場合しか実習ができないエクササイズをじっくり実施することができた。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・エンカウンターやグループワークが苦手な私ですが、その名のとおりスキルアップのために思い切って参加してみました。少人数で心温まる交流の中、楽しい時間を過ごすことができました。途中、お絵かきしりとりでメンバーの伝えたいことを理解できなかったのが心残りです。実際にクラスでもあること、どのような対応をすればよいか考えさせられました。傾聴のためのエクササイズ、クラスや一人一人のコミュニケーションを高めるエクササイズについて学びたいです。（中学校教員）
- ・エンカウンターの理論の説明、発達段階や学級の実態に合わせたエクササイズのアレンジの仕方が勉強になりました。リーダーのインストラクションから、なぜそうするのが分かってためになりました。「私のジャガイモ」「お絵かきしりとり」はとても楽しかったです。（文大OB：小学校教員）
- ・名前は知っていても、エンカウンターの理論や体験は初めてでした。実際に自分が体験することで、生徒の気持ちを体験することができ、大変よい経験となりました。（中学校教員）
- ・書籍は読んでいても、“構成”と言う意味やゲームとの違いが自分の中で分からないところがあり参加しました。講義と体験を通して、短い時間でしたが、分かったような気がします。また、学生さんや色々な立場の人の中で活動したことで、より今日のエンカウンターが生きていたように思います。
- ・学級の状態が良くないときに有効なものをやってみたいです。（小学校教員）
- ・普段の授業では経験することができないことを体験することができて、とても充実した時間を過ごすことができました。生徒の目線で時間を過ごすことができたので、教員になった時にこの経験を活かしたいです。（都留文科大学学生）
- ・授業でやったエクササイズでも、人数や相手によって全く違うもののような印象を受けました。実際に教育の場で働いていらっしゃる方々も素の自分、教師としてではなく一人の人間として自己開示をすることに抵抗があると知り、驚きながらも歩み寄れたようなうれしい気持ちになりました。（都留文科大学学生）

2) 第2回公開講座

①日時と内容：2010年10月16日（土）

13:00～16:00

「教育現場で活用するカウンセリング
の基本スキル講座」

講 師：品田笑子

（都留文科大学地域交流研究
センター特任教授）

箭本佳己

（都留文科大学学生相談室

カウンセラー）

②場 所：都留文科大学1号館

1301教室

参加者：19名

③概 要：学校現場で子どもたちや保
護者に対応するときに活用し
たい基本技法である「受容」
「繰り返し」「支持」「質問」
「明確化」をロールプレイを通
してトレーニングした。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・分かりやすく、役に立つ研修でした。教師は話すことが多いのですが、体験を通して聴くことがいかに大切か実感しました。現場で活用したいと思います。ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンター講座の第2弾やソーシャルスキルトレーニング講座を希望します。（小学校教員）
- ・久しぶりに母校で学ばせていただきました。実技の時間がたくさんあったので実りある時間が過ごせました。グループになって行うことで、他の人の良い面を発見できたり、自分の改善点を言ってもらえたりして良かったです。
- ・クレーム対応や職員の人間関係づくりについて学びたいです。（文大OB：小学校教員）
- ・初めての受講でしたが大変勉強になりました。明日からすぐに使える内容でした。受容はできてその後どうやって質問するのか疑問でしたが、やってみて少し見えてきました。話を聞くだけでなく実習形式だったのが良かったです。クレーム対応についても是非取り上げて下さい。（都留文科大学学生）
- ・話の聴き方やカウンセリングマインドは勉強してはきましたが、いざ実践となると意識せねば使えないことを痛感しました。また、聞き方や質問の仕方如何によってカウンセリングの成功失敗が左右されることも気づきました。（小学校教員）
- ・すごく参考になりました。教育実習中に悩み相談をされたとき、どういう対応が良いのか、いつも少し詰まってしまうしていました。しばらく生徒と接する機会はありませんが、友人と接して試しながら勉強して行きたいです。
- ・クレーム対応ともう一度カウンセリングをやってみたいです。（都留文科大学学生）
- ・傾聴技法について、ワークの中で具体的に体験することができました。とても内容の濃い講座だったと思います。
- ・問題の核心に迫る質問や本人自身に気づかせるようなカウンセリングができるかどうかは自信がありませんが、経験だと思うので意識してこの技法を使ってみたいです。（中学校教員）

3) 第3回公開講座

①日時と内容：2010年11月13日（土）

13:00～16:30

「人間関係づくりに活用するエンカウ
ンター講座②」

講 師：品田笑子

（都留文科大学地域交流研究
センター特任教授）

箭本佳己

（都留文科大学学生相談室

カウンセラー）

川俣理恵

（千葉県子どもと親の

サポートセンター相談員）

②場 所：都留文科大学1号館

1301教室

参加者：16名

③概 要：2回目の参加者もいたが、構成的グループエンカウンターについての概略を説明し、その後エクササイズを体験しながら、学級の人間関係づくりに活用するノウハウについて学んだ。体験した主なエクサ

サイズは、「アウチ」「秘密指令（探偵ごっこ）」「もっとお近づきに」「背中合わせの会話」「オートマチックペーパー」「アドジャン」「協同絵画・人生時計」「感じ事典」である。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・アクティビティが多くて、自分も楽しみつ、将来教師になったときに学校で使ってみたい活動に出会えました。特に「アドジャン」と「お近づきに」は楽しめました。「お近づきに」は中学校で使ってみたいです。（都留文科大学・大学院生）
- ・久しぶりのエンカウンターでしたが、やっぱり楽しいなと思いました。なかなか時間をとって自分のことを振り返る機会がないので貴重でした。クラス内で簡単にできてすぐに身につけることのできるソーシャルスキルトレーニングなどを学びたいです。（文大OB：小学校教員）
- ・エンカウンターの本を買って、学級でもそれをもとに展開していますが、やはり一度きちんと学びたいと思っていたので良い機会でした。留意点や自分がやってみて感じたこと（うれしかったり、とまどったり）は活かしていきたいです。（中学校教員）
- ・「エンカウンター」のことは、本や学校の実践で知っていました。もちろん大学時代にも学びました。今回参加して、実際に自分で体験してみることがすごく大事だと思いました。特に「人生時計」では自分自身を振り返る時間が持て、「こんなふうに考えていたんだな」と自分に気づくことができました。（文大OB・小学校教員）
- ・実際に自分が体験することで、教師として展開するときどのように取り組めばよいか知ることができました。
- ・特にシェアリングがよく分からなかったので勉強になりました。（小学校教員）
- ・新聞紙にあわせて体を動かす「オートマチックペーパー」がとても楽しかったです。ABに分けて二択問題に答えていく「もっとお近づきに」は、色々アレンジして使えそうだなと思いました。「親友レベルまで行きたい」などという目標があると、あまり熱心ではない人もやる気を出してくれるのではと感じました。今回は、親友まで行けなかったので残念でした。中高生向けのエクササイズをもっと知りたいと思います。（都留文科大学学生）

4) 第4回公開講座

①日時と内容：2011年1月22日（土）
13:00～16:00

「学級づくりに活用するソーシャルスキル教育講座②」

講 師：品田笑子

（都留文科大学地域交流
研究センター特任教授）

箭本佳己

（都留文科大学学生相談室
カウンセラー）

川俣理恵

（千葉県子どもと親の
サポートセンター相談員）

②場 所：都留文科大学1館
1301教室

参加者：18名

③概 要：学級集団育成の条件とソーシャルスキルとの関係についての講義後、学級でソーシャルスキル教育を実施するための指導法を体験を通して学んだ。体験したスキルの指導法は、仲間への思いやりの示し方、失敗したときの励まし方、自己主張の仕方、怒りの発散法、ルールを守ることの意味、である。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・学級経営の中で上手にコミュニケーションを図るためのソーシャルスキルの身に付け方を実際に体験しながら楽しく学ばせていただき、大変参考になりました。明日から学級の人間関係づくりに早速実践できそうなワークシートもたくさん紹介していただき来た甲斐がありました。（文大OB・小学校教員）
- ・高学年を担当しており、子どもを認めてあげること、子ども同士が認め合えることをいつも考えています。今日は学級で取り組むことを想定しての展開だったのでイメージもわかりやすかったです。今後はQ-Uの活用方法について学ぶ講座があったらと思います。（小学校教員）
- ・とても楽しく、講義よりも充実して臨めました。「怒りの発散法」や「怒りを静めるポイント」はプライベートでもとても役に立ちそうです。また、中学に実習に行ったとき、うまく怒れない、発散できない生徒をたくさん見たので、今回のように話し合って解決する方法はすごく使いそうで実践してみたいくなりました。（都留文科大学学生）
- ・ソーシャルスキル指導のポイント、アレンジの仕方を実際にワークシートをやりながら学べたので、すごく知識が広がりました。教科の授業に構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングをどのように取り入れるかについての研修会があったらいいと思いました。（文大OB：小学校教員）
- ・ソーシャルスキルは学習できるということを実習を通して改めて感じました。授業でもグループワークをしますが、学生だけでなく教員の方など様々な方と触れ合えて、とてもよい刺激を受けました。自分自身のスキルももっと上げたいと思いました。（都留文科大学学生）
- ・初任者研修を受講していたので、今回の研修内容で2回目の部分もありましたが、繰り返し学ぶことで確認できたことがとても自分のためになりました。また、スキルトレーニングもメンバーが変わると全く違うものになったので楽しかったです。（文大OB・小学校教員）
- ・とても楽しく学ぶことができました。納得することが多い研修会でした。私は養護教諭なのでなかなか活用することができないかもしれませんが、学級活動の時間をもらえたら是非今回実習したワークシートを使ってみたいです。また、ストレスの授業をしたいと思っているので「怒りの発散法」を使ってみたいと思いました。グループのメンバーとの交流でとても暖かい気持ちになって帰れます。（中学校教員）

5) 第5回公開講座

①日時と内容：2011年3月3日（木）

18:15～20:45

「人間関係づくりに活用するエンカウンター講座③～エンカウンターを活用する学級開き」

講師：品田笑子

（都留文科大学地域交流
研究センター特任教授）

箭本佳己

（都留文科大学学生相談室
カウンセラー）

②場 所：都留文科大学1号館

1301教室

参加者：13名

③概 要：学級開きに構成的グループ
エンカウンターを活用する理
由について説明し、その後エ

クササイズを体験しながら、
学級開きのノウハウについて
学んだ。体験した主なエクサ
サイズは、「あいこジャンケン」
「バースデーライン」「円から
円へ・合ったね」「ペアバスケット」
「ジュゲムジャンケン」
「ネームゲーム」「先生を知る
イエスノークイズ」「友達知っ
てるつもりビンゴ」「新聞紙ジ
グソーパズル」「無人島SOS」
「☆いくつ」である。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・4月から神奈川の相模原市で教員（英語）になります。「先生を知るYes,Noクイズ」は是非クラスでやってみたいと思います。また参加させていただきます。（都留文科大学学生）
- ・初めは知らない方々と一緒になってなじむことができるのか、とても不安でした。しかし、一つずつ階段を上がっていくごとに他の人のことを楽しく知ることができて良かったです。道徳や学活、朝や帰りの会等で活用できるエクササイズが知りたいです。（中学校教員）
- ・知らない方が大勢いる中で、和気藹々と楽しみながら学ぶことができました。7月の教採に向けて勉強中なのでモチベーションの維持にもつながりました。（都留文科大学学生）
- ・大変勉強になりました。普段子どもたちによく「ケンカをするな」「人が話しているときは相手の方を見て話を聞きなさい」と言います。実際にその大切さを体験させることでその言葉に説得力が出てくると感じました。（文大OB：小学校教員）
- ・新聞紙のパズルは色々バリエーションを増やせそうです。英字新聞も面白そうだなと思いました。ジャンケンを取り入れたエクササイズは、ジャンケンが久しぶりでそれだけでも楽しめました。時間が決められていることで 焦るのも人との間を埋めるのに役立っていることが実感でき、勉強になりました。（都留文科大学学生）
- ・先生の体験談、とくに失敗エピソードを聞くことができ、配慮すべきことに目が向きました。4月から神奈川で小学校教諭として勤め始めます。不安も多い中でしたので、この講座を受け本当に良かったです。実習前に体験していればと思ったので、2年生や3年生に参加して欲しいです。（都留文科大学学生）
- ・色々なエクササイズを通して、見ず知らずの人達とどのように心を通わせるきっかけづくりをするのかが分かりました。後半のエクササイズは、色々なことをグループで話し合うことで、自分では思いつかなかった新しいことに気づけたり、新しい自分に気づけたりしました。今後の学生生活や教師生活に活かして生きたいと思います。（都留文科大学学生）

（4）山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

山梨県内の教育関係機関との連携は以下の通りである。南アルプス市教育委員会生涯教育課と連携した学校サポート活動は指定校を中心に行われているが、指定校を外れた学校は山梨県教育研究所の助成プロジェクトを利用して継続したサポートを希望してくるケースが多い。また、全体研修や校内研で相談室の活動を知り、公開講座への参加につながったケースも多い。同様な傾向は富士吉田市教育委員会との連携でも見られた。

1）南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。3回目の会議では、地域教育相談室の活動について紹介した。

2）富士吉田市教育委員会

一昨年度、昨年度に引き続き、「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座と事例研究の仕方について研修を2回、ソーシャルスキルトレーニングの実技研修を1回担当した。

3）南アルプス市教育委員会

5月にQ-U基礎講座の一斉研修の講師を務め、10月～12月にかけては研究指定校5校のQ-Uの結果をもとにした授業研究の助言者を務めた。また、研究授業後は個別の相談にも対応した。

4）山梨県総合教育センター

初任者研修講座で、Q-U基礎講座とソーシャルスキル講座を担当した。

(5) 講師派遣先

※ 午前と午後で内容が異なる場合、複数対応の場合は午前の内容もしくは代表的な対応で整理した。従って、「④訪問による相談活動」の件数より少なくなっている。
派遣先を見ると、複数回の依頼や前年度

から継続しての依頼が増えている。また、高校からの依頼も増加傾向である。内容的には昨年度同様に学級経営の具体的な方法について実習を交えて学習するもの、学級診断とそれに合わせた対応策のコンサルテーションなど実際の学級経営に直接かかわる内容が増えている。今年度対応した学級数は延べ249学級であった。

1) Q - Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会

＜山梨県内＞南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育委員会（2回）、山梨県高等学校養護教諭部会、山梨県甲府東高等学校

＜山梨県外＞郡山市教育委員会、那須塩原市教育委員会（2回）、三重県いなべ市教育委員会（他に4学級コンサルテーション）、千葉県市原市教育センター、神奈川県大和市立引地台中学校、練馬区総合教育センター、金沢市教育プラザ富樫、さいたま市教育研究会教育心理・教育相談部会、練馬区立豊玉第二小学校、北九州市立教育センター、長野県総合教育センター、葛飾区立上平井中学校（3学級の分析を含む）、三重県伊勢市立進修小学校、伊勢市立大湊小学校、伊勢市立早修小学校、伊勢市立明倫小学校、伊勢市立宮山小学校、藤沢市立湘南中学校、駒沢女子学園中学・高等学校、千葉県教育庁東上総教育事務所、江戸川区立小松川小学校、豊島区立目白小学校、目黒区立第十中学校

2) Q - Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ

＜山梨県内＞ なし

＜山梨県外＞横浜市立峯小学校（年4回：12学級×2）、郡山市教育研修センター（年2回：17学級×2）、那須塩原市立厚崎中学校（3学級）、新潟県聖籠町立山倉小学校（12学級×2）、聖籠町立亀代小学校（12学級×2）、聖籠町立蓮野小学校（12学級×2）、聖籠町立聖籠中学校（9学級×2）、福岡県荊田町教育委員会（4学級）、練馬区立春日小学校（12学級）、三重県鈴鹿市立白子中学校（29学級）、千葉県教育センター（2学級）、横須賀市立公郷中学校（14学級）、世田谷区立千歳中学校、三重県いなべ市立藤原中学校

3) Q - Uの結果に基づいた授業研究の助言者

＜山梨県内＞南アルプス市立白根源小学校（2回）、南アルプス市立八田小学校、南アルプス市立八田中学校（2回）、南アルプス市立甲西中学校、南アルプス市立白根東小学校、南アルプス市立若草南中学校

＜山梨県外＞新潟県聖籠町立聖籠中学校、那須塩原市立厚崎中学校（3学級）、那須塩原市立埼玉小学校（4学級）、那須塩原市立共英小学校（2学級）、三重県いなべ市立員弁西小学校（3学級）、いなべ市立員弁東小学校（3学級）、長野県松本市立波田小学校（2学級）、三重県いなべ市立石榑小学校（他に4学級コンサルテーション）

4) 特別支援教育を推進する学級経営

＜山梨県内＞ なし

＜山梨県外＞練馬区立関町小学校、練馬区立谷原中学校

5) 構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育

＜山梨県内＞山梨県総合教育センター（1日）、山梨県立日川高等学校、山梨県中巨摩群昭和町立常永小学校、富士吉田市教育委員会

＜山梨県外＞新潟県聖籠町教育委員会、葛飾区総合教育センター（年4回）、渋谷区教育センター、上越教育大学学校教育実践センター、長岡市学校教育研究協議会特別活動研究会、目黒区めぐろ学校サポートセンター、東京都教育相談研修会、郡山市教育研修センター、那須塩原市教育委員会（年2回）、練馬区立大泉北中学校（年2回）、足立区立伊興小学校、墨田区小学校教育研究会教育相談部、足立区小学校教育研究会教育相談部、足立区立西新井小学校、福井市教育委員会、東京都立南多摩中等教育学校、足立区立綾瀬小学校

6) その他

都立荻窪高等学校（学校適応プログラム検討）、三重県教育委員会（生徒指導リーダー研修：年2回）、義務教育振興都留市民集会、三重県伊勢市教育委員会生徒指導担当者研修、三重県いなべ市教育委員会Q・U担当者研修

（4）活動のまとめと今後の課題

相談室開設8年目を迎え、その存在や役割が広く認知されてきていると思われる。その理由は継続的な支援要請が増加し、教育委員会主催の全体研修参加者やその知り合いからの支援要請が増えているからである。また、活動の中心はスタッフが出向いてニーズに応える形態が中心であり、このことからたとえ相談があっても来室する余裕がない教育現場の忙しさが伺える。訪問先で研修会終了後に相談を受けるケースも多い。したがって、相談室に待機しているだけでなく積極的に出て行くことが重要と考える。OBからの依頼、サポート要請も徐々になっている。今後は、それらに対応する方法、専門スタッフについて検討が必要である。

課題としては、地元との連携があげら

れる。公開講座参加者も文大生を除くと少数派である。南都留教育相談ネットワークでの活動に加え、都留市教育研修センターと連携して充実させていきたいと考える。公開講座については地域のニーズを分析し、関心の高い内容を企画するとともに、その情報が確実に伝わる方法を検討していく必要があると感じている。

＜H23年度の活動計画＞

1. 研修会の企画・運営

- ・公開講座を年2回程度実施

2. 講演・実技研修会などによる学校教育サポート

- ・山梨県総合教育センター、南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育委員会主催の研修会への講師派遣
- ・校内研修会への講師派遣

3. 地域の活動への協力

- ・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
- ・都留市教育研修センターとの連携による教師サポート
- ・「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」への協力

4. 相談活動

- ・教師の学級経営のコンサルテーション及びスーパーバイズ
- ・教師・教育関係者個人の臨床的

問題への対応

- ・卒業生の学級経営サポート

5. その他

- ・横浜市スクールスーパーバイザー
- ・那須塩原市教育委員会との連携
- ・三重県教育委員会との連携
- ・郡山市教育委員会との連携

(文責：品田 笑子)

II-2-3. 地域情報教育

1. 活動指針

2007年度（平成19年度）から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中に、新しい分野として「地域情報教育」に対する取組みが取り込まれたことにより、私たちの活動において大きな礎を築くことができた。

この取組みは、本学情報センターの開設以来、地域の小中学校への情報教育支援を目標に、平成10年にインターネット接続のアクセスポイントとして開放したことを機に今日に至っている。

私たちが目指す「地域情報教育」における活動の指針として、次の三つを掲げる。これらの活動に対しては、情報センタースタッフ、「情報メディア演習Ⅰ」・「情報メディア演習Ⅱ」の受講生との協同事業として取り組んでいる。

(1) 小中学校への情報リテラシー・ネットワーク・セキュリティ教育支援

- ・都留市情報教育研究委員会（教育委員会、全小中学校情報教育担当者）への参加
- ・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
- ・それぞれの学校の情報教育への支援

(2) 遠隔授業の実施と支援

- ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施
- ・小中学校間の交流プログラムの支援
- ・e-learningへの取組み

(3) ホームページ作成と運用における支援

- ・小中学校の公式ホームページの作成支援
- ・定期的な更新に関わる運用支援
- ・小中学校ホームページ作成担当者への研修支援

2. 平成22年度の活動

☆平成22年5月18日（火）

「情報メディア演習」受講生が作成した宝小学校の新ホームページの公開 昨年度までのコンテンツを全て移行した。

☆平成22年8月

小中学校における情報環境の現状調査を計画。

Ploneを利用した市内10校のホームページを公開したことにより、日常的な更新作業を進めるために、小中学校の教員に対して、現状、要望等についてのアンケート調査を実施することを計画しました。

しかし、まず初めに、現在の都留市内小中学校における情報関係業務環境における大きな不満が寄せられたことにより、想定していなかった問題に対する対応から始めることになってしまい、アンケートの実施に向けての検討が滞ってしまいました。その大きな問題は、現在、都留市においては、教員2人に対して1台のパソコンが業務用として貸与されている状況で、山梨県内の他の市町村においては、既に1人1台パソコンということで、これまでも長い期間、教育委員会に対して要求してきましたが、未だ実現していない状況であり、市外から人事異動で転入してきた多くの教員からも、多くの不満が寄せられてしまうのが現状とのことでした。

また、小中学校のホームページの更新作業においても、多くの教員が関わる方が良いとは分かっているが、教員がインターネットと接続して自由に使えるパソコンは、職員室内には1・2台程度であり、情報を更新する時は、順番待ちとなってしまうことも多く、最終的には適切な更新する機を逃してしまうことも度々起きているのが実情のようです。



☆新たな協同事業の計画の策定

上記のような状況を理解した上で、新たな取り組みを遂行していくことを計画しました。その中で、新たな目標も掲げられることになりました。それは、教育における少子化対策への対策の1つと

して、『表現活動における作品のデータベース化』ということです。「表現活動」とは、児童・生徒が与えられた手法（音楽、美術、詩、俳句等の創作活動）を用いてそれぞれの心象を表現することであるが、子どもたちは、クラスメートや同級生といった身近な存在の作品を見て、聞いて、感じた、その感情を自分たちの作品に生かすことにより、自然に表現力の向上につながっていたのが常であったと考えます。しかし、最近の少子化の現状においては、子どもたちが接することのできる作品そのものの数が、大きく減少しています。最近では、大学生においても、表現力・コミュニケーション力の不足が指摘されていますが、従来は、個々の日常生活の中において育まれてきたはずの、自分の考え、感情を他に伝える資質、すなわち自己表現力の低下の原因の1つが、こうした面においても指摘されるのではないだろうかとの考えから、新たな目標として、『表現活動における作品のデータベース化』についても研究することになりました。

☆平成22年12月16日 都留第2中学校区における新規事業への協力依頼

「やまなし心づくり研究指定校事業」として指定されたことにより、新たに、この事業専用のホームページを作成すること、また同時に、フォームを利用した公開研究会への申し込みシステムの作成に対しても協力の依頼がありました。

これに対し、詳細が決まり次第、情報センター運営委員会での協議を行うことを伝えました。

3. 平成23年度における活動予定

- ① 都留第2中学校区 やまなし心づくり研究指定校事業への支援
- ② 小中学校用教材データベースの作成研究
- ③ 遠隔授業・交流プログラムの実施

- ④ 小中学校教員の情報教育研修会の実施
- ⑤ 学生による小中学校の公式ホームページの作成と運用に対する支援
(文責：杉本光司)

II-3. 暮らしと仕事部門

暮らしと仕事部門では、地域社会における人々の生活と生業を通じて、これからの地域社会を展望するための示唆を見出す学習を軸に活動しています。2010年度は、第一に、従来から行ってきた地域に学ぶ「農のある暮らし」学習会開催、第二に、農に関心を寄せる学生たちのネットワーク組織「農ネット」結成および取り組みの支援、第三に、昨年度から取り組んでいる「世界と地域を結ぶ学習」の三つの柱にそって活動を進めてきました。

2010年度活動報告

1. 地域に学ぶ「農のある暮らし」

近年、農に対する学生たちの関心が高まっています。こうした傾向を受け、身近な地域で、個性的な農業を実践する方々から、その「哲学」と「技」を学ぶ学習会を開催しました。これまでは、個々の学生団体（サークル、自主的な学習組織）が、それぞれ地域の方にレクチャーをお願いするなどしてきましたが、学生団体間で関心を共有できる部分も少なくないため、年2回～3回、共同学習の企画・運営を、地域交流研究センターと学生団体との共催によって行っています。本年度は、下記、二回にわたって実施しました。

- (1) 第一回目 2010年5月30日 都留市 大原佐藤ファーム（代表者 佐藤秀次さん）の見学と現地レクチャー

農業法人として、本格的にハウス農業を展開する佐藤ファームさんをお訪ねしました。参加者は学生と教員で計23名。研修の内容については『地域交流センター通信』18号（32ページ）に掲載してあります。

- (2) 第二回目 2010年7月11日 鳴沢村 オルタ農園（園主 萱場和雄さん）見学と現地レクチャー
無農薬・無化学肥料による農法で、多品種少量生産の野菜作りを行うオルタ農園さんをお訪ねしました。参加者は学生と教員で計6名。佐藤ファームさんとは対照的な農法、経営方法で、学生たちにとっては、一言で地域農業と称しても、その農業経営のあり方は実に多様であることを知る機会となりました。研修の内容については『地域交流センター通信』19号（33ページ）に掲載してあります。

2. 「農のある暮らし」をめぐる学生団体のネットワーク「農ネット」の支援

上記の共同学習会の開催を経て、これまで横の連携が少なかった学生団体相互の交流の必要性が、参加した学生の側から発案され、学生が主体となって2011年2月、「農ネット」が結成されました。「農ネット」の運営や役割は、現在、学生たちによって模索の途上にありますが、下記の動きがみられます。なお、「農ネット」

結成の経過、結成イベントの内容については『地域交流センター通信』19号12～16ページに掲載してあります。

- (1) 合同学習会開催にあたっての企画・運営:1の「地域に学ぶ農のある暮らし」に関連する学習会について、これまでは教員主導で進めてきましたが、今回からは学生の企画アイデアを尊重する形としています。
- (2) 地域からのニーズの受け止めと、その対応方法についての集团的検討を行います。学生たちが地域に出て、農に親しむ姿が定着してきたこともあって、近年では、地域の方々から「耕作放棄となっている田畑があるので使ってほしい」といった声が寄せられるようになっています。そうした情報の共有と、対応の検討が、ネットを通じて行われるようになっています。
- (3) 朝市についての話し合い・企画を行います。学生たちが育てた農産物を、地域でどのように活用してもらえるか、「朝市」開催にむけた企画会議が開催されています。

3. 世界と地域を結ぶ学習：地域社会の開発問題や紛争について学ぶ

世界社会の動向と、私たちの暮らしとのつながりを学ぶため、年一回、開発問題の講義を担当いただいている佐伯奈津子先生に企画をいただき、講演会を開催しています。2010年度は、「ビルマ（ミャンマー）の紛争と資源開発」について、ビルマ情報ネットワーク代表秋元由紀子さんに講演をいただきました。講演内容については、『地域交流センター通信』18号（34ページ）に掲載してあります。

2011年度計画

2011年度も、基本的には、前年度の三つの柱を踏襲しつつ、できれば、そこにもう1つ、地場産業研究も加え、地域との関係を深めていくことにしたいと考えています。

まず、第一に、「農のある暮らし」に関わる学習会の企画・開催（農ネットとの共催）ですが、全部で、三回予定しているうち、すでに第一回目、「大豆栽培を通じて、地域・社会に関わる ― 固有種の大豆栽培ネットワークの取り組みとその社会的意味 ―」は4月に実施済みとなっています。なお、地域交流研究センターの事業としてではありませんが、他の授業において、農村における社会的起業インターンシップに取り組むNPO法人の活動に参加をしつつ、身延町等、都留からさらに枠を広げた地域農業への、学生たちの関心も醸成の途上にあります。第二の、農ネットについても、各団体の悩みや合同事業についての話し合いが定期的に持たれている中、今年度は「朝市」の開催を具体化しようという機運が高まっています。第三の世界と地域を結ぶ学習についても、現在、佐伯先生と相談の最中です。第四の、地場産業およびそれを支える中小事業者の取り組みについては、畜産、農業加工、繊維産業等が対象として挙げられています。

（文責：田中夏子）

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ-1. 第7回地域交流研究フォーラムの開催

2010年度 第7回

地域交流研究フォーラムの報告

『ボランティア』の力が地域を変える」

平成23年1月30日（日）に第7回地域交流研究フォーラム『ボランティア』の力が地域を変える」が、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会の共催で開催された。以下にその概要を報告する。

平成20年6月に、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いによって生まれた『都留文科大学ボランティアひろば』も、精力的な活動を続けており、平成22年10月からは、これまで培ってきた活動を軸に、新たなプロジェクト、『いこいのひろば』を毎月第3日曜日に開催している。

この活動は、18歳以上の知的障がいのある人たちと一緒に、クラブ活動や多彩なプログラムを通して、楽しく一日を過ごし、『障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちが楽しく充実して過ごせる地域づくり』を目的にしている。運営に関しては、学生だけでなく、一般ボランティアと一緒にスタッフとして参加し、事業企画書を作成することにより、組織として運営するプロジェクトである。

このような活動を続けている中において、市民の方たちからのボランティア要請も多数寄せられるようになり、徐々にではあるが、『ボランティアひろば・いこいのひろば』の活動も広がり始めている。そこで、更に地域に根差したボランティア活動を目指し、学生だけでなく、市民とともに、今、改めて『ボランティア』について、その意義、現状、将来について考える1つの場として、このフォーラムを開催した。

今回のフォーラムは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との共同主催ということで、新たなスタートを切



る機会ともなった。基調講演では、地域福祉分野での我が国における第一人者である、大橋謙策先生に『ボランティアが地域を変える』と題して、福祉社会における歴史と現状、ボランティア活動について、そして地域の再生・活性化へ向けての分かりやすいお話をいただいた。

大橋先生の講演を聴くために、県内各地から社会福祉関係者が都留に集い、その経験を裏付けとした情熱的なお話には多くの方々が感銘を受けたようであった。一例として、参加者の感想を紹介する。

- ・国家に何をしてもらいたいだけでなく、われわれは何をしてあげられるか、この考え方、改めて自覚しました。「博愛」についても、自分の身の回りから子どもに孫に、近隣の人たちに少しずつでも及ぼしていけたらと思います。展示もすばらしく、歌も間にはさみ、全体的にとっても飽きさせず良いフォーラムでした。ありがとうございました。

(南アルプス市70代)

- ・大橋先生はともかく、学生さん（大学）と社協の話し合いによって生まれた「文大ボランティアひろば」からこうしたフォーラムは大変うれしいことです。学生（若者）の活動を支援したいです。

（都留市60代）

- ・ボランティアは継続が大切、月1回、年1回でも30人いれば1カ月、365人いれば年間活動ができるとのお話し、今まで気がつきませんでした。暇が無いからということは理由にならない。やる気だと思いました。誰でも何かができるのではと思いました。

（都留市70代）

- ・ボランティアに携わって2年が経過しましたが、本当にまだ微力ですが、応援しながら自身の勉強もしていきたいと思っています。本日の講演をとってもゆったりとした気分で聴けました。地域の方とも連携をとり活動に参加しようと思いました。（都留市50代）

ここで、一息を入れてもらいましょうということで、学生アカペラサークル「☆☆☆みつぼし」の中のグループ「ぼんかん」により、美しいハーモニーを披露していただき、後半の報告に向けてのよい息抜きになったようである。

事例発表・活動報告では、「ボランティアひろば」は学生の下平佳樹氏、内田哲也氏、「都留市ボランティア連絡会」は渡辺富士夫氏、「都留市まちづくり市民活動支援センター」は清水王也氏から日頃の活動状況等、配布した資料を基に紹介していただいた。ただ、まだまだ、市民を始め、地域の方々には、これら3団体の存在はあまり認知されていないというのが実情であり、今後の広報活動に対しても、課題が提示されたような気がした。

昼休みには、2号館前やロビーで都留市内の社会福祉関連団体（いちごいちえ、みとおし、マツダヤ、かじや）による食べ物販売コーナーも設けられた。2102教室ではソロプチミスト山梨と地域交流研究センターのフィールドミュージアムに

関する展示も行われた。

午後のプログラムでは、1時半から2時間、毎月実施している「いこいのひろば」でのクラブ活動の特別版プログラムとして、次の4つのクラブ活動を体験してもらった。

- ・「パティシエクラブ」
【ココアブラウニー作り】1号館調理室
（担当：内田哲也）
- ・「レク・スポーツクラブ」
【巨大カルタ・ソフトバレー】体育館
（担当：下平佳樹）
- ・「音楽クラブ」
【手作り楽器製作・演奏】2101教室
（担当：中村香奈）
- ・「チャレンジクラブ」
【ラッピング】2102教室
（担当：上原幸子）

参加者は、山梨県内市町村の福祉関係者を始め、大橋先生の講演会を中心に220名もの方々が出席し、盛大に開催することができた。また、県立桂高校のJRCクラブから3名が、ボランティアスタッフとして参加してくれたことは、新たな交流の芽吹きを予感できる大きな成果であると実感できた。今回のフォーラムは、都留文科大学地域交流研究センターが、都留市社会福祉協議会との共同主催ということで開催できたことに大きな意義を感じた。更に地域とともに「ボランティア」をキーワードにして前進していくことの大切さを認識したフォーラムであったと実感した。

Ⅲ－2. 各種講座の開催

(1) 都留文科大学現職教員教育講座

平成22年度

都留文科大学現職教員教育講座について

例年通り、以下の要領で現職教員講座を行った。

テーマ：教師の子ども理解と学習指導

日 時：平成22年7月28日（水）～
7月29日（木）

場 所：都留文科大学
2号館101階段教室

講座の趣旨

夏季集中講座を、例年の通り標記のように「教師の子ども理解と学習指導」というテーマで開催いたします。

現在、日本の子どもたちの学力をめぐるのはさまざまな角度から「問題」とされており、しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策がそれぞれの学校や教師に求められているのが現状だといわざるを得ません。こうした現状をどう乗り越えていくのか、また、学力とは何かという本質に迫るためにはどのような発想が求められるのかということについて参加者のみなさまとともに考えていきたいと思ひます。同時に、以上のことを考えるうえでも、一

人ひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることが決定的に重要であるということが次第に明らかになってきています。教師には、授業の場面だけでなく、地域や家庭での生活も視野に入れ、子どもの現実をトータルにとらえながら、学習の意味や学習指導のあり方を深めていくことが求められてもいます。

また、子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのかということも、具体的な課題としては重要です。単に学力を上げるというのではなく、算数・数学的な思考の重要性や子どもが楽しみながら学ぶためにはどのような工夫があり得るのかを検討したいと思ひます。

さらに今年は、どうしても「好きな子・得意な子」と「そうではない子・苦手な子」がはっきりしやすい教科である音楽の授業づくりを基礎から学ぶ講座も用意しました。「学びの身体性」という観点からも興味深いものとなることが期待されます。今回の講座では以上の内容を含む企画を準備しておりますので、ぜひふるってご参加ください。

（文責・佐藤 隆）

日 程 と 内 容

【第1日目】 7月28日（水）

会場：本学2号館101教室

午前 9:30～午前 9:45	受 講 受 付 （本学2号館）
午前 9:45～午前10:00	『講座の趣旨について』説明：杉本 光司（地域交流研究センター長）
午前10:00～午前12:00	『学力とは何か』講師：田中 昌弥（本学教授）
午前12:00～午後 1:00	休 憩（昼 食）
午後 1:00～午後 3:00	『子ども理解と学習指導』講師：山崎 隆夫（本学非常勤講師）

【第2日目】 7月29日（木）

会場：本学2号館101教室

午前10:00～午前12:00	『教科に関する研究講座Ⅰ』－子どもたちがわかる授業を作る・音楽－講師：清水 雅彦（本学教授）
午前12:00～午後 1:00	休 憩（昼 食）
午後 1:00～午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅱ』－子どもがわかる授業を作る・算数－講師：植村 憲治（本学教授）

(2) 都留文科大学市民公開講座

第1回

「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」

昨年に続き2回目の「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」を、8月5日に開催しました。今回は「葉脈しおりを作ろう」「目指せ!スライムマスター!!」の2講座を実施し、それぞれ生活環境科学(吉住)ゼミと化学(山森)ゼミが担当しました。「親子」と銘打ちましたが、平日開催もあってか参加者がなかなか集まらなかったのも、子どもだけの参加も可としました。地域の自治会や大学職員のご家族のご協力で、大人4名、子ども23名の参加していただきました。どちらの講座も楽しんでいただけたようです。

「理科離れ」が指摘されるようになって久しいですが、近年特に問題視されているのは「小学校教員の理科離れ」です。この企画は、子どもをはじめとする地域の方たちの理科への興味を伸ばす機会となることを目指していますが、小学校教員を目指す学生たちにとっての意義ある体験にもなっており、今後も継続していきたいと考えています。参加者、関係者の方に心より感謝いたします。

以下にプログラムと参加した学生の声を記します。

日 程：2010年8月5日(木)

主 催：都留文科大学地域交流研究センター、初等教育学科理科教室・生活科学教室

概 要：小学生とその保護者を対象に、自然あるいは科学に親しみ、大学を身近に感じてもらう機会を提供する。

内容、時間、場所：

(1) 葉脈しおり作り(担当：吉住典子)

10:00-12:00

1号館1階被服食物実験室

(2) 目指せ!!親子でスライムマスター!!(担当：山森美穂)

13:30-15:30 自然科学棟4階

定 員：講座ごとに20名(大人子どもあわせて)、先着順。複数受講可。

対 象：小学校3-6年生とその保護者。

この経験を生かしたい

(初等教育学科4年 宮城美里)

私たち化学ゼミは、いつもとは一味違ったスライムを体験してもらいたいと考えました。砂鉄入りのスライムに磁石を近づけたり、スライムに酢や塩を混ぜて変化を見る実験を行いました。スライムの原理を子どもたちにわかりやすく伝えるにはどうしたらいいかを考えたことは、とても勉強になりました。この経験をこれから生かしていきたいと思います。

子どもたちの笑顔が嬉しい

(初等教育学科4年 草場 裕)

私はスライムの作り方の説明を担当しました。自分たちなりに準備を重ねてきたつもりでしたが、よりわかりやすい説明ができればというのが反省点です。もっとスムーズに実験を行うことができたと思います。しかし、子どもたちが意欲的に実験に取り組む姿と、スライムができた時の笑顔が見られたので、良かったです。

奥が深いスライム

(初等教育学科4年 村上 彩)

私は、いままで楽しく作って遊んでいたスライムがどのようにできているのかをロールプレイング形式で説明しました。子どもたちには難しかったかもしれませんが、少しでも理解して興味を持ってもらえていたら嬉しいです。スライムはとても奥が深く、教える立場の私たちも知らないことが多くあり、今回の準備を通してとても勉強になりました。

第2回

「政権交代1年を向かえた民主党政権と今後の日本」

2010年度の都留文科大学市民公開講座は、「政権交代1年を向かえた民主党政権と今後の日本」と題し、本学社会科学部の進藤兵教授、村上研一専任講師（現准教授）、菊池信輝准教授の三名によるリレー講座という形式で行なった。これは、戦後初の本格的な政権交代とその影響を、政治学、経済学、歴史学のそれぞれの観点から多面的に分析するという試みであった。また、最終回では、3名による討論会を行ない、今後の動向を展望した。

まず11月1日の第1回は、市民、学生13名を集め、進藤教授が政治学の観点から「民主党政権の政治と政策」について講演した。進藤教授は2009年の衆議院選挙と2010年の参議院選挙の際の争点と有権者の意識分析を提示した上で、捉えがたい民主党の政策を鳩山由紀夫政権、菅直人政権、そして菅首相と小沢一郎元代表間で争われた民主党代表選挙などを題材にして解説し、菅政権が抱える構造改革路線と福祉国家路線の間のジレンマを明らかにした。会場からは二大政党制が日本に適合するのか、等の質問が出された。

11月8日に行なわれた第2回は、村上講師が経済学の観点から「日本経済の課題と民主党政権の経済政策」について講演した。村上講師はまず日本経済の近年の性格変化を具体的な統計数字を元に解説し、続いて民主党の経済成長戦略に鋭く切り込んだ。村上講師は構造改革の結果、日本の経済がむしろ一部の産業に依存する輸出主導型成長路線に偏奇していることを先ず明らかにし、さらに中国現地調査等を踏まえて日本企業の強みとその限界を見極め、当時の民主党政権が掲げていた、法人税減税による経済成長戦略を批判した。

会場には13名を集め、中国とのビジネスに関するリスク、TPPやAPEC等の展望

について質問が出された。

11月15日に行なわれた第3回は、菊池准教授が歴史学の観点から「過去の政権交代と比較して」と題する講演を行い、戦前の政友会・民政党間の政権交代、93年の細川護熙8会派連立政権と、今回の民主党政権の比較から得られる知見について述べた。

菊池准教授は、例として挙げた過去の政権交代が、ともに経済危機と国際問題に直面して瓦解したことに注目し、今回の民主党政権がその轍を踏みかねないことに警鐘を鳴らした。特に、経済政策の失敗が政党政治への不信を生み、ファシズムへの道を歩んだ戦前期の歴史に鑑み、今回の民主党政権に対しては短兵急な評価を出すべきではなく、国民が諦めることがないようにするよう提唱した。

20名が参加し、長期的な展望を持つべきとする講師の意見に対する批判や小沢一郎の位置づけについて等の質問が寄せられた。

11月22日の第4回では、過去3回の講師が全員揃い、過去の講演内容を簡潔に紹介した上で、討論会を行った。主に今後の日本を占う内容となり、二大政党制や二院制といった政治システム、及び多国籍企業化が日本政治に与えている影響等の目下の問題について、最新の情勢を踏まえた熱のこもった討論が行われた。

当初は会場を交えた討論会を行う予定であったが、時間の関係で、19名を集めた会場からはほとんど意見を聞くことができず、大きな反省点となった。

なお、4回を併せた延べ人数は65名であり、うち10名程度が複数回参加していた。また、参加者の中には、インターネットの"Twitter"での「講座がおもしろい、ためになる」という書き込みを見て急きょ参加した人もいた。

(3) 県民コミュニティーカレッジ講座 『多元的社会的あり方 ～国内外の事例を通して学ぶ～』

【講座概要】

国際化が言われるようになり、普段の生活の中で外国人と出会う機会も多くなりました。多文化社会を形成するための取り組みも活発になってきました。ところで、世界的にみると、言語や文化の異なるさまざまな集団が1つの大きな社会や国家を形成している、というのは珍しくありません。海外の事例を通して、多元的で複合的な社会的あり方を知ると同時に、私たちの多文化状況についても考えてみましょう。

【対象者】

在外外国人への支援活動を行っている市民、団体、または国際交流や国際化促進、多文化共生に関心がある方々など。

【会場・時間】

都留文科大学 附属図書館 4階学習室
19時00分～21時00分

【第1回】10月1日(金曜日)

テーマ：オーストラリアとボリビアの多

文化状況と取り組み

講師：重富恵子(比較文化学科専任講師)

参加者：9名

【第2回】10月8日(金曜日)

テーマ：フィリピンの多文化状況と言語事情

講師：内山史子(比較文化学科専任講師)

参加者：6名

【第3回】10月15日(金曜日)

テーマ：台湾の少数民族言語と少数民族文化を守る取り組み

講師：山本芳美(比較文化学科准教授)

参加者：5名

【第4回】10月26日(火曜日)

テーマ：日本の外国ルーツの子どもたちの取り組みと支援

講師：家上幸子(比較文化学科非常勤講師)

参加者：11名

(文責：杉本光司)

III-3. 『地域交流研究センター通信』の発行

『地域交流センター通信』の発行

1. 本年度の発行について

発行回数や発行時期、公開の仕方(配布と学内配置、ホームページ公開)などの基本的な体制が確立しており、本年度もその継続ということで18号、19号を発行した。

編集会議で巻頭文執筆者と特集内容を決定していくが、その編集会議のもとに編集小委員会を置き、編集原案作成や編集作業、さらにホームページ公開の作業などを遂行している。

本年度は編集長は畑が、また副編集長は田中夏子氏が務めた。また編集小委員会には、編集長、副編集長、編集統括者(北垣憲仁氏)、地域交流研究センター事務職員(志村夏樹氏)の4名で構成した。

2. 発行日とページ数

第18号は、2010年12月27日に発行した。44ページであり、これまでで最大ページ数となった。

第19号は、2011年3月18日に発行した。28ページである。

3. 各号の編集内容について

〔18号〕

巻頭文は、特集の内容との関連をイメージし、初代センター長の今泉吉晴氏にお願いした。ご自身が山小屋でリスとの出会いの場をつくられた、その瑞々しいご報告である。人間の側の、よく考えられた少しの工夫によって、自然のままの動物の姿を観察していけるわけで、多くの発見が記されている。リスの「個性」というべきものの観察されており、シートン動物記の成り立ちやその意味をも考えさせてくれる。フィールド・ミュージアムの思想の探究にも関わるものであり、本号の特集との関連でもよい＜響き＞をもつものとなった。

特集1を「都留フィールド・ミュージアムの到達を確認し第二ステージを見通す」とし、特集2を「都留フィールド・ミュージアムの歴史と思想をさぐる」とした。このように特集を構成することにより、諸実践を＜集中＞的に吟味することと、そのもつ意味を＜開放＞的に考察することとの双方をなりたいとした。

さて特集1に関して。フィールド・ミュージアム部門は、地域交流研究センター設立時に9年ほどの見通しをもつ「研究計画書」を作成し、それをベースに活動を展開してきた。この特集1では、その活動の展開の全体を見つめ直し、今後の方向を展望しようとした。したがって特集は、「裏山観察会」の存在の歴史、そして図書館ビオトープから始めた。

「ムリネモ」の観察の諸実践（6～9p）も意欲的に開拓されていることが伝わってくるが、ムササビ観察ということでは、とくに情報センターの充実という本学全体の機能の充実ということと相俟って可能になっていることがわかる。ライブカメラの設置と感想ノートを置くということによって、自然の生命を身近に感じるができるようになったのではないかと思う。とくに、センター職員の志村夏樹氏の活躍があったことも記しておきた

い。「キャンパスにリスを呼ぶ会」の出発も、「ネズミとモグラの出会いの場づくり」も、同じように、自然への関心を多くの方と共にしていきたいという趣旨をもつ。その関心の育み方や共有の仕方については、今後も方法的な考察（活動内容の工夫）が求められよう。

「中屋敷フィールド」は、規模は限られているが、地主の方の指導を受けながら（知恵の伝授過程を経験しながら）、休耕地を再生していく貴重な実践となっている。大型獣との共生を試みることも含め、現代社会にとってチャレンジングな普遍的な意味をもつことを考えさせる。

『奥隆行写真コレクション』は、さまざまに反響を呼んでいるが、とくに、谷村小学校（12～13p）、及び都留第二中学校（19p）の授業との交流が生まれていること、学校教育実践との交流が生まれているということ、これを焦点にして、地域社会で重要な実践展開の窓が開かれつつあるというべきである。『フィールド・ノート』の発行は、地域交流研究センターとしてその価値を多面的に検討しあうべき多くの蓄積をもつにいたっている。

理科教室による「夏休み親子自然教室」も、都留文科大学に相応しい、あらたな「伝統」を築きつつある。

都留市公民館や市立図書館を中心とする、地域の社会教育との共同の取り組みは、センター活動の骨格の1つとなるべきであるが、関われるセンタースタッフが足りないことがあって、現在はまだ細い「線」というべき状況にある。「市民グループとの協同の実践」（18p）は、市民のなかに「交流」への参加意欲があることを教えてくれる。17号で特集した「大哺乳類展」については、都留文科大学として歴史的な取り組みになったが、本号でその関わりを伝えることができた（20～21p）。

特集2は、湊秋作氏のヤマネ研究にまつわること、下泉重吉学長時代のこと、大田堯元学長の文章、あらたにスタートしている「見沼フィールド・ミュージアム」のこと、平塚市博物館の実践、ヘン

リー・D・ソローの『ウォールデン』の世界、などに光をあてた。この通信の編集をすすめていると、安藤聡彦と本学との交流のことなど、伏在していた諸関係がいろいろと見えてくる。私たちの仕事が、いつも時空を越えたもの（普遍性につながるもの）を含んで成り立っていることを、これからも意識して探っていきたい。

「トピックス」欄として、「暮らしと仕事部門」の諸実践や、子育て・教育に関する豊富な交流事業を紹介することができた。

〔19号〕

巻頭文は、この間の文大におけるボランティア活動への関心の高まりと、本号の特集内容を考え、大橋謙策氏（日本社会事業大学元学長）にお願いした。大橋氏は「新たな繋がりがつくる"未来家族"としての地域」と題して、産業構造に基礎をもつ地域社会の人間関係、イデオロギーを歴史的に振り返り、社会・産業構造が変容した21世紀の今日、あらたな地域像・家族像が求められているとし、それを「地域における新たな"未来家族"」ということばで表現している。なお、大橋氏は、大田学長時代に、都留文からの招請に応じて、教授会で講演をされたということである。

特集1は、「学生ボランティア活動の息吹と展開」とし、学生たちを中心とする大学、市民の方々、社会福祉施設関係者、社会福祉協議会との交流関係づくりの状況に光を当てた。

その交流関係づくりの中心的な部分である「文大ボランティアひろば」もすでに3年を経過したが、「障がいのある方々の余暇活動支援」など、少しずつ活動世界が広がっている様子が伝えられている（4p）。そのような諸実践・運動をエネルギーにし、いっそうの広い交流可能性を見出すステップにしようと、「第7回地域交流研究フォーラム」（2011年1月30日）が開催された。そのフォーラムも、大橋氏の講演に続き、三つの実践団体から報告がなされ、午後には「いこいのひろば」の活動の延長

として四つの体験参加の場が設定された。このように、このテーマに相応しい構成がとられ、好評であった。参加者層もかつてない広がりをもち、参加者数も200名を超えるものとなった（4～5p）。

具体的な取組みとして、ボランティアサークルなどの交流ネットの場としての「ボランティアひろば」を生み出す経緯と、そのなかから、東部授産施設「みとおし」との関わりをとおして生み出された「いこいのひろば」の実践とが紹介されている（6～7p）。

1月30日の「フォーラム」に参加された、障がいをもつ方々の就労支援センター「いちごいちえ」の職員の方からの、具体的な活動内容の聞き取りの紹介も記事とした。そこからは、この支援センターの仕事が、フェアトレードなど、社会全体につながる意味を含んで遂行されようとしていることが伝わってくる。

「ボランティアひろば」「いこいのひろば」などに関わる市民の方にも、その経験や思いを記していただいた。そこでは、交流のなかで「笑顔」が生まれることの感動が語られており、こうしたことが「ボランティア」を超えて、街の日常のこととなっていくようにという希望も述べられている。

東部授産園「みとおし」の職員の方、地域福祉活動コーディネーターの方にも、学生ボランティア活動の参加経緯や展開可能性について書いていただいた。

これらの記事の全体をとおして、複雑な交流過程を丁寧に支え続けていく上で、地域交流研究センターというものの存在が果たしている貴重な役割というものが見えてくる。

特集2は「農と山林に向かう」とした。文大では、地域の休耕地を活用するなどの「農」への取組みが複数あり、年月を重ねつつある。そうした実践一覧を見開きで紹介した（14～15p）。それらのグループの横の交流を行なう「第1回“農”大生交流パーティー」が開催され、その報告を書いていた。そこでは、「農ネット（文大生農

業ネットワーク)」を機能させていこうという方向性も語られている。こうした実践に向かう学生たちと市民の方との出会いにも惹かれる(13p)。このような市民との交流を含んで、「都留文科大学農園」というべきものの実質が見えてきている。

大学周辺の山と森林再生、地元製材業、学校林事業、そして里山での「農」にも光をあてた。いずれも地域の方々との交流なしには成立しない実践、研究、教育であり、社会的にも今後いよいよ大きな意味をもってくと直感される。

毎号、トピックス欄でも豊富な実践などに目を向けているが、たとえば、インドネシアのアチェ(スマトラ島沖地震による津波の被災地)と西桂町を結ぶフェアトレードの実践など、惹きつけられる。

4. 執筆協力と反響について

この「通信」については、執筆依頼に対して、学内外の方々がほんとうに快く協力してくださり、たくさんの方々によって支えられていることをいつも思う。

反響ということで、お手紙やメールなどの一部を紹介しておく。

「…地域に根ざす公立大学のあり方の1つのモデルとしてその活動に注目し続けています。…」(北海道・大学教員)、「…お忙しいなかでの内容の濃い冊子、と前から敬服しております。都留文科大学はヒューマンな人たちが生まれ出るところだということが分かりましたよ。…」(埼玉県・生活文化協同運動に取り組む市民)、「…長年にわたり大学が地域とこのように深いつながりを持たれ数々の実績をあげておられることに改めておどろき敬意を表したいと思います。…」(東京都国分寺市市民)、「…『地域教育フォーラム』を、大学が参加しながら地域で開いているのが素敵だなと思いつつ目につきました。…」(九州・大学教員)

また18号について、「福島第一原発」で疎開されてきた方から、次のようなお便りがあった。編集者として驚きを感じるとともに、ふかく激励される思いである。

「…地域交流センター通信を拝読しました。図書館を訪れたときに手にとりました。余震が続き、なかなか眠りにつくことができなかった夜、棚に置いていたこの冊子を手に入りました。私は今回の震災で、主人の実家のあるこの山梨へ家族6人で来て、暮らしをなんとか始めています。また福島へ戻りたいという気持ちがあるものの、この現状。先が見えず、日々の生活には穴が、見えない、誰にも見えない大きな穴があいている、(その)今、皆さんが作った通信を見たとき、ちょっとだけうまりました。<リスにクルミを…>を読み、小さな積み重ねを丁寧にしている人たちを知り、現実を少し離れることができ、また7~8年先という未来を見ることができ、涙が出そうでした。

(そのような)活動がたくさんの人共感を得て大きな輪に広がり、すべてはつながり共存していくことが、そのバランスの大切さが、小さな子どもたちへも伝わっていくとよいなと感じました。ありがとうございます。

編集はたいへんなことがおありでしょうが、がんばって下さい。」(都留市在住)

5. 2011年度に向けて(課題と発行予定)

イ) 先ず最大の課題として、地域交流研究センターのあるコミュニケーションホールの「防音」の必要性のことを述べておきたい。コミホの小ホールでは、時期によっては一日中音楽系団体の練習が行なわれ、その音が地階の地域交流研究センターにまで響いてくる。そのために、本年度は19号の発行に際し、編集作業を1週間停止せざるを得なくなった。厳しいスケジュールのなかで複雑な共同作業を行なっており、ミスのないよい冊子に仕上げていく上で危険な状況に立ち至った。

この問題については、地域交流研究センターの設置の年度から関係者に訴えてきており、本年度もセンター長、副センター長に相談し、事務局の理解も得て解決の方向を見出すことを要請したが、打開策は示されないままであ

る。これ以上の放置は、労働安全面での事業者の義務違反に通じる。

ロ) 本年度から地域交流研究センター専属の職員が配置され、地域交流センター通信の発行においても活躍してもらうことができた。ほんとうは、そうした職員の経験の継続が期待されるのであり、来年度以降、検討課題としていきたい。

ハ) 12号から原稿料を、13号からは表紙絵等料金も支払うようにしており（大学関係者以外の執筆者のみ）、その額については内規を設けて妥当な水準とするように改善してきた。ただ、ほとんどの執筆者は小額であり、現在の振込み方式だと手続きが大げさ過ぎると判断される。小額の場合は、郵送のみで対応できる方式を検討する必要がある。

二) 地域交流研究センターの大事な性格

として、センター内の三分野を超えた研究交流を行なっていく、ということがある。そのことを具体化していく方法として、「通信」の合評会というものの提案が出されている（地域交流研究センター運営委員会）。この合評会に市民の方などをお招きすることも考えられる。

ホ) この「通信」は、学内での講義やゼミの資料としても使われるようになってきているが、そういう活用経験についても情報交換し、「通信」のコラムで紹介していくとよいだろう。

ヘ) 2011年度は、20号を2011年の11月末～12月初旬に、21号を2012年3月に発行する予定である。「通信」発行においても、東日本大震災と私たちとの関連を考えていきたい。

（文責：畑 潤）

Ⅲ－4. 科目「地域交流研究Ⅲ」の開講

①授業の目的および概要

授業の目的は、山梨の風土を特徴付ける森林と水（河川）を理解すること。自然に根ざした山梨の特徴ある産業を理解すること。単に「物見遊山」的な視点で山梨を捉えるのではなく、歴史的・地誌的に地域を理解し、自らの生活を見直す

ことの重要性を体得する。

講義は「座学」と「フィールドワーク」から構成される。フィールドワークは日曜日に実施した。これらの内容は学生諸氏が大都市で就職、あるいは地元へ帰郷しても「地域」を見つめるヒントを提供するものを選定した。

②授業の内容 講師一覧

	講座日付	テーマ	講師名	所属
1	10月1日	開講式	泉 桂子	
2	10月8日	山梨の果実	堀内 圓	甲斐いちのみや金桜園
3	10月15日	富士山登山とガイドという仕事	横尾 幸江	ひめねずみ社
4	10月22日	郡内の伝統産業	前田 市郎	株式会社前田源商店
5	11月5日	山梨の歴史	小畑 茂雄	山梨県立博物館
6	11月12日	甲州選挙	杉本 仁	柳田国男研究会
7	11月19日	都留の自然と生きもの	北垣 憲仁	都留文科大学
8	11月26日	上流文化の発信	鞍打 大輔	日本上流文化圏研究所
9	12月3日	山梨の森を元気にしたい！	田中 美津江	財団法人オイスカ山梨支部
10	12月10日	だっちもねえこんいっちょし	五緒川 津平太	（本名：大堀 卓）
11	12月17日	甲州印傳	上原 勇七	株式会社印傳屋
12	1月14日	まとめ	泉 桂子	

現地視察

日 程	方 面	視 察 先
11月7日(日)	郡内地域	富士吉田歴史民俗博物館・さかな公園・環境科学研究所・尾県郷土資料館
12月5日(日)	国中地域	かいてらす・山梨県立博物館・万力公園・大日影トンネル・メルシャンワイン

③それぞれの講義から得たメッセージ・キーワードから

◆堀内圓氏

「海外交流の大切さ」「日本のモモのルーツは中国」「山梨県観光の顧客としての東アジア」／「ブドウは肩が甘く、尻は酸っぱい」「中国には盤桃という平べったいモモがある」／「モモの木のオーナー制度」：農業は知的で挑戦的な営み・世界に誇る軟らかくおいしいモモ

◆横尾幸江氏

本学卒業生／「バーチャル富士登山」持つべき用具・強行登山について注意／富士山の地誌的な成立史「富士山の青木ヶ原樹海でコウベモグラとアズマモグラが勢力争いをしている＝モグラ戦争」／ほ乳類の標本：好きなことを仕事にする・どんな仕事でも理論武装は大事

◆前田市郎氏

郡内織物を現代に活かす「甲斐絹座」／「古典柄の復活、新商品開発」／食育ならぬ衣育：教育機関との連携（小さいうちに本物に触れる）

◆小畑茂雄氏

明治40、43年の大水害「雨がとにかくたくさん降った」「お助け柿の木」／「北海道に山梨村が」「政策的な人口排出」「山梨歌舞伎・こかげさんの遺構」：近現代史を読み解くことの重要性

◆杉本仁氏

「民俗学の父といわれる柳田国男」／「葦崎出身の小林一三は宝塚歌劇団の生みの

親」／「現金の飛び交った甲州選挙」「いつもは『竹』のお寿司がある日『松』に代わっている『無尽』の意味」：山梨の濃密な人間関係、旅の大切さ

◆鞍打大輔氏

「日本でいちばん人口の少ない町・早川」「上流文化圏研究所」「野呂川総合開発」「首都圏大学との提携」「2000人のホームページプロジェクト・あなたのやる気応援事業」：地域に埋もれた宝・若い人の活躍可能性

◆田中美津江氏

「山梨県有林100周年」割り箸とパンフレットの配布「企業が山梨の森に高い関心」「地元丹波山村の高齢者たちも元気に」「普通の女性としてできること」：企業の社会貢献や環境問題に果たすNGOの役割、コーディネート

◆五緒川津平太氏

首都圏の大学に進学して気付いた山梨の方言「甲州弁は標準語よりすぐれている」「甲州弁は韓国語だった」「甲州弁は英語だった」甲州弁のアクセントの解説：どんな小さなことでも仮説を立て、まじめに検証することのおもしろさ、たとえの巧みさ、付着散布型種子の地名について意見交換

◆上原勇七氏

「社会人として大切なことは信用」「印伝の技法、更紗、ふすべ…」「洋服に合う印伝を(単なる骨董品ではない)」「戦争により印伝は平和産業のため冬の時代を迎える」「自社製品は修理可能」：よいものを長く使う、鹿皮と漆は森の恵み

④魅力メッセンジャーの認定

条件を満たした学生には29名に対し、山梨県観光部より「山梨魅力メッセンジャー」の認定証が授与された（交付式1月26日）。なお、毎回の授業受講者数約52名に対し、

認定者が5割程度に留まったことは来年度以降の課題として指摘をうけたことを記しておく（『地域交流センター通信』第19号に参加者の感想あり）。

IV. 地域貢献活動

IV-1. 山梨県地域研究フォーラムの開催

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度（平成22年度）は10月28日（木）、富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に第13回目の集会が開催された。日程については、5年前から、本学教員が参加しやすい桂川祭期間中の開催を配慮していた。

今回の第13回集会は、第1分科会：幼児小部会、第2分科会：小中部会、第3分科会：中高部会、第4分科会：小中高児童生徒部会、第5分科会：行政・地域団体・学校部会、第6分科会：特別支援教育部会、第7分科会：PTA部会、の7つの常設分科会が設置され、それぞれ2本程度の実践レポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第1分科会に吉住典子（初等教育学科）、第2分科会に杉本光司（情報センター）、第3分科会に佐藤隆（初等教育学科）、第4分科会に田中夏子（社会学科）、第5分科会に西本勝美（初等教育学科）、第7分科会に筒井潤子（初等教育学科）と、6つの分科会に本学教員を充てることができた。

今回の第2分科会：小中部会においては、提案者として、『情報機器を学校現場で生かすために』と題して、国文学科4年生の鷲野紗知さん、社会学科2年生の菊地見成さんが、所属する児童文化研究部での活

動の1つである、影絵劇を通して、都留文科大学付属小学校の6年生とのテレビ会議システムを利用した遠隔授業の実践活動の状況を紹介した。

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」（地域の子どもは地域で育てる）をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有している。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留という、より広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれなかと事務局と意見交換もしているが、実現は難しいようである。

この点で、5年前から、集会に先立つ10月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前に打ち合わせをおこなう機会を設定していただいたのであるが、主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一歩進められたと言えよう。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はきわめて高く、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。このような形

での本学教員の「地域教育」への貢献が切実に求められており、実際に、本学教員が果たせる役割が大きいことを再認識させる結果であった。引き続き、事務局（富

士・東部教育事務所地域教育支援担当）との連携を密にしながら、より発展的な協同のあり方を追求したい。

（文責・杉本光司）

IV-2. 文大ボランティアひろば

1. 「文大ボランティアひろば」とは

本事業は、平成20年度に開始された取り組みである。平成20年5月に、都留市社会福祉協議会の森嶋美子氏と、西本勝美地域交流研究センター長（当時）とで相談・打ち合わせをおこない、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなった。ただし、福祉系の学部・学科を持たない本学では、授業とタイアップした取り組みは難しく、「大学ボランティアセンター」の設置はさらに難しい。そこで、学内にある学生ボランティアサークルを土台として、緩やかな「連絡協議会」的な会合を持つところから始めることになった。相談過程で重視し、両方で共有した「原則」は、

- ① ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。
- ② それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
- ③ 活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。

といった事項であった。本事業の発展的継続にあたっては、常にこれらの「原則」に立ち戻りつつ、取り組みを見直していくことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会（森嶋氏）からの呼びかけと日程調整を経て、平成20年6月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の3団体であり、平成21年度からは、学内の「Work-Waku都留」も主軸サークルの1つとして参加した。会合の内容は、前回の会合以降の各団体

からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域のボランティア・コーディネーターからの意見などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、サークル各団体にとっては、近場のボランティアニーズを周知できること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて各団体の活動が活性化されることが大きい。また、会合の名称については学生たちの発案に委ね、最終的に「文大ボランティアひろば～だれでもどうぞ～」(略称：ぼらひろ)と命名された。この名称は、各サークルには所属していない個人としての学生や、一般の住民の参加も歓迎するという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は発足以来、基本的には第4水曜日の午後6時15分から本学の教室にて開催されることとなったが、回数を重ねるにつれて、各サークルの活動を超えて、参加サークルや個人が協働しておこなう活動への期待も高まり、先ず「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける」活動に取り組むことから始まった。学内の5カ所に回収ボックスを設置し、各サークルが当番で回収している。さらに、ボランティアひろばでは、新しい取組みを始める際には、その都度、新しいプロジェクトチームを立ち上げて対応することにした。こうした中から、平成21年度には「障がいのある方々の余暇活動支援」について新たな取組みが開始され、同時に、ここに参加する学生もこれまでのような部活動やサークル活動に属しない個人参

加学生も迎え、定例会には毎回20名を超す学生・社会人が参加するようになり、徐々にではあるが、学生たちの間に着実に浸透しつつあることを実感できるようになった。学生と社会人とをつなぐ調整役として地域交流研究センター長の杉本光司も出席している。

2. 「いこいのひろば」の誕生

ボランティアひろばでは、社会福祉協議会や市内の組織・団体を通して募集される、学生ボランティアの要請に対して、積極的に多種多様な活動に参加してきたが、以前から、そのボランティア活動に参加している、市内の授産園「みとおし」で働く人たちとの交流の中から、日常的に、障がいのある方々への支援が、何かできないだろうかという声により、2009年6月に「ここに集うメンバーで、とにかく何か一緒に始めてみよう!」という新たな目標が掲げられた。そして、当初から中心メンバーの一人として参加している、「授産園みとおし」の佐藤保成さんから提案されていた、「障がいのある方々への余暇活動支援」の実現のための取組みを行うことにした。「文大ボランティアひろば」の交流から派生したプロジェクトとして位置付けることにより、関心のある人たちが気軽に参加できる場として、その名称も『いこいのひろば』と名付けた。「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちがみんなが楽しく充実して過ごせる地域」を目指し、学生だけではなく、地域に住む方々と共に、1ヶ月に1度イベントや企画を定期的に行えることを目的としたプロジェクトである。そこで、障がいのある人たちとその身近にいる人たちの声をじっくり聞こうということで、この新しい活動は2009年7月1日に始まった。

今年度は、この活動を毎月1回開くことを目標に、活動母体となる体制づくりから始めることにした。

まず、活動指針となる企画書の作成であるが、先進組織としている、東京都渋谷区恵比寿にある、知的障害者恵比寿教室「えびす青年教室」で作成した企画書を参考とさせていただいた。この、「えびす青年教室」は、渋谷区教育委員会が、主に知的障がいのある方々の社会教育活動の支援並びに、社会的ハンディキャップを背負った社会参加の一環を助成するため、障がい者ボランティアと一緒に活動できる場・プログラムを提供することにより、障がい者とボランティアの人間の成長、相互理解・信頼関係の構築等を図ることを目的として、原則として毎月一回支援プログラムを開催し、積極的に活動している場所である。昨年度は、数名の学生たちが、この教室に研修参加させていただき、自分たちの目標とする活動として再認識できた。

余談であるが、今年度の第7回地域交流研究フォーラムにおける基調講演者の大橋謙策先生は、この「えびす青年教室」の創立に向けて寄与した方のお一人であったと、大橋先生から直接お聞きした時は、不思議な縁を感じた。

☆「いこいのひろば」企画書（一部抜粋）

(1) 事業目的

障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちが全員が楽しく充実して過ごせる地域づくりを目的とする。

(2) 主催者

いこいのひろば実行委員会

(3) 対象者

知的障がいのある人で、都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」まで通うことのできる18歳以上の人。および、こうした活動に関心のある人。

※ 原則として登録者が活動に参加できることとする。

※ 知的障がいのある人で、18歳以上の人のことを「参加者」と呼ぶ。

※ 参加費を毎回100円程度集金する（プログラム内容によっては追加

料金)。

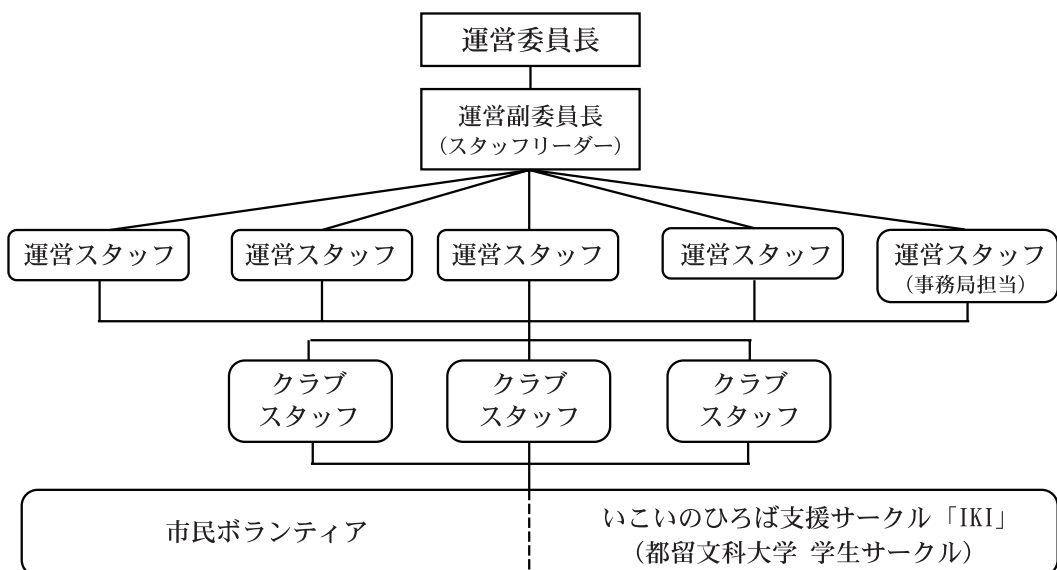
(4) 開催場所・回数・時間

- 原則として都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」で行い、プログラム内容によって館外で活動することもある。
- 原則として毎月1回、第3日曜日、年間10回(8月・2月休み)。
- 開催時間
参加者：午前9時45分～午後3時30分。
スタッフ、ボランティア：午前9時00分～午後5時00分まで(事前準備、反省会含む)。

(5) 運営体制・組織図

本事業の目的を達成するために、参加者の要望をふまえたプログラムを安全かつ丁寧に実施していく必要がある。そのために、障がい者生活支援の経験のある方に組織に入ってもらい、スタッフ、ボランティアの勉強会も適宜行っていく。プログラムの企画・運営はスタッフとボランティア中心で行うが、希望やプログラムに応じて参加者も参加する運営体制をとっていく。また、ボランティアは、人数把握や個人情報保護の観点から参加者と同様に登録制にする。

【組織図】



(11) 「いこいのひろば」 当日までの作業準備の流れ

★反省会★

- ・プログラムの反省と、参加者の様子について
- ・次回企画担当者の進行状況確認
- ・次々回の企画担当者決定
- ・希望者によるプチお茶会

★定例会1回目★

- ・プログラムの検討と決定、クラブ活動内容案報告その検討と決定
- ・いこい通信の内容案提出と決定
- ・次々回プログラム案提出と検討

★定例会2回目★

- ・プログラムの調整確認、および「いこい通信」発送作業
- ・次々回プログラム案の検討

★出欠席受付期間（〆切：定例会③の前日）★

- ・事務局担当が出欠席連絡受付（参加者、市民ボランティア）
- ・IKIの代表者は、会員の出欠席確認をして事務局担当に連絡
- ・新規参加者、ゲストボランティアの受付

★定例会3回目★

- ・参加者、スタッフ、およびボランティアの出欠席確認
- ・プログラム最終調整
- ・スタッフとボランティア、担当およびグループ決め

★前日準備 ※必要ならば★

- ・出欠席最終確認（新規参加者とボランティアの名札準備）
- ・当日のプログラム最終確認
- ・当日の資材や場所等の準備

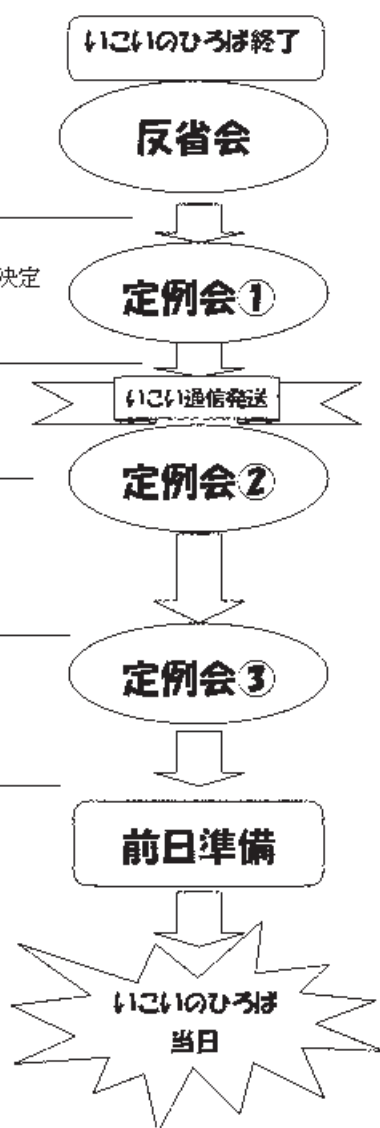
※基本的に、定例会は月3回行われる。

※反省会の時点で、企画担当者は次回と次々回分決まる。

Ex: 5月の反省会⇒6月決定済み、7月の担当者決定。

※運営副委員長と企画担当者は、ほぼ必ず毎回出席。

他の人たちは、1回目には出来るだけ出席する。



この企画書を基に平成22年10月10日に第1回目の「いこいのひろば」を開催することになり、いよいよこの活動がスタートした。

☆【「いこいのひろば」開催の状況】

◎第一回：平成22年10月10日（日）

午前9時45分から午後3時20分

場 所：都留市保健福祉センター

いきいきプラザ都留

参加者：14名、

スタッフ・ボランティア21名

・「いこいのひろば」の紹介

・クラブ体験（文化系クラブでのお菓子作り、講師：内田）

・クラブ体験（レク&スポーツクラブでのダンス教室、講師：浜田）

◎第二回：平成22年11月20日（日）

午前9時45分から午後3時20分

場 所：都留市保健福祉センター

いきいきプラザ都留

参加者：12名、

スタッフ・ボランティア14名

- ・園芸活動（グループ毎にプランターへ花を植え、手作りの飾り付けを作成）
- ・クラブ体験（文化系クラブでのドライフラワーと花しおり作成、講師：内田）
- ・クラブ体験（レク＆スポーツクラブでの手品体験、講師：下平）

◎第三回：平成22年12月19日（日）
午前9時45分から午後3時20分
場 所：都留市保健福祉センター
いきいきプラザ都留

参加者：14名、

スタッフ・ボランティア17名

- ・クリスマスケーキ作り、センター入り口の大クリスマスツリーへの飾りつけ
- ・クリスマスに相応しいゲームやレクレーション後、ケーキへの飾り付け、講師：内田）
- ・お茶会とプレゼント交換会



◎第四回：平成23年1月30日（日）
午後1時30分から午後3時20分
この回は、第7回地域交流研究フォーラムにおけるプログラムの1つとして、

フォーラム出席者にも自由に参加してもらえるような特別メニューを用意した。

- ・「パティシエクラブ」【ココアブラウニー作り】1号館調理室（講師：内田）
- ・「レク・スポーツクラブ」【巨大カルタ・軽スポーツ】体育館（講師：下平）
- ・「音楽クラブ」【手作り楽器製作・演奏】2010教室（講師：中村）
- ・「チャレンジクラブ」【ラッピング】2102教室（講師：上原）

なお、第五回「いこいのひろば」を平成23年3月20日に実施することに向けて準備していたが、3月11日の東日本大震災により開催中止とした。

3. ホームページの運用

都留文科大学のホームページ内の『地域貢献活動』の中の「文大ボランティアひろば」のサイトを平成21年度に立ち上げ、活動報告を中心に記事の掲載をしている。このサイトの運用には、学生だけでなく、市民の方も関わり、それぞれが記事や写真の投稿を行い、責任者に任せるのではなく、みんなで作り上げるホームページの運用を目標にしている。

内容は、「ボランティアひろばって?」、「今後のイベント」、「参加している人たち」、「次回の打ち合わせ」、「エコキャップ回収状況」、「会議録」、「記事の投稿やひろばに参加する方法」等を掲載している。

（文責・杉本光司）

IV-3. 都留市子ども教室事業

1. 「子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年

度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども教育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会社会教育課生涯学習担当が事務局を担って実施している6年目の事業である。「学校の体育館やグラウンド、図書

室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、平成16年度から20年度までの5年間は、本学教員の西本勝美（初等教育学科）が、21年度からは杉本光司（情報センター）が大学側のコーディネーターを担当してきた。なお、平成19年度より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となるなかで、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、本年度はこの運営形態での4年目となる。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、4地区（東桂、宝、谷村第二、旭の各小学校区）の住民の協力体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小学校が体育館やグラウンドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない場合も多く、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約にもかかわらず、今年度も積極的に参加する学生がおり、

リピーター学生が少なくない状況からも学生たちに高い評価を得ている結果としてとらえることができる。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習や「学校参加（SAT）」とはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになるう。

2. 今年度の活動状況

前年度に引き続き、東桂、宝、谷村第二、旭の4小学校区において、各地域協働のまちづくり推進会などの協力を得て子ども教室が実施された。小学校のグラウンドや体育館、公民館などの小学校周辺の公共施設、野外などにおいて、遊び、自然・農業体験活動、料理、文化的活動、ものづくり活動、その他特別活動や交流活動が実施された。

教室名 (開始年度)	実施 回数	延べ参加者数 (登録者数)	延べ指導員数 (学生含む)	主な活動内容
桂子ども教室 (H16～)	43回	625人(118人)	199人	・遊び（スポーツ、昔の遊び、ゲートボールなど） ・自然体験（野菜作り、山歩き、釣りなど） ・ものづくり（手芸、陶芸、竹馬作りなど） ・料理（収穫した野菜でお菓子作り、もちつき、小正月の団子など） ・その他（絵画、将棋、囲碁、書道、学習支援、座禅、ボランティア活動など）
宝っ子クラブ七里 (H18～)	43回	504人(46人)	183人	
三吉子ども体験教室 (H18～)	43回	578人(56人)	155人	
旭子ども教室 (H19)	41回	459人(20人)	192人	

本年度(平成22年度)は、東桂小、谷二小、宝小、旭小の4拠点校から、年間で計59回・127名の学生指導員派遣の要請があったのに対し、計56回(20年度:34回、21年度:59回)、延べ97名(20年度:52名、21年度:90名)の学生を派遣することができた。

3. 放課後児童健全育成事業(学童保育)との連携について

今年度からは、全4教室において学童保育の子どもたちにも「子ども教室」へ

の参加を積極的に呼び掛け、学童保育を実施していない日(日曜日など)にも、一緒に活動できる居場所として「子ども教室」を開催し、連携を図った。

4. 指導員についての課題

平日に活動をする遊びの指導が不足している。特に子どもと一緒に遊べる指導員が少なく、学生を頼りにしている部分が多い。

(文責・杉本光司)

V. 地域交流研究教育プロジェクト

1. 本活動の経過と活動概要

「たんぼクラブ」は、2005年度から、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに始まった活動で、以来、本学近くの水田で学生と教員の有志が稲作に取り組んでいる活動である。当初の2005年度～2007年度の3年間は農務事務所の計らいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置付けられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、「環境ESDプログラム」との関連もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し、採択された。2010年度はプロジェクトとしての初年度であった。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え(手植え)、除草、稲刈り、はざ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も曜日毎の当番制でやり切っている(代掻き、秋起こし、脱穀・精米はJA等に依託)。田植え以後の無農薬

栽培と、有機質肥料の使用によるぎりぎりの低農薬米への挑戦も一つの目的としている。

2010年度は、活動2年目となる社会学科の一部学生の提案により、「学生主体」の運営が目指され、前年度の作業日程・作業内容を踏襲しながらではあるが、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができ、晩秋の収穫祭も、これまでにない盛り上がりを見せた。なお、「環境ESDプログラム」の実習系への位置付けについては、同プログラムの実施が2011年度に延期となり、さらに実習系の履修は2012年度以降となったが、プロジェクト3年目となる2012年度には実現の見通しである。

2. 参加学生たちの感想から

「たんぼクラブ」の活動に参加した学生たちは、稲作体験をどのように受け止め、何を身に付けているのだろうか。本活動も2010年度で6年目となり、経験の蓄積と学生たちのつながりは、当初の教員側の素朴なねらいを超えた活動の内実を生み出してきているようである。「環境教育GP」の報告書との重なりもあるが、この間に集約したいいくつかの感想から探ってみたい。

(1) 初体験と全過程への関わり

- ①「私にとって初めての米作りでした。一人暮らしを初め、自分で米をといて炊くようになったことで、米に対する関心が高まっていたのと、一部分の工程を抜粋して行うのではなく、最初から最後まで自分達の手で行うという点もやりがいがありそうだなと思い、参加しました。米作りで大変だなと思ったことは、水見です。夏休みもローテーションをくんで、毎日誰かしら水見に行きました。…」
- ②「小学生の頃、一度田植えをしたことはあったけど、草取りや、水見は、全部農家の方にまかせっきりでした。今回、たんぼクラブで活動したことは、楽しかった、の一言では片付けられないし、本当に貴重な経験だったと思っています。どんな作業も、慣れるまでに時間がかかったし、慣れてくると、その作業の辛さにお手上げ状態でした。…」

ほとんどの学生が、米づくりは初体験というところからのスタートであったが、田植えと稲刈りのみといったイベント的・部分的な農業体験ではなく、全過程に携わる活動への関心と意欲があったようだ。「全過程に携わる」ことは、教員メンバーが当初から意図していたことでもあり、農業という営みをそれなりのリアリティにおいて認識し、疑似体験するためには欠かせない観点であると考えていたが、そうした体験をあらかじめ期待していた学生も少なくないことがわかった。

(2) 農業という労働の本質に触れる

- ③「私は、今までお米を作ったことがなかったのですが、たんぼクラブを通じ、お米作りをしたことは、とても貴重な体験になりました。実際に体験してみると、種を播く作業、苗を植える作業、草取りをする作業、水量の調節などやらなければならない作業が、多くあることを学びました。なかでも一番大切だと思ったのは、日々

の水管理です。曜日ごとに担当者を決め、水量を管理していたのを、今はとても懐かしく思います。…」

- ④「米を通して学んだことがたくさんあった。種粃を播くことから始まり、田植え、稲刈り、脱穀と過程を進めてきて、どの工程も大きな労力を必要とし、大変だった。水見も体験して、苦勞を知るとともに、その重要性がわかった。…」
- ⑤「…1日でも放っておくと、土が乾いて地割れをおこしたり、かといって水を入れっぱなしにすると、水温が下がって藻が沢山生えてしまいます。米を作るということは、ほぼ毎日稲と付き合っていかなければならない、とても手がかかることなのだと感じました。」
- ⑥「今回たんぼクラブの活動に参加し、改めて農業の大変さや収穫までにかかる時間の長さを実感しました。活動には部活動の関係で水見までしか参加できなかったのが残念ですが、このような機会は滅多にないので、本当に良い経験になりました。」

学生たちの感想は、米づくりに必要な工程の多さ、各工程の重要性、各工程に関わる労苦―「どんな作業も、慣れるまでに時間がかかったし、慣れてくると、その作業の辛さにお手上げ状態でした」―、タイムスパンの長さへの気付きに集中している。

とりわけ「水見」の体験は強烈であるようだ。週1回・朝夕の当番制ではあったが、一人ひとりに課せられた責任の重さと作業の微妙さ・難しさは、学生たちに予期せぬ負担を強いた一方で、その負担感のなかから、「ほぼ毎日稲と付き合っていかなければならない」農業という労働が、自分の生活を大きく制約してくるものであること、言い換えれば、「生活を形作る」ものであることへの気付きを促したと思われる。週1回でも責任を持って続ければ、それを長期にわたって毎日続けることの「労働」としての「本質」は想

像の及ぶところとなる。

また、学生たちの感想には、自然の摂理や作物の生長、各工程の科学的根拠と妥当性への認識の深まりが散見されるが、それが農業という人間労働にそくして看取されている点も、「学生による農業体験」の重要な一面であろう。

(3) 農業の愉しみと喜び

学生たちは、予想以上の作業の辛さや難しさに当惑しながらも、「稲は生き物であって毎日水見をして調節しなければなりません」「稲が青々と育つ姿が毎日楽しみでした」といった言葉に表れているように、作物の生長に寄り添う「愉しみ」をも感じ取っている。そして、収穫・食の「喜び」に至る。

⑦「・・・正直面倒だと思ったときもあったけれど、お米を収穫できたときは本当に嬉しくてたまらなかったです。むしろ大変な思いをしたからこそ、収穫の喜びは大きかったのだと思います。そして自分たちが作ったお米は本当に美味しい！本当にいい体験ができてよかったです！」

⑧「自分達で育て、収穫した米は格別においしい。感謝の気持ちを忘れずに、一粒一粒、じっくり味わいたいと思う。」

⑨「・・・しかしその分、自分達で作った米を初めて食べた時はとても嬉しかったです。炊き込みご飯も白いご飯もたくさんいただきました。食が輸入に傾いてきている中、自分達で食べ

るものを自分達で作るという貴重な経験ができました。

⑩「いつも天気恵まれなかったのも、作業の辛さに拍車をかけていました。もしあんまり美味しくないとお米ができて、自分が作ったお米なら美味しいだろうな、くらいに思っていたけど、収穫したお米は本当に美味しくて、家族や友達に自慢していました。この経験を、また来年のたんぼクラブにも生かしていけたらいいなと思います。」

学生たちの「喜び」は、単に「労苦の果ての喜び」に止まるのではなく、いわば「自ら食を作り出す」ことへの「喜び」であるように思われる。それゆえにこの体験は、少なからぬ学生たちにとって、新たな自己認識をもたらし、社会への新たな視野を拓く契機となっているのではないだろうか。

3. 2011年度の活動について

2011年度はプロジェクト継続2年目の活動となるが、2010年度にも増して学生主体での運営意欲が高まり、農業系サークルの1つとしての活動を開始し、さらに農業系サークルの連絡協議会である「農ねっと」の一環をも占めることになった。

また、2011年度は新たに「水苗代」に挑戦し、田植えも「一本植え」に挑戦したいとの提案があり、中心メンバーで長野県佐久市の農家に研修に出かけるなど、意欲的なスタートを切っている。

V-2. 大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査

1. プロジェクトの概要

(1) 目的

〈目的〉都留市の面積の8割以上が森林であるが、その状態は必ずしも良好ではない。本プロジェクトでは大学周辺の根田入山市有林において林相の調査を行い、樹下植栽を行いそれを観察

することで、都留の自然条件下でどのような森林づくりを行っていくことが可能なのかを明らかにする。内容は、都留市より学生実習用に借り受けた森林約1haについて測量、測樹、不要木伐採、植栽を行って、その動態を記録、観察する。

- ①教育活動、研究活動を安全に行うためには林内の環境整備が大切であることから、不要木・危険木を伐出する。
- ②伐採後の森林の動態を調査し、成立樹木数が森林を回復させるのに不十分であると判断された場合には、植栽を行う。
- ③植栽木が陽光を確保できるように草刈りを行う。
- ④植栽木、残存木の成長過程を捉えるために、少なくとも1回の測樹を行う。
- ⑤森林の把握にあたっては現地の生態学的、測樹学的調査だけでなく、社会経済条件の聞き取りも重要である。都留市内の財産区、地域の団体等を調査し、往時の森林利用について調査する。

(2) 2009年度までの経緯

やまびこ競技場裏の都留市市有林1haを2008年度春に借り受けた。貸借にあたって山梨県森林環境部の「森づくりコミッション」制度を利用した。名称は「道路(どうじ)の森」とした。この森に関わって本学の他、山梨県富士・東部林務環境事務所(賃貸仲介者)、地域の林業会社(作業請負)にご協力いただいた。林相は放置されたアカマツ人工林である。上木に広葉樹が混交(ケヤキ・コナラ・ミズキ等)、下層はハナイカダ・クロモジが優先している。2009年10月の台風、2010年冬の積雪により倒木被害を生じた。

2008年度、2009年度フィールド体験において林内での下刈り作業、樹種同定実習などを継続して行ってきた。

2009年9月夏期集中授業「フィールドワークIV」において、道路の森での測量・毎木調査を行った(「2009年調査」とする)。まず、道路の森の周囲測量をポケットコンパスを使って行った。ほぼ方形、約100×100mの森である。次に植生調査のため、水平距離50m×30mの範囲に10m×10m格子に杭を打ち込んだ。最後に植生調査を行った。プロットの座標毎に胸高直径5センチ以上の毎木について樹種、胸高直径、樹高、上層木・下層木の別、生存・枯死の

別、プロット内の位置、備考を記録した。アカマツの立木本数は224本/ha(なお、下記要旨執筆時点から更に調査を進めたために数字が異なっている)、アカマツの枯損率は46%(立木に枯死個体が占める割合)、生存木の平均樹高は22.5mであった。枯損は松食い虫によるものである。

2. 今年度の活動報告

(1) これまで活動内容の公開

4月、日本森林学会第121回大会(筑波大学)において「文科系大学における地域の森林を活かした教育への取り組み」と題してこれまでの活動内容を発表した(発表要旨は以下のHPで公開。http://www.jstage.jst.go.jp/article/jfsc/121/0/75/_pdf/-char/ja/、なおこの内容の一部は2010年2月の地域交流研究センターフォーラムでも発表したの2009年度年報を参照されたい)。フロアからは「東京大学富士演習林との提携を考えるべきだ」「是非本学との演習林提携を検討いただきたい」などの意見が出された。

(2) 危険木の選木と伐採

2009年度調査より明らかになった枯損個体は林内作業時、危険となるので2010年5月、山梨県中央森林組合に委託して伐採、搬出を行った。この際地ごしらえを行い、林内の歩行ができるようにした。伐採木の選定は2009年調査結果に基づいて行った。

(3) 社会学科環境・コミュニティ創造専攻「フィールド体験」での活用

5月28日、6月4日、25日、7月2日に上記科目(1年生必修、履修者各回とも20人強)において、道路の森で下草刈り、樹木観察、森についての外部講師講話を内容とする実習授業を行った。本科目は環コミの学びの核をなす基幹科目であり、道路の森のように身近に活用できるフィールドがあることの意義は大きい。なお4月23日、5月7日も同様の授業を予定して

いたが、雨のため授業内容を変更した。

(4) 社会学科「フィールドワーク」での活用

8月16～19日まで上記科目(履修者5名)において、道路の森の周囲測量、測樹調査を行った。なお地域の有志の方2名に外部協力者として指導を仰いだ。2009年度調査で道路の森には約247本の樹木があることが明らかになったが、2010年度は前年の172までしか調査を終了できなかった。そのため定量的な比較は行えないが、以下の傾向が見られた。

- ①樹木に添付した番号(ナンバーテープ)の紛失が多いため、恒久的なナンバリング方法を考慮する必要がある。
- ②胸高直径は肥大している(測定者による測定誤差が少ないと考える)。
- ③胸高直径に比べて樹高は測定者による誤差が大きい(前年に比べ小さく測定されている個体がある)。
- ④樹種の同定に当たっては外部協力者の知見が生かされた。

次に授業に参加した学生の感想を抜粋する(□内は泉注)。

【Aさん】Iさんが山の中での単独行動は何かあったときに危ないから、2人以上の複数で作業をしたほうがいいといわれた。その通りで、木が茂りはじめているところにハチの巣があった。言われなければ気付かなかったと思う。[中略] 傾斜の急さ、草木が繁茂していて、[測量は]1日目1番のきつい作業だったと思う。暑さもかなりこたえた。2日目、樹木調査をみんなで行った。[中略]先輩たちはこのデータを1から作ったというのだからすごいと思う。[中略]樹高を測るバーテックスは、木の1番高いところを見るのにいい場所を見つけるのがなかなか難しかったりしたが、スムーズにできるようになると楽しくなってきた。

た。また、樹木調査はチームワークだと思う。役割分担がきちんとし、周囲の状況に気づけること、相手を助けられる体力の余裕が大事である。[中略][測量は]普通、ポールマンが上司の役目で、コンパスが部下の役目だと聞いて驚いた。ポールマンがそんなに重要な役目だと思っていなかったの、それからは気を引き締めた。

【Bさん】樹木測量で胸高直径を測り、ラッカーをつける係を担当した。途中、Iさんの提案で作業分担をきちんと決めたのが良かった。去年のデータを読み取るのに時間がかかった。プロット内の樹木で樹木の同定間違いらしき個体が見つかった(座標上の木と実際の木が異なっていた。ただし、胸高直径や樹高はおおむね同じだった)。正確に記録し、すぐに確認をすることは手間のかかることだ。しかし、いっけん手間のかかる作業でも結果的には作業の効率を良くし、より正確なデータをとるために必要なことである。データを次に読む人のことも考えて、再現性のあるデータ収集が必要と感じた。そのためには樹種の正確な同定、プロット内の座標をある程度正確に記録することが必要である。／全体を通して遠く離れた人に何かを頼むこと、作業分担をあらかじめ決めておくことが全体を通してできていなかった。

【C君】フィールドワークにおいて、いかに自分が森林のことを知らないかが分かり、もっと森の情報に対して敏感になり、それを自分の知識として定着させる必要があると強く感じた。というのも、フィールドワークに協力してくださっ

た先輩方の知識と自分のそれとの差が、歴然としていたからである。大概の樹種の同定はこなせてしまうし、分からなかったとしてもある程度の検討を起てて本を調べて同定を完了させていくその姿は、まさに、手慣れている、といった様子だった。

実際の山に入らなければ得られない学びが体得できたといえよう。チームワーク、先達の経験の大切さなどを学ぶことができたと評価する。

3. 今後の課題

地域の方に歴史的な森林利用について聞き取りを行うこと、林床が疎開しているので、下草の管理、または高木性の樹木の植栽などの措置が必要と考えている。また樹木調査を継続的に行っていきたい。そのためには筆者のスキルアップも必要なので、坂田研究室の調査に同行するなどして経験を積んでいきたい。

(付) 2010 (H22) 年度 地域交流研究センター担当教職員

杉 本 光 司	情報センター教授	地域交流研究センター長
佐 藤 隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長・ 発達援助部門担当
畑 潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長
坂田有紀子	初等教育学科教授	フィールド・ミュージアム部門担当 (平成22年度学外研修)
田 中 夏 子	社会学科教授	暮らしと仕事部門担当
鳥 原 正 敏	初等教育学科准教授	フィールド・ミュージアム部門担当
品 田 笑 子	センター特任教授	地域教育相談室担当
北 垣 憲 仁	センター特任准教授	フィールド・ミュージアム部門担当
小 林 泰 憲	学生課長補佐	地域交流研究センター事務局
志 村 夏 樹	センター担当事務職員	地域交流研究センター事務局

2010 (H22) 年度 地域交流研究センター運営委員会委員

福 田 誠 治	副学長	菊 地 信 輝	広報委員長
西 本 勝 美	初等教育学科	楠 本 六 男	国文学科
鷲 直 仁	英文学科	渡 辺 豊 博	社会学科
伊 香 俊 哉	比較文化学科	重 原 達 也	学生課長
深 澤 祥 邦	企画広報担当	田 中 一 利	市民代表

2012年 8 月12日 発 行

編 集 者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
電 話 0554-43-4341

印 刷 者 株式会社 佐野印刷
〒402-0052 山梨県都留市中央 2-7-3
電 話 0554-43-1611
